浜松城跡14

Hamamatsu Castle
The 33rd and 34th excavation report

浜松市教育委員会

2021年3月

Hamamatsu Municipal Board of Education,March,2021

浜松城跡 14

HAMAMATSU CASTLE

The 33rd and 34th excavation report

Hamamatsu Municipal Board of Education

2021

浜松市教育委員会

1　調査区（大手門周辺）から北方向を望む　　左手奥に天守曲輪がみえる

2　調査区（大手門周辺）から東方向を望む　　交差点より奥へ延びる道は近世東海道の道筋

巻頭図版　2

1　34 次調査区東部完掘状況（真上から　南が上）

2　34 次調査区西部作業風景（北西から）

34 次調査出土瓦

1　34 次調査出土軒丸瓦・丸瓦

2　34 次調査出土軒平瓦・平瓦

例　　言

1　本書は、静岡県浜松市中区紺屋町 217 番 18、217 番 19、217 番 20、217 番 21 および元城町 217 番４、217 番５における浜松城跡 33 次・34 次調査の発掘調査報告書である。

2　発掘調査は、集合住宅建設事業に先立ち実施した。現地発掘調査及び整理作業・報告書刊行作業は、事業主体であるセキスイハイム東海株式会社からの依頼を受けて、浜松市教育委員会（浜松市市民部文化財課が補助執行）が行い、実務の一部を浜松市から委託を受けた株式会社イビソクが実施した。調査にかかわる費用は、セキスイハイム東海株式会社が負担した。

3　発掘調査の面積と期間は、以下の通りである。

33 次調査　　調査面積　　200 ㎡
　　調査期間　現地調査　令和２年４月 16 日～５月１日
　　整理作業　令和２年５月１日～令和３年３月 26 日

34 次調査　　調査面積　　389 ㎡
　　調査期間　現地調査　令和２年６月 15 日～９月２日
　　整理作業　令和２年９月２日～令和３年３月 26 日

4　33 次調査は、鈴木京太郎（浜松市市民部文化財課）、川西啓喜（同）が担当し、安川あや（同）、渡邊三恵（同）が補佐した。なお、遺物写真撮影と報告書全体の編集作業は 34 次調査分とあわせて株式会社イビソクに委託した。

5　34 次調査は、鈴木の指示のもと、生駒昌史（株式会社イビソク）が担当し、壁谷奈央（同）、青木優（同）が補佐した。整理作業は生駒と壁谷が担当し、田中夕佳（株式会社イビソク）と今西菜見（同）が補佐した。

6　本書の執筆は、第１章１・４（１）、第２章、第４章３を鈴木、第１章２・３、第３章２の遺物、第４章１を壁谷、それ以外を生駒が行った。現地における写真撮影は、33 次調査を鈴木、34 次調査を生駒が担当し、一部を鈴木と和田達也（浜松市市民部文化財課）が行なった。遺物写真撮影は横山亮（オフィスメガネ）が行った。本書の編集は、生駒が担当し、今西が補佐した。

6　調査にかかわる諸記録及び出土遺物は、浜松市市民部文化財課が保管している。

7　調査及び本書の作成においては、下記の方々および機関のご協力、ご教示を得た。記して謝意を表したい（順不同、敬称略）。

藤澤良祐、佐野一夫、中野晴久、株式会社淺沼組、しろはく古地図と城の博物館富原文庫

凡　　例

1　本書で用いる座標値は世界測地系（第Ⅷ系）に基づく。方位（北）は座標北、標高は海抜高である。

2　本文中の引用文献等の表記については、以下のように略す。

教育委員会　→　教委　　（財）浜松市文化振興財団　→　浜文振

3　土層・土器の色調は『標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修）に準拠した。

4　本書における遺構の略号は以下の通りである。

柱列跡（SA）、溝（SD）、土坑（SK）、小穴（SP）、不定形遺構（SX）

5　遺物図の断面網掛けの使用例は以下の通りである。

土師器・土師質土器　陶器（K＝40％）　磁器（K＝20％）　石製品

6　遺構、遺物の番号は調査次数ごとに付している。

浜 松 城 跡 14

目　次

例　　言
凡　　例

第１章　序　論 …… 1

1　調査に至る経緯 …… 1
2　地理的・歴史的環境 …… 2
3　浜松城跡の調査歴 …… 7
4　調査の方法と経過 …… 12

第２章　33 次調査の成果 …… 15

1　概要 …… 15
2　検出遺構と出土遺物 …… 17
3　小結 …… 31

第３章　34 次調査の成果 …… 33

1　概要 …… 33
2　検出遺構と出土遺物 …… 34
3　小結 …… 64

第４章　後　論 …… 69

1　33・34 次調査出土の軒瓦について …… 69
2　堀と土塁について …… 77
3　今後の課題と展望 …… 79

図　　版

図　版　目　次

巻頭図版

1－1　調査区（大手門周辺）から北方向を望む
1－2　調査区（大手門周辺）から東方向を望む
2－1　34 次調査区東部完掘状況（真上から 南が上）
2－2　34 次調査区西部作業風景（北西から）
3　34 次調査出土瓦
4－1　34 次調査出土軒丸瓦・丸瓦
4－2　34 次調査出土軒平瓦・平瓦

図　版

PL.1　1　33 次調査区　全景（南から）
　　2　33 次調査区　全景（南西から）
PL.2　1　33 次調査区北部近景（北東から）
　　2　33 次調査区南部近景（南から）
PL.3　1　33 次調査区南部近景（北西から）
　　2　SK02・SK03・SK04 完掘状況（北東から）
　　3　SK08・SP14・SP15 完掘状況（北西から）
　　4　SK09・SK10 遺物出土状況（南東から）
PL.4　1　SK11 完掘状況（南から）
　　2　SK15・SP18・SP19 完掘状況（北西から）
　　3　SK16・SP28 周辺完掘状況（東から）
　　4　SK28・SK29 周辺完掘状況（南西から）
　　5　SP22 完掘状況（南東から）
　　6　SP36 完掘状況（西から）
　　7　SP37・SP39 完掘状況（南西から）
　　8　SX01・SD08 周辺完掘状況（西から）
PL.5　33 次調査 遺物写真（1）
PL.6　33 次調査 遺物写真（2）
PL.7　33 次調査 遺物写真（3）
PL.8　34 次調査区西部完掘状況（北東から）
PL.9　1　34 次調査区西壁土層断面状況（東から）
　　2　34 次調査区中央土層断面状況（西から）
PL.10　1　34 次調査区中央下層土層断面状況（西から）
　　2　34 次調査区東壁下層土層断面状況（西から）
　　3　34 次調査区東壁土層断面状況（西から）
PL.11　1　34 次調査 SA01･02 完掘状況(真上から 北が上)
　　2　34 次調査 SD02 土層断面状況（南から）
　　3　34 次調査 SD02 完掘状況（西から）
　　4　34 次調査 SK02 土層断面状況（南から）
　　5　34 次調査 SK02 完掘状況（南から）
PL.12　34 次調査 遺物写真（1）
PL.13　34 次調査 遺物写真（2）
PL.14　34 次調査 遺物写真（3）
PL.15　34 次調査 遺物写真（4）
PL.16　34 次調査 遺物写真（5）
PL.17　34 次調査 遺物写真（6）
PL.18　34 次調査 遺物写真（7）
PL.19　34 次調査 遺物写真（8）
PL.20　34 次調査 遺物写真（9）
PL.21　34 次調査 遺物写真（10）
PL.22　34 次調査 遺物写真（11）

挿　図　目　次

Fig.1　浜松城跡の位置 ……1
Fig.2　浜松城跡の周辺地形 ……2
Fig.3　浜松城跡復元図 ……3
Fig.4　浜松城下町の構成 ……4
Fig.5　浜松城絵図（大手門周辺）……5
Fig.6　調査地点周辺の近代の地図 ……6
Fig.7　調査対象地の位置 ……7
Fig.8　天守曲輪周辺拡大図 ……8
Fig.9　確認調査の位置 …… 10
Fig.10　33 次調査の確認調査（工事立会調査）
　土層断面図および平面図…… 11
Fig.11　34 次調査の確認調査（31 次調査）
　土層断面図…… 11
Fig.12　33 次・34 次調査区配置図 …… 13
Fig.13　作業風景…… 14
Fig.14　標準土層堆積図…… 15
Fig.15　33 次調査区縦断面図 …… 15
Fig.16　33 次調査区全体平面図 …… 16
Fig.17　SA01・02 出土遺物実測図 …… 17
Fig.18　SA01・02 実測図 …… 18
Fig.19　土坑実測図（1）…… 20
Fig.20　土坑実測図（2）…… 21
Fig.21　土坑実測図（3）…… 22
Fig.22　土坑出土遺物実測図…… 23
Fig.23　小穴実測図…… 25
Fig.24　小穴出土遺物実測図…… 26
Fig.25　溝・不定形遺構実測図…… 27
Fig.26　溝・不定形遺構出土遺物実測図…… 28
Fig.27　遺構外出土遺物実測図（1）…… 29
Fig.28　遺構外出土遺物実測図（2）…… 30
Fig.29　34 次調査区全体平面図 …… 33
Fig.30　34 次調査区土層断面模式図 …… 34
Fig.31　SD01 実測図 …… 35
Fig.32　SD01 土層断面図 …… 36
Fig.33　SD01・SX01・SX02・SX04
　エレベーション図…… 37
Fig.34　SD01 出土遺物実測図（1）…… 38
Fig.35　SD01 出土遺物実測図（2）…… 39

Fig.36　SD01 出土遺物実測図（３）…… 40
Fig.37　SD01 出土遺物実測図（４）…… 41
Fig.38　SD01 出土遺物実測図（５）…… 43
Fig.39　SD01 出土遺物実測図（６）…… 44
Fig.40　SD01 出土遺物実測図（７）…… 45
Fig.41　SD01 出土遺物実測図（８）…… 46
Fig.42　SD01 出土遺物実測図（９）…… 48
Fig.43　SD01 出土遺物実測図（１０）…… 49
Fig.44　SD01 出土遺物実測図（１１）…… 50
Fig.45　SD01 出土遺物実測図（１２）…… 51
Fig.46　SD01 出土遺物実測図（１３）…… 52
Fig.47　SD01 出土遺物実測図（１４）…… 53
Fig.48　SD01 出土遺物実測図（１５）…… 55
Fig.49　SD01 出土遺物実測図（１６）…… 56
Fig.50　SD01 出土遺物実測図（１７）…… 58
Fig.51　SD01 出土遺物実測図（１８）…… 59
Fig.52　SD01 出土遺物実測図（１９）…… 60
Fig.53　SA01 実測図 …… 61
Fig.54　SA02 実測図 …… 62
Fig.55　SD02・SK02 実測図 …… 63
Fig.56　SD02 出土遺物実測図 …… 63
Fig.57　遺構外出土遺物実測図…… 63
Fig.58　浜松城跡出土軒丸瓦集成図…… 70
Fig.59　浜松城跡出土軒平瓦集成図…… 73
Fig.60　浜松城跡出土軒桟瓦集成図…… 76
Fig.61　浜松城絵地図（大手門付近を拡大）…… 78
Fig.62　33・34 次調査区縦断模式図 …… 80

挿　表　目　次

Tab.1　浜松城における調査等の履歴…… 8
Tab.2　浜松城跡 33 次調査　出土遺物観察表（１）……31
Tab.3　浜松城跡 33 次調査　出土遺物観察表（２）……32
Tab.4　浜松城跡 34 次調査　出土遺物観察表（１）……65
Tab.5　浜松城跡 34 次調査　出土遺物観察表（２）……66
Tab.6　浜松城跡 34 次調査　出土遺物観察表（３）……67
Tab.7　浜松城跡 34 次調査　出土遺物観察表（４）……68

第１章　序　論

１　調査に至る経緯

浜松城跡は、浜松市中区の中心市街地に位置する。天守曲輪を中心とした城域の中枢部には石垣が残存しており、市指定史跡として保護されている。また、公園や学校敷地として利用されている部分についても改変が加えられているものの、地下に遺構が残存していることが近年の発掘調査によって明らかになっている。一方で、城域の外縁部である三の丸については、近代以降の市街地化によって中高層の建築物が立ち並び、遺構の大半は失われていると考えられてきた。

そうした中、三の丸の南西部において高層の集合住宅の建設が計画された。建設計画地は、堀や土塁および三の丸内部の屋敷地に想定されていたため、事業主体であるセキスイハイム東海株式会社と浜松市教育委員会（浜松市市民部文化財課が補助執行）が協議を行い、まずは遺構の残存状況を把握するための確認調査を行うことになった。

確認調査は令和元（2019）年 10 月 25 日と 11 月 18 日に実施した。その結果、近現代の掘削が深く及んでいたものの、堀などの遺構が確認され近世の遺物も出土したため、遺構が失われる部分を対象として記録保存を目的とした本発掘調査を行うこととなった。

本発掘調査は、浜松市教育委員会（浜松市市民部文化財課）が調査主体となり、２回（33・34 次）に分けて実施した。33 次調査は、機械式駐車場建設部分の 200 ㎡を対象として、令和２（2020）年４月 16 日から５月１日にかけて直営で実施した。34 次調査は、現場における作業の実務を株式会社イビソクに委託し、集合住宅建設部分のうち 389 ㎡を対象として、令和２年６月 15 日から９月２日にかけて実施した。

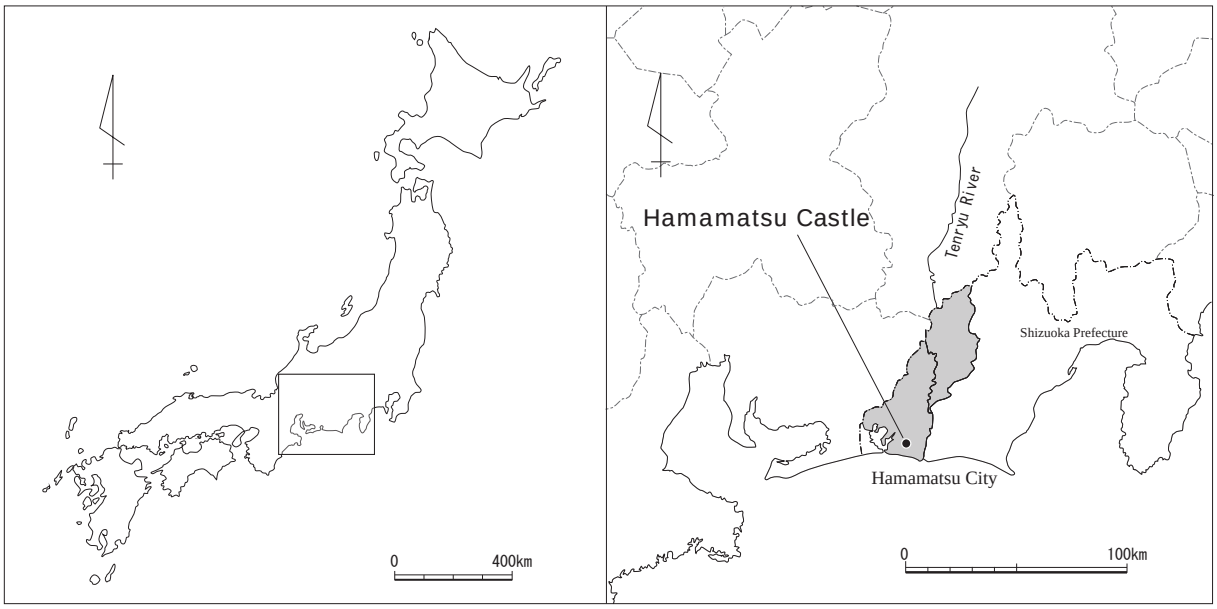


Fig.1　浜松城跡の位置

2　地理的・歴史的環境

（1）地理的環境

浜松城跡は天竜川下流の西岸、三方ヶ原台地の東縁部にあたる河岸段丘を利用して築城されている。城域は最大で東西 600 m、南北 700 mを測り、最高所に築かれた天守曲輪から東側の平野部に向かい、順に本丸、二の丸、三の丸と曲輪が続く連郭式の平山城である。浜松城跡の北側及び南側は、谷地形や湿地帯が入り組んでおり、それらをうまく利用して堀や曲輪が配置され、調査地点は浜松城跡南端部の傾斜地に位置する。

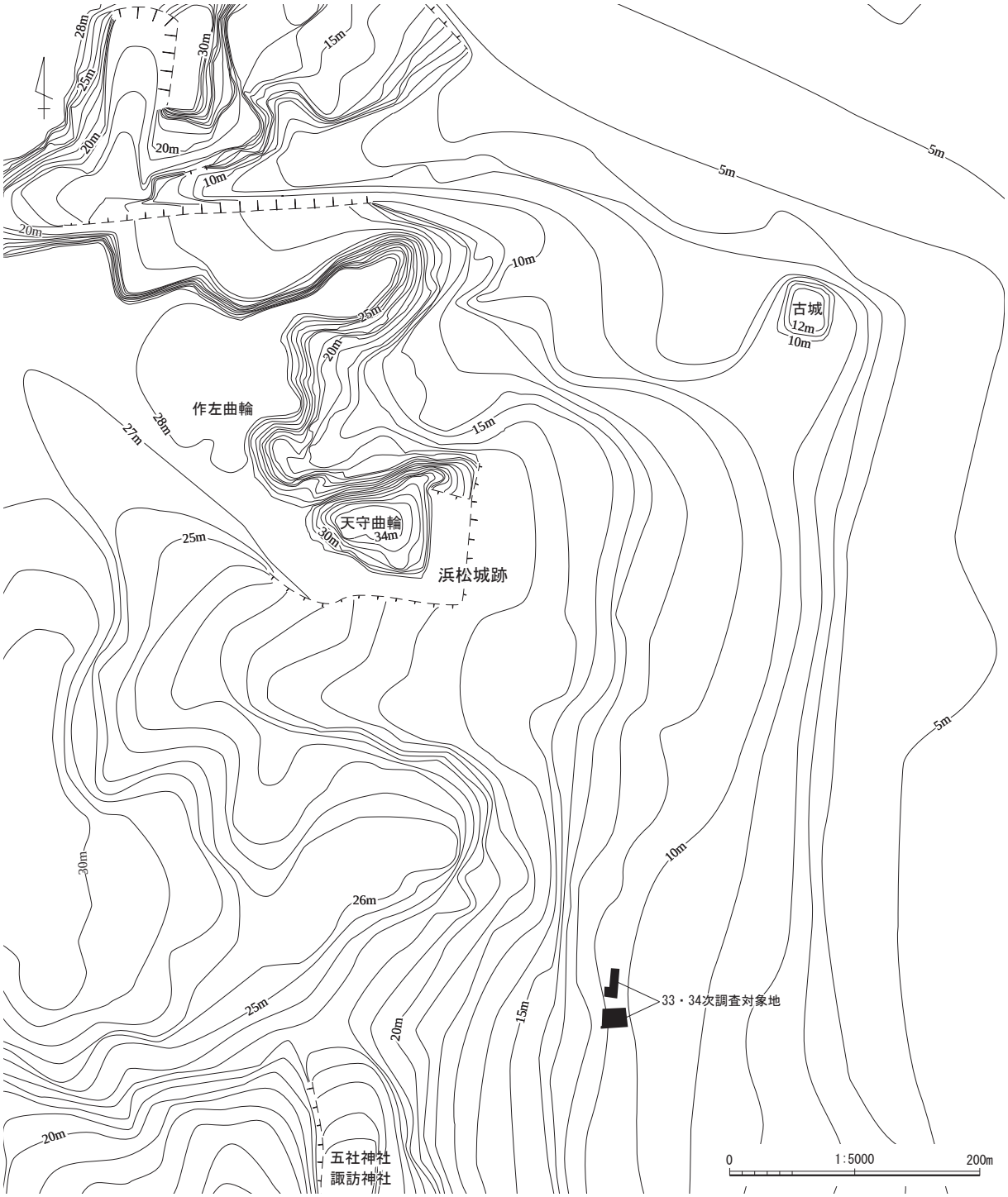


Fig.2　浜松城跡の周辺地形

（２）歴史的環境

旧石器時代～古代　浜松城跡周辺において、旧石器時代～弥生時代の遺跡の存在は確認されていないが、三方ヶ原台地東縁部は古墳が多い地域であって、天守曲輪の北西部には横穴墳である作左山横穴が確認されている。浜松城跡周辺の調査では、作左山横穴から出土した須恵器をはじめ、古墳時代～古代の遺物がわずかだが出土する。

中世　浜松城の前身である引間城は、現在の元城町東照宮付近一帯の丘陵地とされている。築城主は不明だが、15 世紀頃から存在したと考えられている。引間城の東側では中世東海道の宿場町として引間宿が栄えていた。16 世紀前葉には今川氏の支配下に置かれ、今川氏配下の飯尾氏が引間城主に任じられた。16 世紀後葉に徳川家康が遠江に侵攻して引間城に入城した際、引間城を取り込む形で、西側の丘陵を利用して城域を拡張し、浜松城と改称したとされる。家康在城期の構造は明確になっていないが、堀や土塁をめぐらせた実戦向きの中世的な城館であったとみられる。

天正 18（1590）年、家康が関東へ移封されると、豊臣氏配下の堀尾吉晴が入城した。堀尾氏によって、野面積みの石垣が築かれ、天守をはじめとする瓦葺建物が建築されたと考えられ、現在本丸から天守曲輪にかけてみられる石垣のほとんどは、この段階で築かれたものと考えられる。

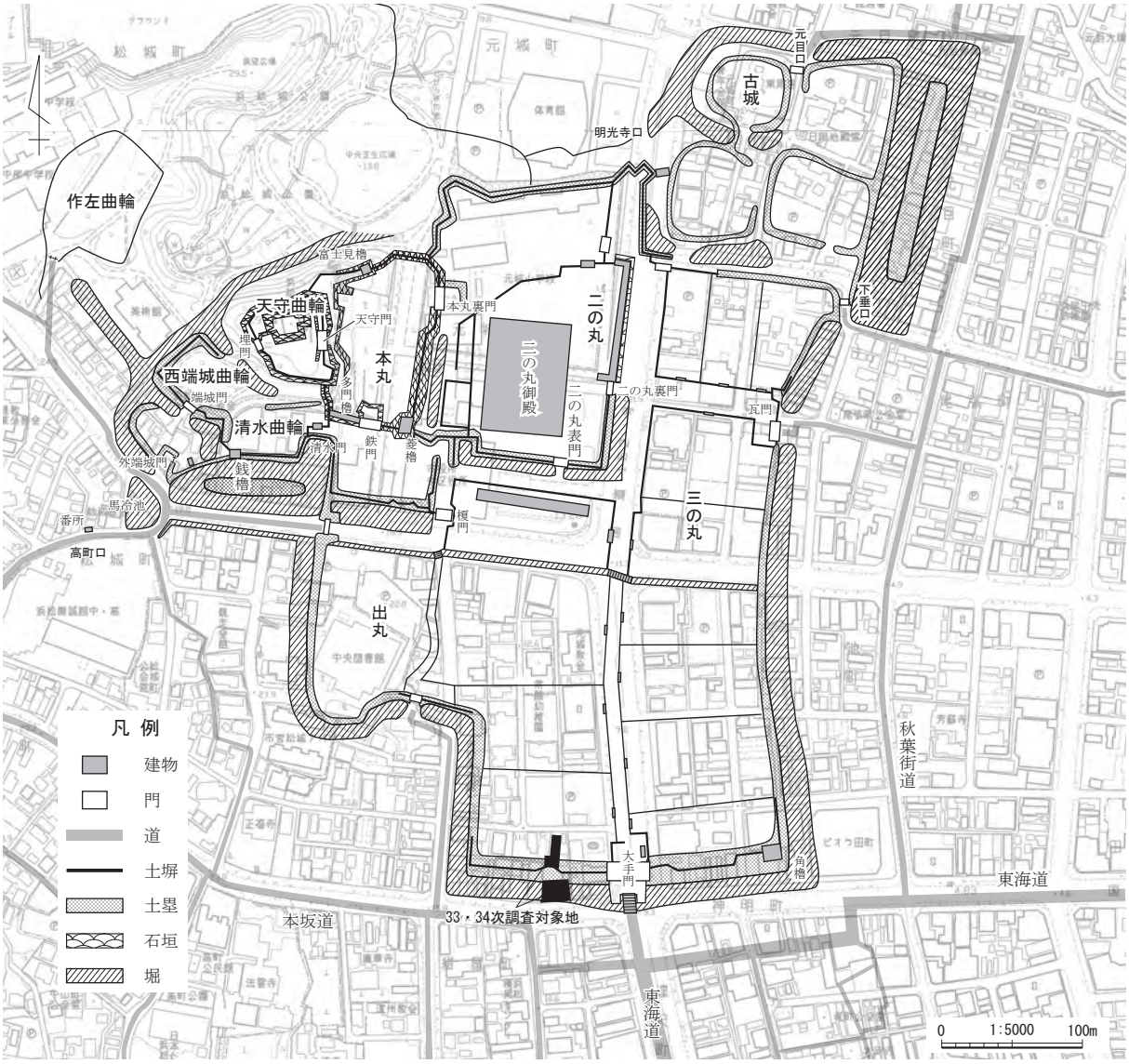


Fig.3　浜松城跡復元図

近世　関ヶ原の戦いで東軍が勝利すると、浜松城は徳川譜代大名が城主を務めるようになり、近世城郭として整備されていく。江戸時代の浜松城は、大名にとって幕閣への登竜門として通過する城の一つであり、江戸時代を通して十家二十二代の譜代大名が歴代城主を務めた。17 世紀に描かれた『遠州浜松城絵図』を見ると、堀尾氏在城時に築かれた天守は失われ、新たに三の丸や城下町の整備が行われたことがわかる。家臣の居住区である三の丸は大きく拡張され、大手門が城域の南端へ設置された。城下を通る東海道は大手門の前でほぼ直角に折れ曲がり、直線的に馬込川へと延びるように変更された。沿道には宿場町が栄え、東海道の往来時に大手門または三の丸隅櫓が眺望できるように設計されており、大手門が浜松城を代表する建物となったとされる（杉山 2019）。

大手門が描かれている絵図では、大手門はいずれも二階建ての櫓門として描かれている。作成年が不明ながら、確認されている近世の絵図の中で最古とみられる『遠州浜松城図』（Fig. 5-1）では、大手門とその東西の角の櫓は瓦葺きで、大手門と櫓の間には板葺きの塀が描かれている。17 世紀代の作成とされる『遠州浜松城絵図』（Fig. 5-2）では、大手門両脇の塀は瓦葺に変わり、西側の隅櫓は消失している。天守が失われても天守台が描かれているのに対し、大手門西側の隅櫓は、櫓台も表現されていないため、完全に取り壊された可能性が考えられる。絵図の成立時期を考慮すると、17 世紀のいずれかの段階で大手門西側の櫓を取り壊したと思われる。

Fig. 4　浜松城下町の構成

浜松城と城下町を描いている『遠州浜松城下絵図』(Fig. 5-3) や『浜松御城下絵図略図』(Fig. 5-4) では、大手門へ至る橋の手前に取次所が描かれており、関連施設が設置されていたことが窺える。『遠州浜松松尾山引駒城下絵図』(Fig. 5-5) や『安政元年浜松城絵図』(Fig. 5-6) では、大手門前（現在の連尺の交差点の南西部）には高札所が設置されていたことがわかる。また、『安政元年浜松城絵図』には建物の規模も記載されており、大手門は梁４間、桁８間であったことがわかる。なお、大手門へ至る橋の手前には使者詰所と馬繋が描かれている。

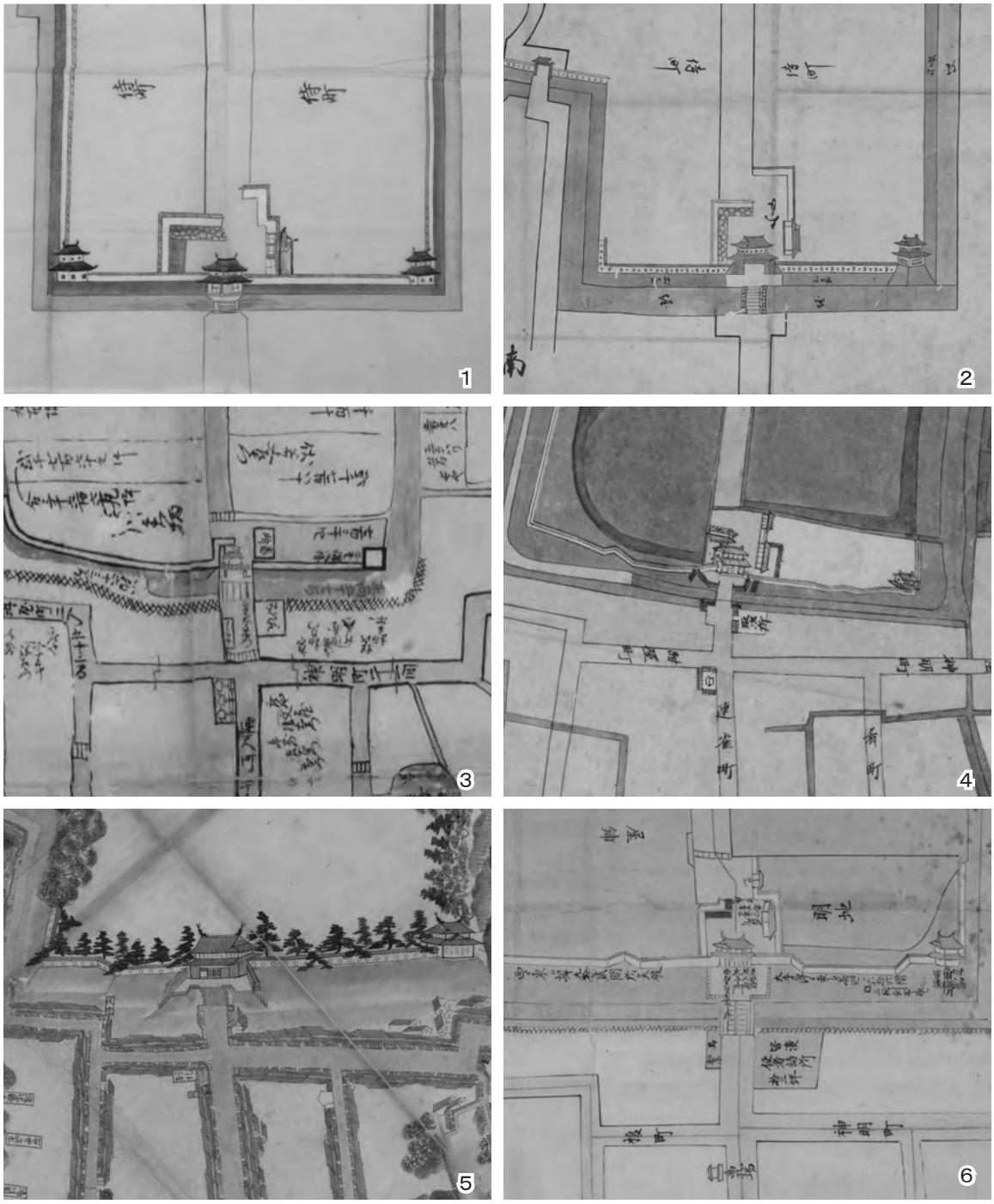


Fig. 5　浜松城絵図（大手門周辺）

１：遠州浜松城図（作成年不明、17 世紀か）、２：遠州浜松城絵図（17 世紀）、３：遠州浜松城下絵図（18 世紀後半）、
４：浜松御城下絵図略図（模写、作成年不明）、５：遠州浜松松尾山引駒城下絵図（19 世紀前葉）、６：安政元年浜松城絵図（1854 年）

近現代　明治６（1873）年の廃城令に先立ち、浜松城の建物や土地が払い下げられ、二の丸や三の丸は宅地化が進行した。さらに、城域内の土地を利用して教育機関が設立されていく。明治８（1875）年には浜松女学校が三の丸内に設立され、明治 19（1886）年には浜松学校と併合し、浜松尋常学校になった。明治 31（1898）年には元城地内に浜松幼稚園が設立された。明治 34（1901）年には浜松高等女学校が浜松幼稚園舎を仮校舎にして設立された。宅地化とともに開発が進み、浜松城域の地形や景観は大きく改変されていくが、天守曲輪と本丸の一部は開発を免れた。

また、明治に入ると城下町で度々火災が起き、明治の八大大火と呼ばれる火災が城下町を襲った。調査地点近辺では、明治７（1874）年に小野組の大火が起きている。伝馬町の小野組支店より出火し、伝馬町や鍛冶町、紺屋町、連尺町等計 18 町村が被害を受けた。明治 25（1892）年には連尺町の入桝座より出火した入桝座の火事が起こり、大手門筋の連尺町や肴町等が被災し、262 戸焼失する被害を受けた。明治 26（1893）年に神明火事が起こり、神明町や連尺町、紺屋町等大手門付近の町が被害を受けた。

大正に入ると都市計画事業が施行され、道路網の整備・改良、計画道路の造営等が行われた。大正９（1920）年に浜松の都市計画が策定され、大正 12（1923）年に施工された。都市計画が進むとともに、地籍整理も行われ、大正 11（1922）年から始まり、大正 14（1925）年に完了した。字の統合や町の合併が行われ、消失した町名もあった。大正 15（1926）年には道路網計画が成立し、翌年度より着工された。昭和２（1927）年には、田町の国道で浜松市内初のアスファルト舗装が施され、昭和９（1934）年～ 10（1935）年にかけては、市内の主要路線３万ｍの改良舗装工事が行われた。昭和 13（1938）年には連尺町の道路も改良された。その後も道路整備が進み、新設や延長、改良・拡幅工事が行われ、舗装も施されていくようになる。戦前までは残っていた大手門前の鍵形の道路も戦後に直線道となった。

近代に起きた大火災や市街地の整備、さらには戦災により城下町の景観も次第に失われていった。

戦後、昭和 25（1950）年には天守曲輪を中心に浜松城公園が開設され、昭和 33（1958）年には堀尾氏時代から残る天守台上に復興天守が建築された。また、天守曲輪と本丸の一部は昭和 34（1959）年に浜松市の史跡に指定され、令和３年１月 28 日には本丸の一部と西端城曲輪が追加指定された。

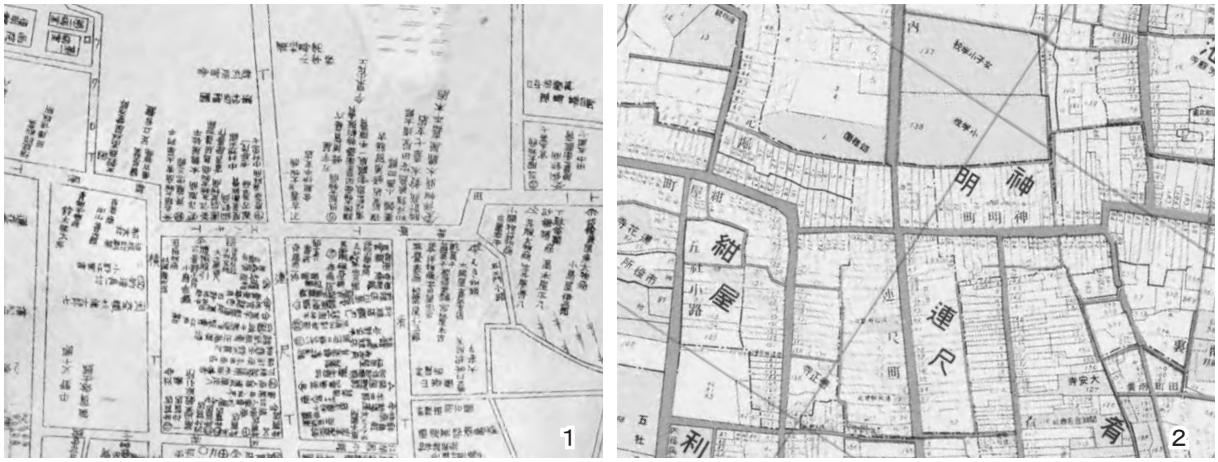


Fig.6　調査地点周辺の近代の地図
1：遠江国敷知郡浜松町全図 明治 28（1895）年、2：浜松市全図 大正７（1918）年

３　浜松城跡の調査歴

（１）調査履歴

今回の調査は、浜松城跡発掘調査の 33 次と 34 次にあたる。その他、工事立ち会いや不時発見等を含めると 50 回以上の調査が行われている（Fig.7）。今回の調査は、31 次調査において確認された堀の底面及び肩部の確認、堀の埋め立て状況を把握、さらに堀北側の土塁の痕跡を確認することを目的として実施した。

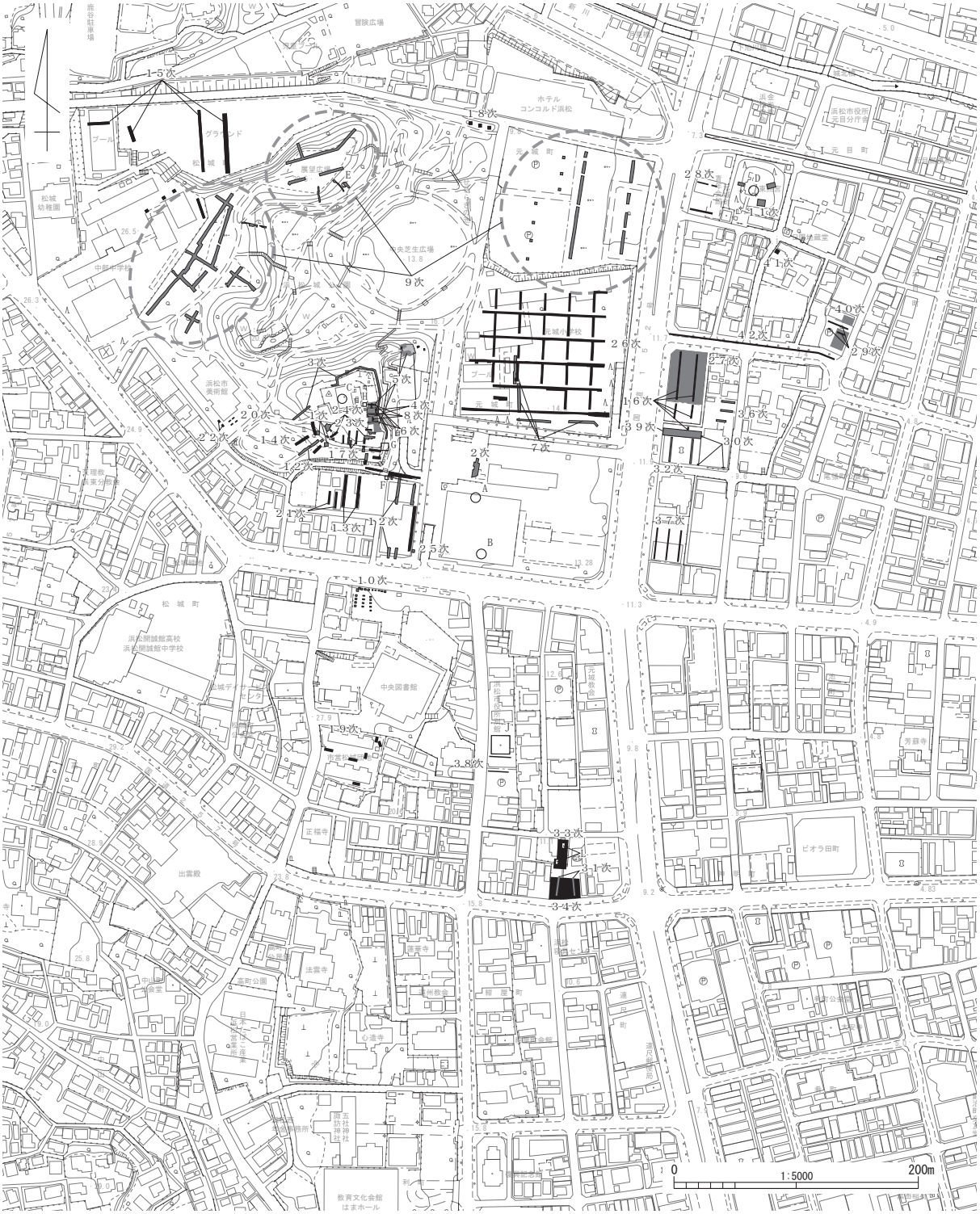


Fig.7　調査対象地の位置

3　浜松城跡の調査歴

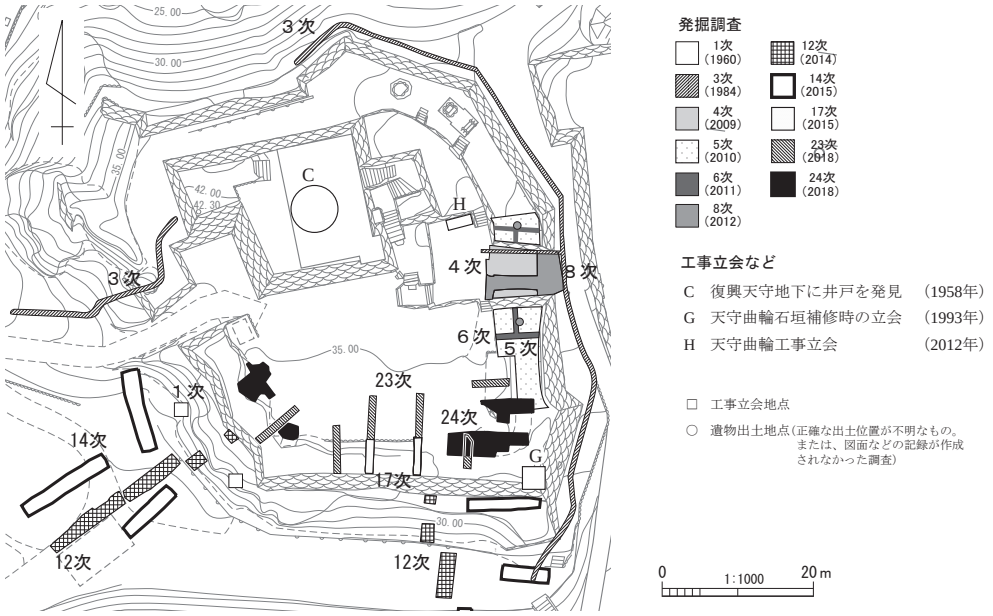


Fig. 8　天守曲輪周辺拡大図

Tab. 1　浜松城における調査等の履歴

発掘調査

名称	年次	調査事由	成果等	文献
1 次	1960 年	浜松農工高による確認調査		浜松市教委 1996
2 次	1979 年	市役所地下駐車場整備に伴う工事立会	工事時に石垣が発見され、測量等を実施	浜松市教委 1996
3 次	1984 年	電線地中化工事に伴う工事立会	天守曲輪周辺の調査で、未知の石垣等を確認	浜松市教委 1984 浜松市教委 1996
4 次	2009 年	浜松城公園整備事業に伴う確認調査	天守門・富士見櫓の基礎等を確認	浜文振 2010
5 次	2010 年	浜松城公園整備事業に伴う確認調査	天守門・富士見櫓の確認調査で、天守門櫓部の基礎構造と考えられる根石列等を確認	浜文振 2011
6 次	2011 年	浜松城公園整備事業に伴う確認調査	天守門跡の確認調査で、櫓台石垣の裏込石等を確認	浜文振 2012a
7 次	2011 年	セントラルパーク構想策定に伴う確認調査	二の丸・御誕生場の確認調査で井戸等を確認	浜文振 2012b
8 次	2012 年	天守門復元工事に伴う確認調査	天守門に付随する瓦積み排水設備の全体像を確認	浜松市教委 2013a
9 次	2012 年	セントラルパーク構想策定に伴う確認調査	作左曲輪等の確認調査で、柱穴等を確認	浜松市教委 2013b
10 次	2014 年	市役所駐輪場整備に伴う本発掘調査	溝等を確認	浜松市教委 2015b
11 次	2014 年	遺構残存状況把握のための確認調査	引間城跡（古城）の確認調査で、土塁を確認。かわらけが多数出土	浜松市教委 2016b
12 次	2014 年	浜松城公園整備事業に伴う確認調査	本丸南側石垣、天守曲輪南側の空堀跡と西端城曲輪、本丸西側土塁と登り塀を確認	浜松市教委 2015b
13 次	2015 年	市役所駐車場整備に伴う確認調査	12 次調査で確認したものと同一の可能性がある大型溝を確認	浜松市教委 2016a
14 次	2015 年	浜松城公園整備事業に伴う確認調査	本丸南側石垣、天守曲輪南側の空堀跡と西端城曲輪、本丸西側土塁と登り塀を確認	浜松市教委 2016a
15 次	2015 年	学校建設に伴う確認調査	浜松城跡の範囲内であるが、城郭に係る遺構は確認できず	浜松市教委 2016a
16 次	2015 年	社屋建設に伴う確認調査	三の丸跡に係る遺構は未確認であるが、戦国期以前の遺構と遺物を確認	浜松市教委 2017
17 次	2015 年	浜松城公園整備事業に伴う確認調査	天守曲輪南側土塁の依存状態、土塁内側石垣基底部、曲輪内整地面の状況を確認	浜松市教委 2018a
18 次	2015 年	道路拡幅に伴う確認調査	浜松城に係る遺構は確認できず	浜松市教委 2017
19 次	2016 年	用地売買に伴う確認調査	浜松城に係る遺構は確認できず	浜松市教委 2017
20 次	2015 年	美術館施設建設に伴う確認調査	堀とみられる落ち込みを確認	浜松市教委 2018b
21 次	2015 年	個人住宅建設に伴う確認調査	浜松城に係る遺構は確認できず	浜松市教委 2018b
22 次	2015 年	美術館施設建設に伴う確認調査	20 次調査で確認したものと同一の可能性のある堀跡を確認	浜松市教委 2018b
23 次	2018 年	浜松城公園整備事業に伴う確認調査	富士見櫓跡周辺で残存状況の良好な石垣を確認。天守曲輪において、高さ 2 m以上の石塁の埋没状況と瓦集積を確認	浜松市教委 2018a
24 次	2018 年	浜松城公園整備事業に伴う確認調査	天守曲輪内に、櫓と考えられる基礎と瓦溜まりを確認	浜松市教委 2019
25 次	2018 年	水道管敷設に伴う工事立会	近世～近代の遺物を確認	浜松市教委 2020a
26 次	2019 年	浜松城公園長期整備構想に関わる確認調査	浜松城の本丸御誕生場、二の丸の構造を確認	浜松市教委 2020b
27 次	2019 年	社屋建設に伴う本発掘調査	引間城に関連する堀を確認	2021 年度報告予定
28 次	2019 年	事務所建設に伴う確認調査	浜松城に係る遺構は確認できず	浜松市教委 2021
29 次	2019 年	集合住宅建設に伴う確認調査	下垂口北側の堀を確認（40 次調査の確認調査）	浜松市教委 2021
30 次	2019 年	社屋建設に伴う確認調査	遺構は確認されなかったが、旧地形の残存を確認	浜松市教委 2021

発掘調査

名称	年次	調査事由	成果等	文献
31 次	2019 年	集合住宅建設に伴う確認調査	大手門西側の堀跡を確認（34 次調査の確認調査）	本報告
32 次	2019 年	社屋建設に伴う確認調査	既存建物によって、遺跡の大半は消滅	浜松市教委 2021
33 次	2020 年	集合住宅建設に伴う本発掘調査	近世～近代の土坑・小穴・溝等を確認	本報告
34 次	2020 年	集合住宅建設に伴う本発掘調査	大手門西側より、堀両側肩部と部分的な堀底を確認。近世浜松城の堀の規模が判明。家紋瓦が出土した	本報告
35 次	2020 年	浜松城公園長期整備構想に関わる確認調査	浜松城の本丸、御誕生場、二の丸の構造を確認（26 次調査から継続）	2021 年度概要報告予定
36 次	2020 年	社屋建設に伴う確認調査	三の丸において戦国時代～江戸時代の遺物を確認	2021 年度報告予定
37 次	2020 年	宿泊施設建設に伴う確認調査	三の丸において溝や井戸のほか、多数の小穴を検出	2021 年度報告予定
38 次	2020 年	遺構残存状況把握のための確認調査	三の丸西側の堀を確認	2021 年度報告予定
39 次	2020 年	社屋建設に伴う本発掘調査	2020 年 11 月～ 12 月調査予定	2021 年度報告予定
40 次	2020 年	集合住宅建設に伴う本発掘調査	下垂口北側の堀を確認	2021 年度報告予定
41 次	2020 年	駐車場造成に伴う工事立会	引間城（古城）に関連する堀を確認	2021 年度報告予定
42 次	2021 年	水道工事に伴う工事立会	引間城南側での立会	2021 年度報告予定

工事立会など（主要なもの）

記号	年次	事由	成果等	文献
A	1914 年	中堀埋立工事	須恵器出土	静岡県 1930 浜松市教委 1996
B	1957 年	市役所庁舎建設	須恵器出土	浜松市教委 1996
C	1958 年	復興天守建設	天守台で井戸跡を確認	浜松市教委 1996
D	1960 年	元城町東照宮社殿建設	境内より陶器等が出土	浜松市教委 1996
E	1964 年	動物園内施設整備	作左山横穴を確認	向坂 1976 浜松市教委 1996
F	1985 年	駐車場擁壁工事	本丸南側石垣を確認	浜松市教委 1996
G	1993年	天守曲輪石垣解体修理	天守台付櫓の改修や天守曲輪南東部の石垣の構造を確認	浜松市教委 1996
H	2012 年	天守曲輪ミカン改植	瓦が出土	浜松市教委 2013c
I	2012 年	水道工事	引間城（古城）北側の堀を確認	浜松市教委 2014
J	2013 年	市役所南別館解体工事	出丸から三の丸にかけての堀を確認	浜松市教委 2015a
K	2014 年	集合住宅建設	三の丸東側の堀を確認	浜松市教委 2016c
L	2019 年	既存建造物解体工事	小穴を確認し、瓦が出土（33 次調査対象地）	本報告

参考文献

静岡県　1930『静岡県史』第 1 巻（旧版）
向坂鋼二　1976「浜松市動物園内作左山横穴墳」『森町考古』10
浜松市教育委員会　1984『浜松城天守曲輪周辺の発掘調査について』
浜松市教育委員会　1996『浜松市指定文化財　浜松城跡－考古学的調査の記録－』
㈶浜松市文化振興財団　2010『浜松城跡 4 次』
㈶浜松市文化振興財団　2011『浜松城跡 5 次』
㈶浜松市文化振興財団　2012a『浜松城跡 6 次』
㈶浜松市文化振興財団　2012b『浜松城跡 7 次』
浜松市教育委員会　2013a『浜松城跡 8 次』
浜松市教育委員会　2013b『浜松城跡 9 次』
浜松市教育委員会　2013c『平成 23 年度　浜松市文化財調査報告』
浜松市教育委員会　2014『平成 24 年度　浜松市文化財調査報告』
浜松市教育委員会　2015a『平成 25 年度　浜松市文化財調査報告』
浜松市教育委員会　2015b『浜松城跡 10』
浜松市教育委員会　2016a『浜松城跡 11』
浜松市教育委員会　2016b『浜松における中世城館の調査』
浜松市教育委員会　2016c『平成 26 年度　浜松市文化財調査報告』
浜松市教育委員会　2017『平成 27 年度　浜松市文化財調査報告』
浜松市教育委員会　2018a『浜松城跡 12』
浜松市教育委員会　2018b『平成 28 年度　浜松市文化財調査報告』
浜松市教育委員会　2019『浜松城跡 13』
浜松市教育委員会　2020a『平成 30 年度　浜松市文化財調査報告』
浜松市教育委員会　2020b『浜松城跡 26 次調査の概要』
浜松市教育委員会　2021『令和元年度　浜松市文化財調査報告』

（２）確認調査の結果

33 次調査の確認調査　33 次調査区における確認調査（工事立会調査）は、機械式駐車場の建設計画地において令和元(2019)年 10 月 25 日に実施した。現地には既存の建築物が存在していたため、その基礎の撤去工事にあわせて調査溝２箇所の掘削を行った。基本層序は、現代の盛土が 70 ～ 90 ㎝程度の厚さで施されており、その下にⅠ層：現代の整地層、Ⅱ層：しまりの弱い粘質土、Ⅲ層：しまりのやや弱い粘質土または砂、Ⅳ層：暗褐色系の粘質土が堆積し、基盤層であるⅤ層：黄褐色

礫混じり粘質土に至る。なお、確認調査の時点ではⅠ～Ⅲ層は近現代、Ⅳ層は近世の可能性があると認識していたが、本発掘調査の段階でⅣ層も近代以降の層であることが判明した。

調査の結果、調査溝２では時期不明ながら褐色粘質土を埋土とする小穴のプランを確認し、Ⅱ層から近世の丸瓦小片１点が出土した。調査溝１では近代以降の攪乱が基盤層まで及んでおり、遺構・遺物は確認されなかった。得られた情報は多くはなかったが、近世の遺物や、近世の可能性がある遺構や土層堆積が確認されたことから、本発掘調査を行う必要があると判断した。

34 次調査の確認調査（31 次調査）　34 次調査区における確認調査（31 次調査）は、集合住宅の建設計画地において、令和元（2019）年 11 月 18 日に実施した。今回の建設計画地は、近世絵図等によって東西に延びる堀および土塁の存在が想定されていたため、それらの堀と土塁に直交するように調査溝を２本設定して掘削したところ、想定どおりに堀の存在が確認された。一方で堀の北縁部沿いに想定されていた土塁は、すでに削平されており確認することができなかった。基本層序はⅠ層：現代の造成盛土、Ⅱ層：近代の表土とみられる暗褐色粘質土、Ⅲ層：近代における堀の埋立て土、Ⅳ層：近世とみられる遺物包含層・堀流入土、Ⅴ層：褐色砂礫等の基盤層である。

調査の結果、堀の存在が確認され、Ⅳ -1 層（遺物包含層）から近世とみられる内耳鍋の小片が、Ⅳ -2 層（堀の流入土）からは近世の瓦の小片が出土した。土塁は近代以降に削平されたと考えられるが、その下部に近世とみられる遺物包含層の存在も確認されたことから、本発掘調査を行う必要があると判断した。

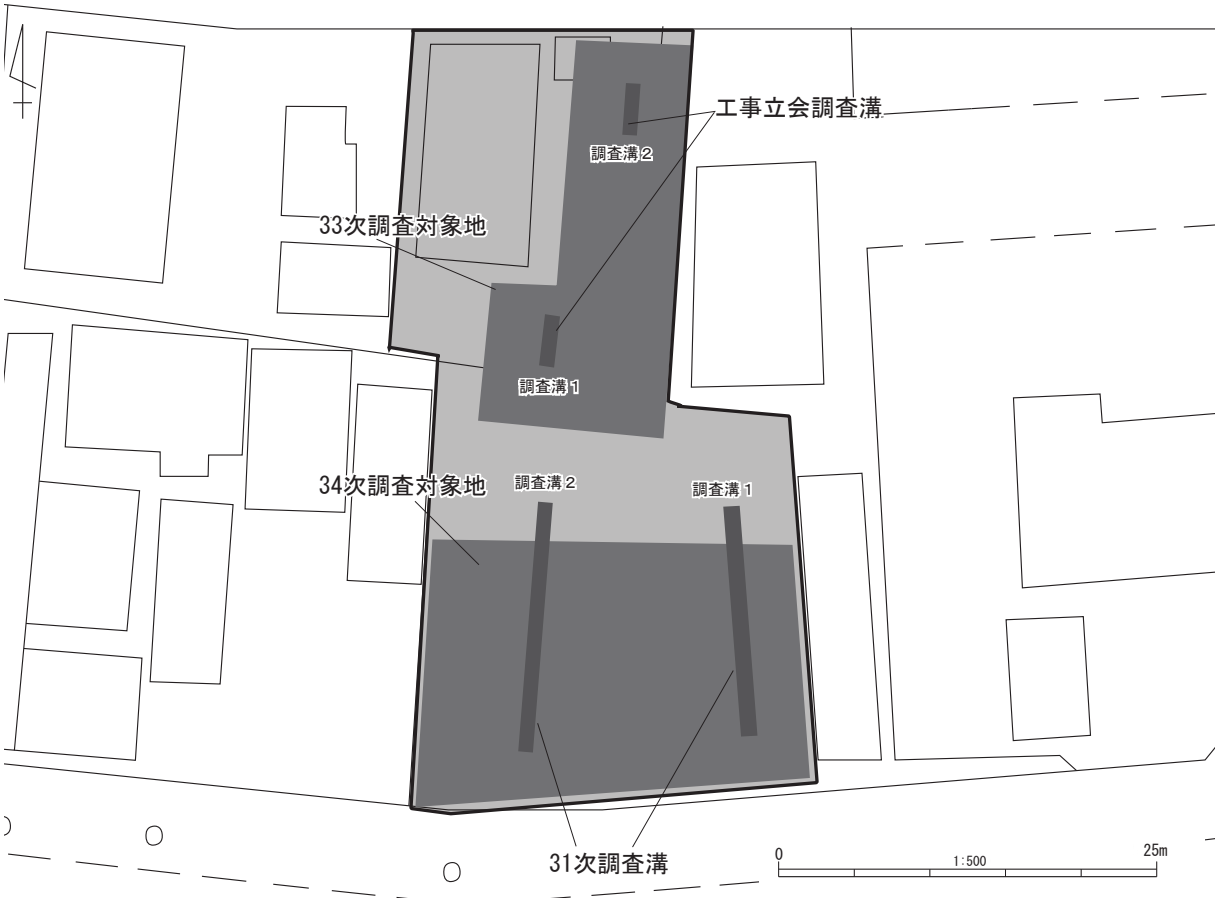


Fig.9　確認調査の位置

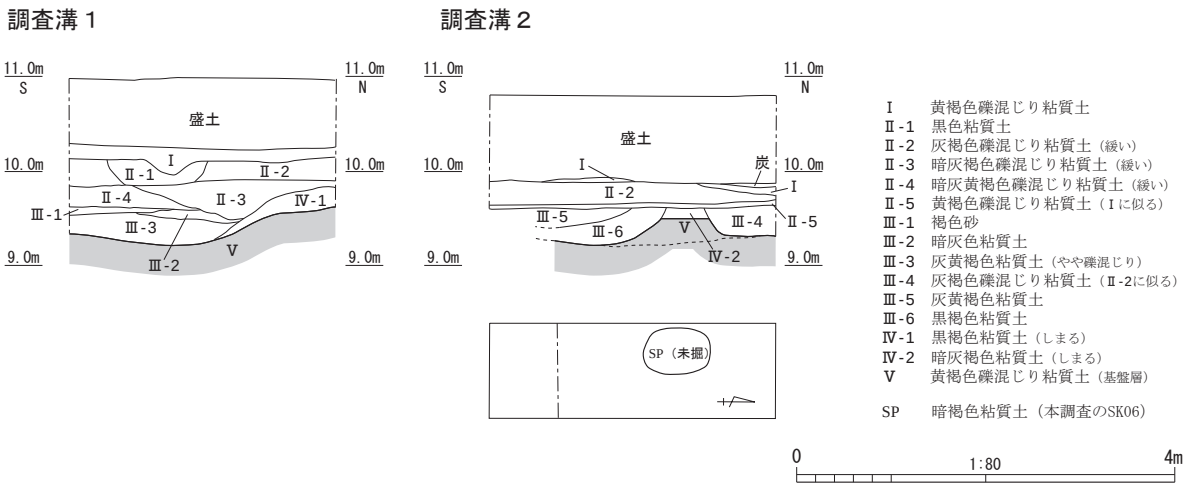


Fig.10　33 次調査の確認調査（工事立会調査）　土層断面図および平面図

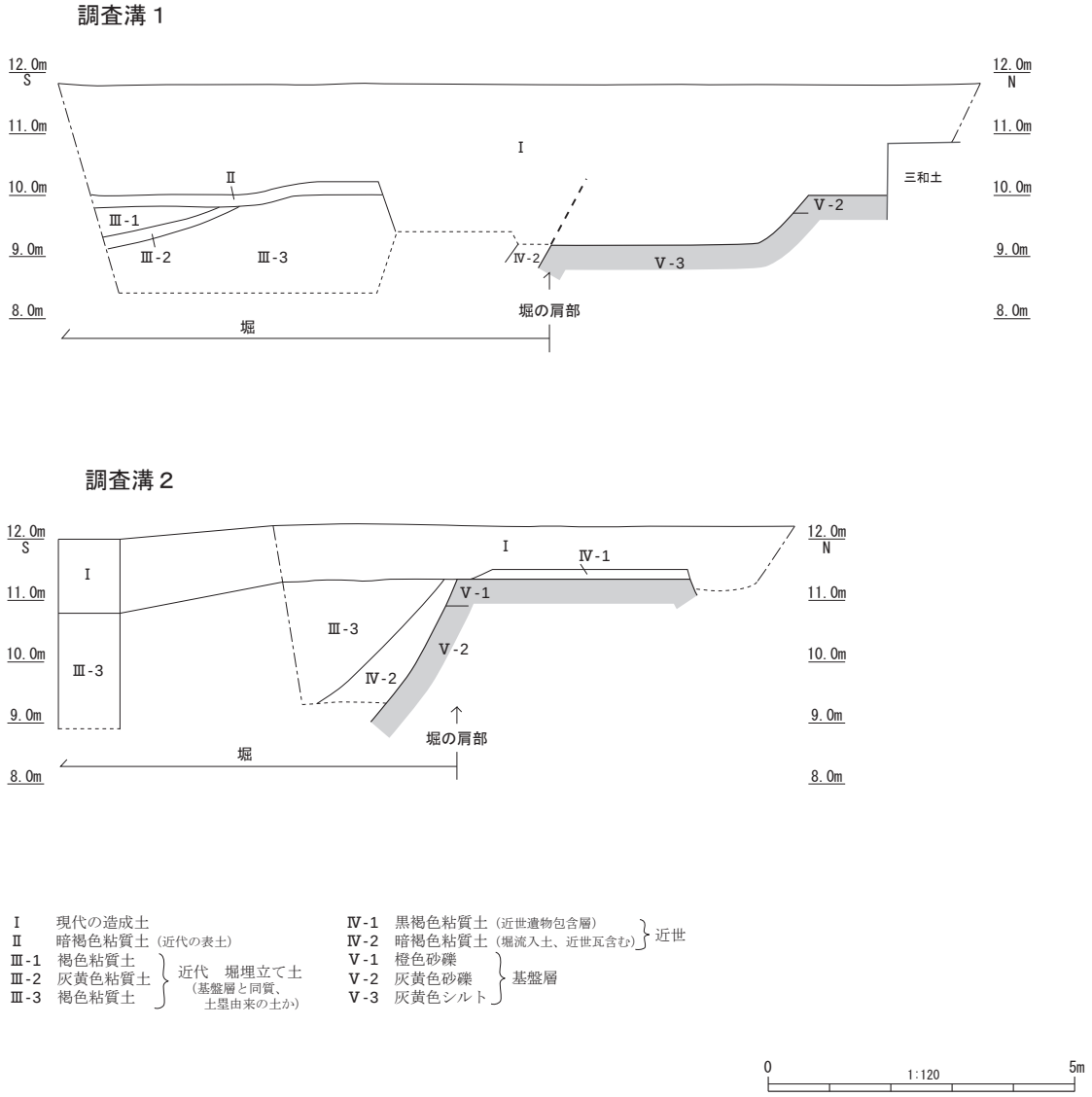


Fig.11　34 次調査の確認調査（31 次調査）土層断面図

４　調査の方法と経過

（１）33 次調査の方法と経過

調査の方法　表土や近代以降の土層は、バックホウによる掘削を行った。基盤層直上の暗褐色粘質土については近世の土層である可能性があったため、当初は手掘りによる除去を想定していたが、近代に降る遺物を含んでいることが重機掘削の途中段階で判明したため、基盤層上面まで重機掘削を行った。その後、基盤層上面で人力による遺構精査を行い、検出された遺構については半截あるいは土層観察用ベルトを残して掘削し、埋土の堆積状況を図面や写真に記録した後に完掘作業を進めた。遺構測量は、基本的にトータルステーションを用いて行い、土層断面図や遺物出土状態図については手測りによって実施した。写真撮影は、６×７判のフィルムカメラ（モノクロネガ、カラーリバーサル）を使用し、フルサイズセンサーのデジタルカメラを補助的に併用した。

調査の経過　現地調査は令和２（2020）年４月 16 日から開始した。４月 16 日から 24 日にかけて重機による表土掘削を行い、４月 17 日から 27 日にかけて重機掘削を終えた部分から人力による遺構精査を行った。４月 21 日から 30 日にかけては検出された遺構埋土の掘削を順次行い、４月 30 日と５月１日に全体清掃、５月１日に全景および遺構完掘状況の写真撮影を行った。遺構測量や写真撮影は、調査の途中で適宜実施し、５月１日までにすべての現地作業を完了した。

整理作業　現地調査終了後の令和２年５月から令和３年３月にかけて、整理作業及び報告書編集作業を浜松市地域遺産センターにおいて実施した。なお、出土遺物の写真撮影、報告書全体の編集作業については、34 次調査分とあわせて株式会社イビソクに委託した。

調査参加者

現地調査　大野功、纐纈鉱治、澤木延文、鈴木義則、竹内誠一、寺田達人、山口義信

整理作業　内山敦世、北野恵子、中村玲子、長谷川房江、水島絵理、峯野洋子、森下朋子

（２）34 次調査の方法と経過

調査区の設定　調査箇所において集合住宅建設が計画されたため、それに先立ち記録保存のため本調査を実施した。確認調査（31 次調査）で検出した堀跡の範囲が入るように、調査区を設定した。排土処理の都合上、調査区西側をＡ区、調査区東側をＢ区に分け、Ａ区、Ｂ区の順に反転調査を行った。

グリッド設定（Fig. 12）　調査を開始するにあたり、世界測地系に基づく平面直角座標第Ⅷ系を用い、33 次調査区から連続して５ｍ間隔のグリッドを設定した。原点は、グリッド北西隅（X=-142,995、Y=-70,835）とし、東西方向にアルファベット、南北方向に数字を用い、各々を組み合わせて呼称した。

調査の方法　重機掘削及び排土処理、埋戻しは開発事業者側が行った。バックホウで表土や攪乱土、堀内部の埋め立て土を除去した後、人力で遺構の検出・掘削を行い、堀内部の埋土は遺物が多く軒瓦（家紋瓦含む）などが出土したため、特に慎重に掘削を行った。堀からの出土遺物はグリッドごとで取り上げた。また堀の深さが地表面から６ｍ以上と想定を超えており、湧水も著しかったため、作業の安全確保と隣接地への影響を考慮して、堀の内部の調査は隣接地から約２ｍ控えを確保した上で法面を設けて掘削を行い、建設工事が遺跡に影響を及ぼす深度（地表面－ 4.5 ｍ）までの調査とし、堀底面はトレンチによる部分的な確認に留めた。遺構測量は、トータルステーションによる三次元計測と、オルソ画像を用いた写真測量、手実測を併用して行った。写真撮影は主に６

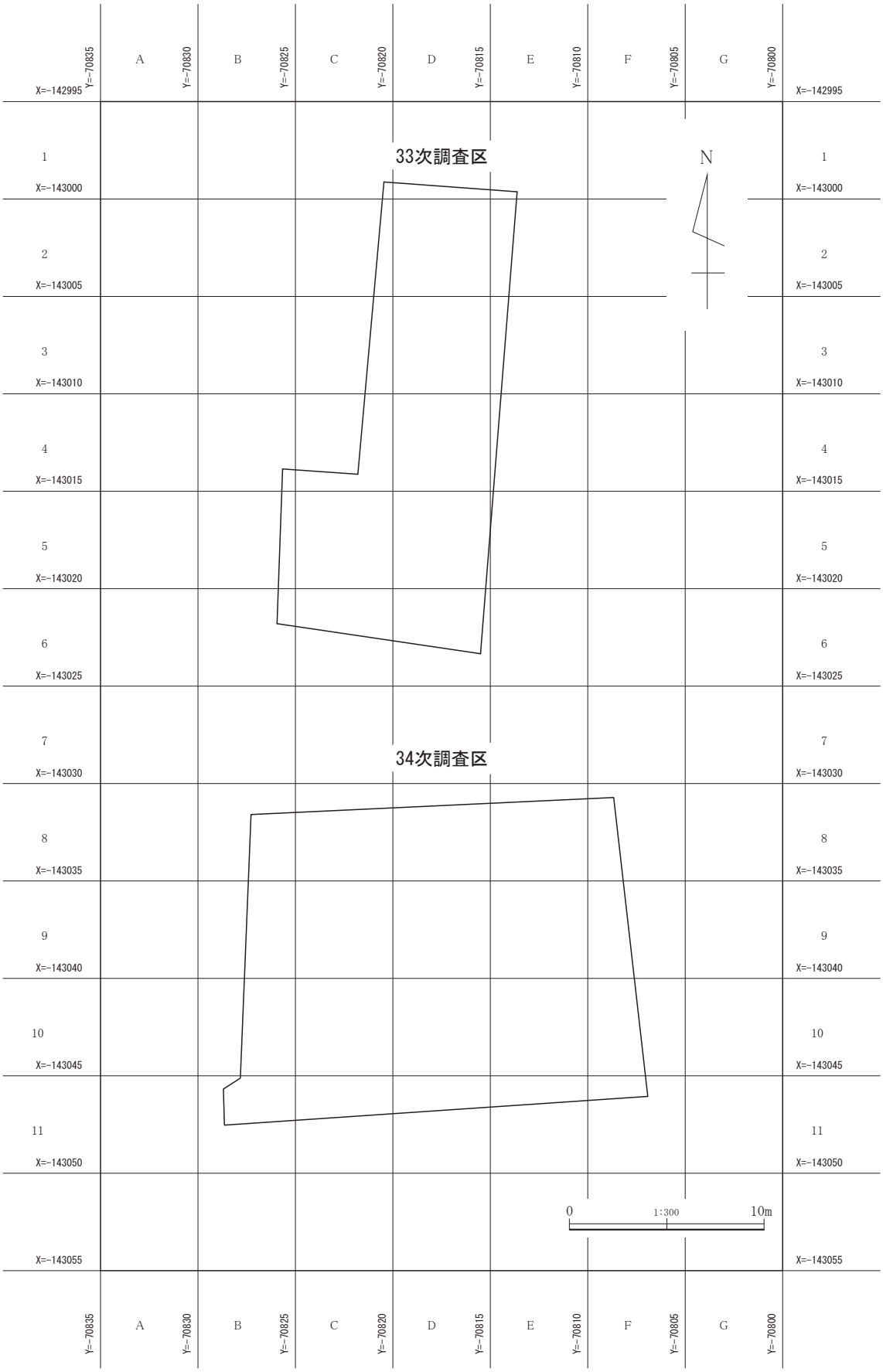


Fig. 12　33 次・34 次調査区配置図

×７判のフィルムカメラ（モノクロネガ、カラーリバーサル）を使用し、フルサイズセンサーのデジタルカメラを補助的に併用した。完掘状況写真撮影においては４×５判のフィルムカメラも用い、ドローンでの垂直写真・景観写真も撮影した。

調査の経過　2020 年６月 15 日からＡ区の調査を開始した。堀両岸肩部を確認し、堀内部の埋土から家紋瓦などが出土した。７月 31 日にＡ区の調査が終了した。８月３日からＡ区の埋戻しとともにＢ区の調査を開始し、９月２日に埋戻しを終えて、現地調査は全て終了した。

整理作業　現地調査終了後、2020 年９月から 2021 年３月までの間、株式会社イビソク名古屋支店にて整理作業を実施した。

調査参加者

現地調査　石岡幸、影山文子、佐藤政治、鈴木清、須部公夫、辻健治、藤原豊廣

整理作業　今西菜見、田中夕佳、田邉慧、長谷川弘子

Fig. 13　作業風景
1：33 次現地調査、２：34 次現地調査、３：整理作業風景、４：報告書編集作業風景

第２章　33 次調査の成果

１　概要

（１）調査の概要

調査区の位置　33 次調査は浜松城三の丸の南西部にあたる箇所で行われた。調査地は大手門から城内へ入りすぐ左手の位置に当たり、東側は大手門、南側は土塁・堀に面していた箇所である。

近世の絵図においては、「侍町」や「侍」、「屋舗地」などと表記されている場所であり、城主の家臣の屋敷が存在していたと考えられる。17 世紀後半に作成された青山御家中配列図では、その位置に蜂須加新右衛門と家臣名が記されているが、建物の配置まで表現されている絵図は存在しない。

検出遺構・出土遺物　遺構は、柱列跡２条、土坑 30 基、小穴 51 基、溝８条、不定形遺構１基が検出された。明確に遺物を伴う遺構は少ないため、一部近代の遺構も含まれている可能性があるが、出土遺物よりおおむね近世段階に位置付けられる。出土遺物は、瓦、陶磁器、土師器を中心に、銅銭、和釘等の鉄製品、鉄滓、碁石等が出土している。

（２）周辺の地形と基本土層

調査区周辺の地形　現況地形は、西側から東側へ緩やかに傾斜しており、南側敷地との境界部分は約１ｍの段差を有して低くなっていた。南側の土地との段差は、三の丸内部や土塁を整備する際の造成行為によって生じた可能性が考えられる。

基本土層　基本的に基盤層直上まで近代以降の土層であり、近世以前の遺物包含層は確認できなかった。地表面から基盤層までの深さは約１ｍであるが、土塁の存在が想定される調査区南端部は基盤層が急激に上がっている。標準的な土層堆積状況は Fig. 14 のとおりである。基盤層（Ⅳ層、黄褐色礫混じり粘質土）直上にⅢ層（暗褐色粘質土）が 15 ～ 20 ㎝程度堆積し、その上にⅡ層（基盤層と同質の土による整地層）が 20 ～ 30 ㎝程度行われ、その上部はⅠ層（近現代の盛土）である。基盤層と同質の整地土（Ⅱ層）は、廃城後に行われた土塁削平時の発生土である可能性が考えられる。

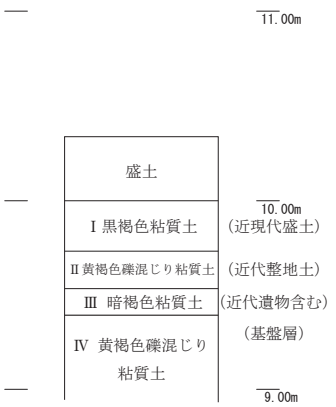


Fig. 14　標準土層堆積図

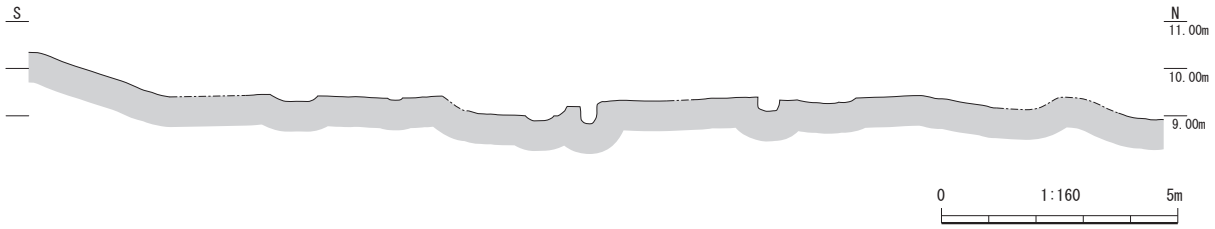


Fig. 15　33 次調査区縦断面図

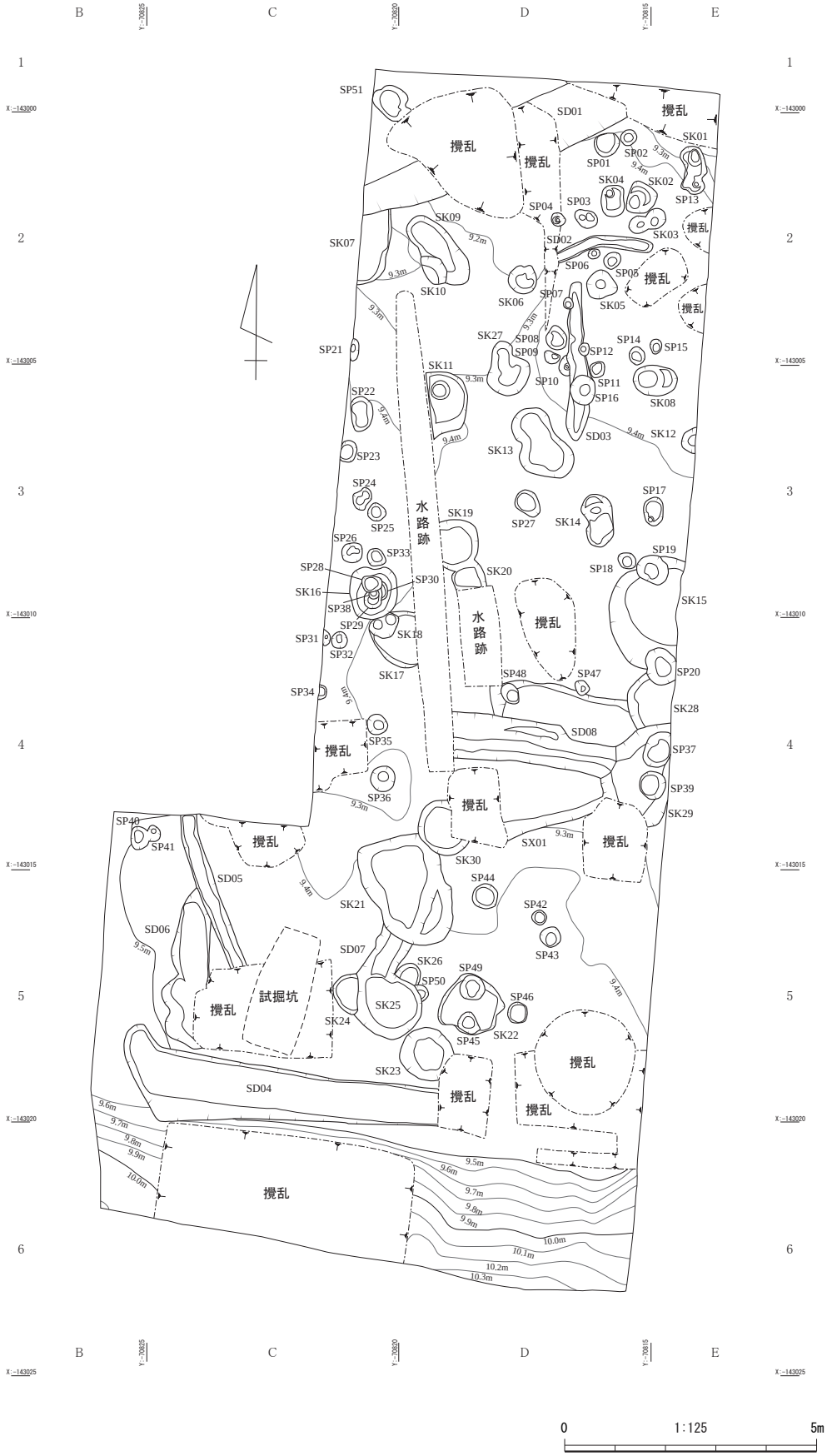


Fig. 16　33 次調査区全体平面図

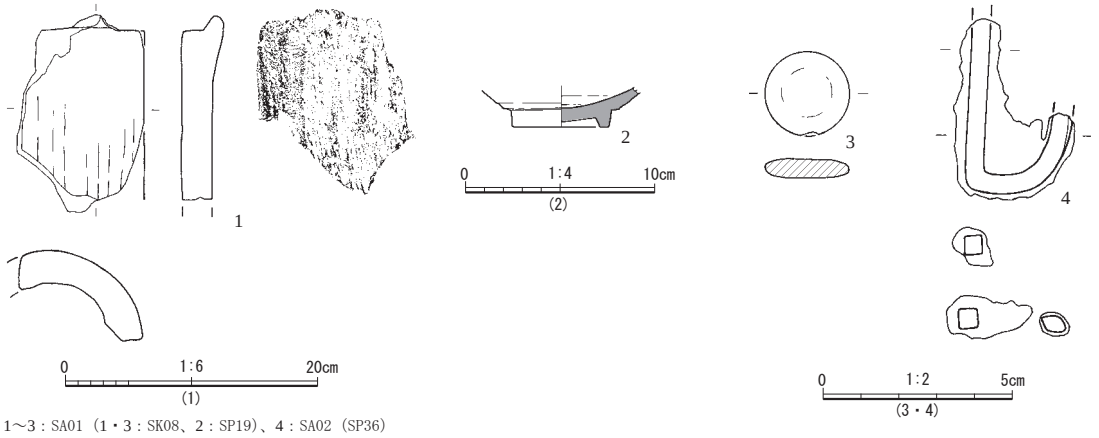
２　検出遺構と出土遺物

（１）柱列跡

SA01・02　調査区中央付近で検出された。柱間の寸法は SA01・02 ともに約 3.6 ｍである。検出されている柱穴は SA01 が SK02・08、SP19・37、SA02 が SP22・28・36 で、柱穴の規模は SA01 が直径 0.6 ｍ前後、SA02 が直径 0.4 ～ 0.5 ｍ前後である。いずれの柱穴も底面の標高は 8.7 ～ 8.8 ｍ、検出面からの深さは 0.6 ～ 0.7 ｍである。礎石や根固め石、柱痕のようなものは確認されていない。主軸は SA01 が N-4°-W、SA02 が N-5°-W で平行に近い。現代の地割の方向（N-6°-E）とは異なるが、両柱列間に延びる近代初頭とみられる水路跡とほぼ平行である。

SA01・02 は、柱穴の位置関係が一致していることから１棟の建物の柱穴となる可能性も考えられるが、若干主軸の向きが異なり、梁間が 5.4 ｍとやや広すぎること、柱穴の規模や出土遺物の時期に若干の差異がみられることなどから、別の遺構として取り扱うこととする。

出土遺物は、SA01 を構成する SK08 から１・３、SP19 から２、SA02 を構成する SP36 から４が出土している。１は丸瓦である。凹面に粗い布目状圧痕や棒状刺突痕が確認されるが、全体的に摩滅している。２は瀬戸美濃産の碗の底部である。内面に透明度の高い灰釉が施されており、外面は露胎である。登窯第１段階第３・４小期頃に位置づけられる。３は碁石（黒石）である。直径 2.2 ㎝、厚さ５㎜、重量 3.8g を測る。４は鉄製品である。両端を欠損しており用途不明であるが、鉤状または環状を呈するとみられる。その他小片のため図示していないが、SK02 からかわらけ、SK08 から土師器・陶器・鉄製品、SP22 から土師器や磁器、SP28 から瓦、SP36 から瓦や磁器、SP37 から瓦が出土している。SA01・02 の時期は出土遺物に乏しく詳細な年代を与えることができないが、SA01 は 17 世紀半ば頃、SA02 は 18 世紀以降と推定される。



1～3：SA01（1・3：SK08、2：SP19）、4：SA02（SP36）

Fig.17　SA01・02 出土遺物実測図

（２）土坑

SK02　SA01 を構成する柱穴である。形状はやや不整な円形で、規模は 0.64 ｍ× 0.58 ｍ、深さ 0.65 ｍを測る。出土遺物については前述のとおりである。

SK05　形状はやや不整な円形で、規模は 0.62 ｍ× 0.58 ｍ、深さ 0.6 ｍを測る。かわらけの小片が出土している。

SK06　円形を呈し、規模は直径 0.56 ｍ、深さ 0.2 ｍを測る。遺物は出土していない。

SK08　SA01 を構成する柱穴である。楕円形を呈し、規模は 0.88 ｍ× 0.6 ｍ、深さ 0.75 ｍを測る。

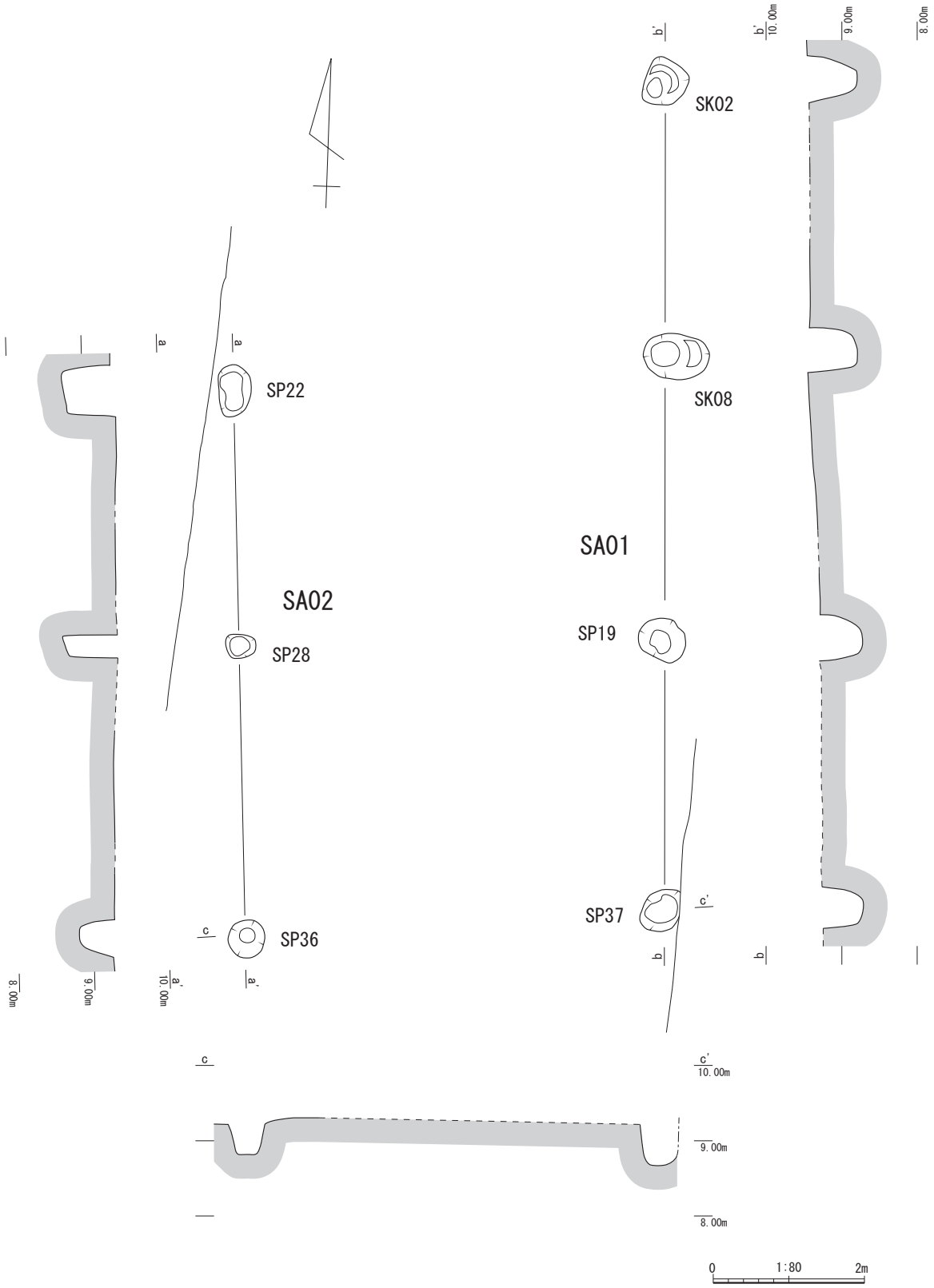


Fig.18　SA01・02 実測図

出土遺物については前述のとおりである。

SK09　細長い楕円形を呈し、規模は 1.65 m× 0.7 m、深さ 0.25 mを測る。SK10 に切られている。埋土は下層に被熱によって固結した層が確認されている。出土遺物は５の丸瓦が確認された。凹面に粗い布目痕が残るが全体的に摩滅している。他にかわらけの小片が出土している。遺構の時期は、出土遺物や切り合う SK10 との関係から、17 世紀後半～ 18 世紀頃と考えられる。

SK10　円形の土坑で斜めに掘り込まれているため西側がオーバーハングしている。規模は 0.65 m× 0.55 m、最深部は 0.4 mを測る。SK09 を切っている。遺構の傾きに合わせるように、６の甕が斜めに据え付けられている。口径 32.6 ㎝、器高 27.4 ㎝を測る。半胴状であるが口縁部が外側に屈曲して開き、胴部上方に 13 本の横線が巡る。内外面に鉄釉を流し掛けしている。登窯第３段階第９・10 小期頃に位置づけられる。遺構の時期は甕の年代から 19 世紀前半以降と考えられる。

SK11　直径 1.3 m、深さ 0.3 mを測る円形の土坑で、西側が近代の水路跡によって切られている。遺構内に深さ 0.1 m程度の浅い小穴を伴う。出土遺物は７・８のかわらけの破片が出土している。いずれもロクロ成形によるものであるが７は摩滅が著しい。他に内耳鍋とみられる小片が出土している。遺構の時期は、出土遺物から 17 世紀代に遡る可能性も考えられるが、出土量がわずかなため確定的な年代を与えることは難しい。

SK13　不定形の浅い土坑である。長軸 1.5 m、短軸 0.94 m、深さ 0.1 mを測る。SK09 と同様に被熱により固結した埋土が確認されている。遺物は出土していないが、類似する SK09 と同時期の遺構とすれば、17 世紀後半～ 18 世紀頃と考えられる。

SK14　不定形の土坑である。桟瓦を出土しており、埋土の状況からも近世末～近代の遺構とみられるが、出土した９の瀬戸美濃産の皿は登窯第１段階第１・２小期に位置付けられる。

SK15　直径 2.2 m、深さ 0.3 mを測るやや大型の円形土坑である。東半分は調査区外に及んでいる。北側を SP19、南側を SP20 に切られている。出土遺物は土師器が出土している。10 は非ロクロ成形のかわらけ、11 は焙烙である。また須恵器小片が混入している。遺物の出土量が僅かであり遺構の年代を確定することは難しいが、切り合い関係などから 17 世紀代まで遡る可能性がある。

SK18　SK16 に接し、SK17 を切っている不定形の土坑で、長軸 0.64 m、短軸 0.45 m、深さ 0.35 mを測る。底面は２箇所で凹んでおり、２基の小穴が切り合っているようにみえる。瓦・陶器の小片が出土している。

SK19　直径１m、深さ 0.2 mを測る円形土坑で、西側が近代の水路跡によって切られ、南側を SK20 と接している。遺物は 12・13 の瓦が出土している。12 は軒平瓦である。瓦当文は五葉紋２反転唐草紋である。13 は鬼瓦などの飾り瓦とみられる。表面には棒状工具による深い刺突痕が密に施されており、隣接する 34 次調査でも類似の瓦が出土している。他にかわらけの小片が出土している。遺構の時期は 17 世紀後半～ 18 世紀頃と考えられる。

SK21　長軸 2.25 m、短軸 1.62 m、深さ 0.45 mを測る不定形の土坑である。南側で SD07 を切っている。遺物は土師器、土製品、鉄滓等が出土している。14 は土師器の内耳鍋または焙烙である。15 は土製品である。器壁が厚く大型で浅い盤状になると思われるが用途は不明である。16 は碗形鉄滓である。重量 89g を測る。

SK23　直径約 1.05 m、深さ 0.7 mを測る円形土坑である。出土遺物に桟瓦を含み、埋土の状況からも近代の遺構とみられるが、出土した 17 の瀬戸美濃産擂鉢は大窯第１段階に位置付けられる。

SK25　長軸 1.5 m、短軸 1.2 m、深さ 0.8 mを測る楕円形の土坑である。北側で SD07 を切っている。遺物は磁器の小片が１点出土しているのみである。

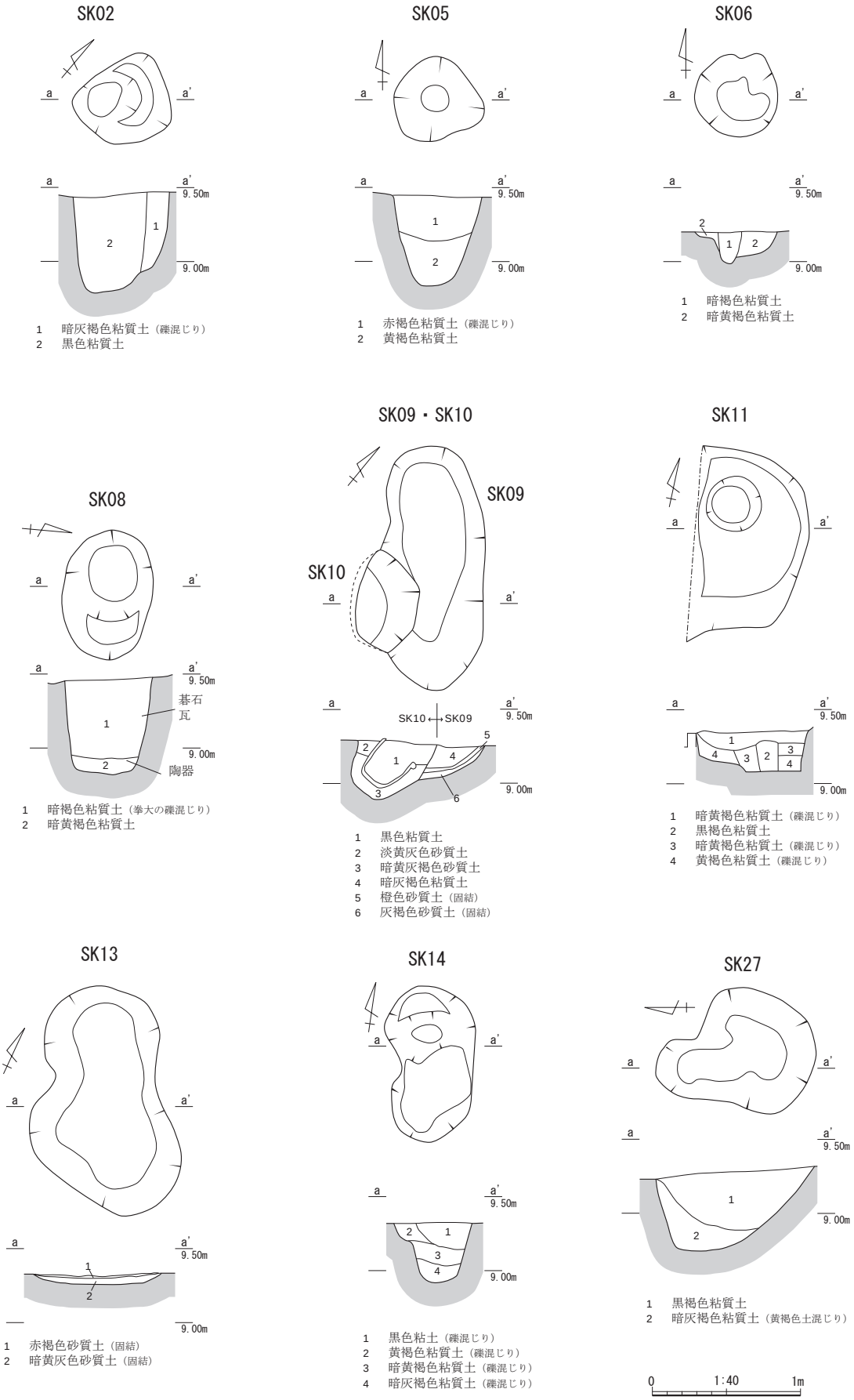


Fig.19　土坑実測図（1）

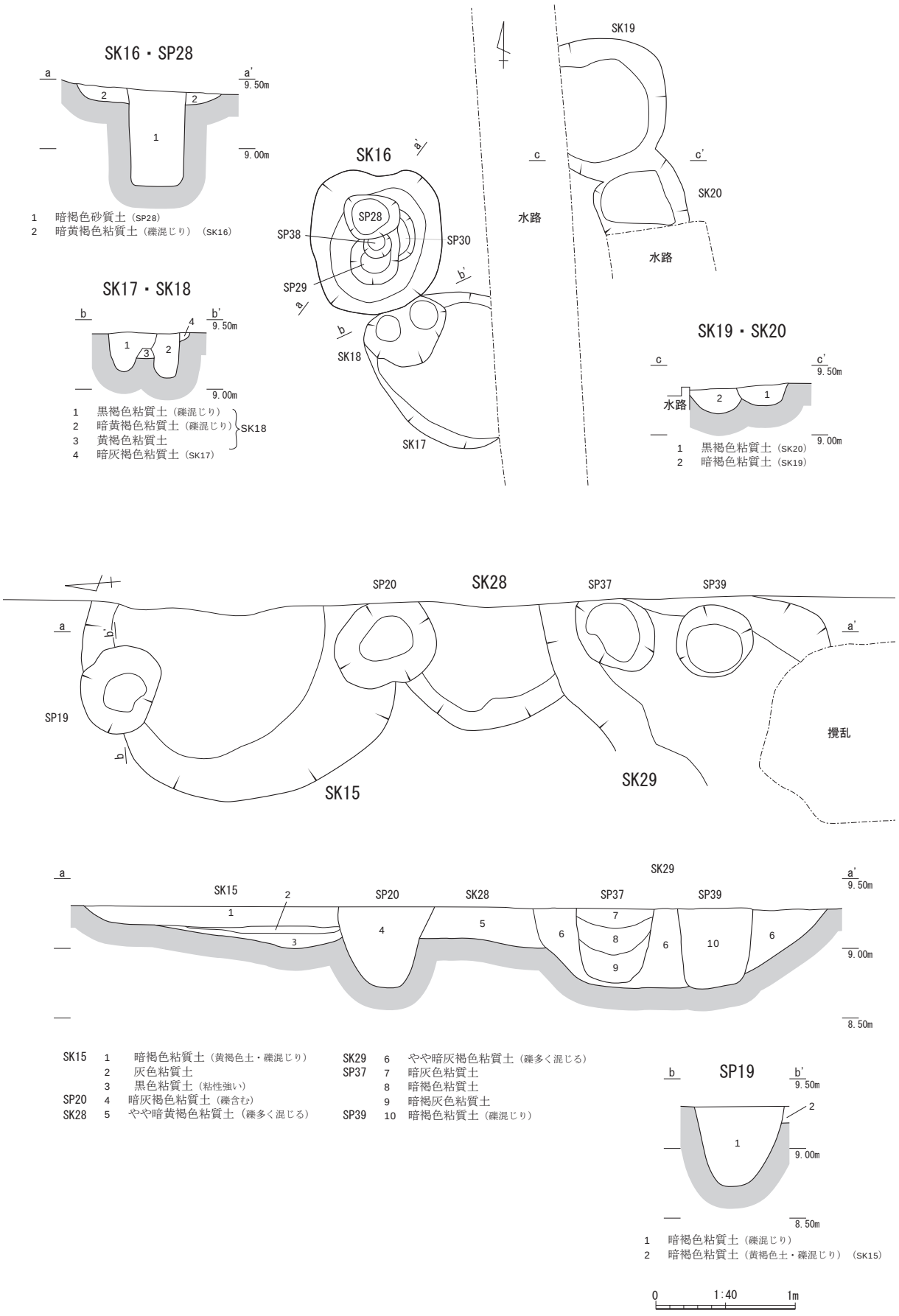


Fig.20　土坑実測図（２）

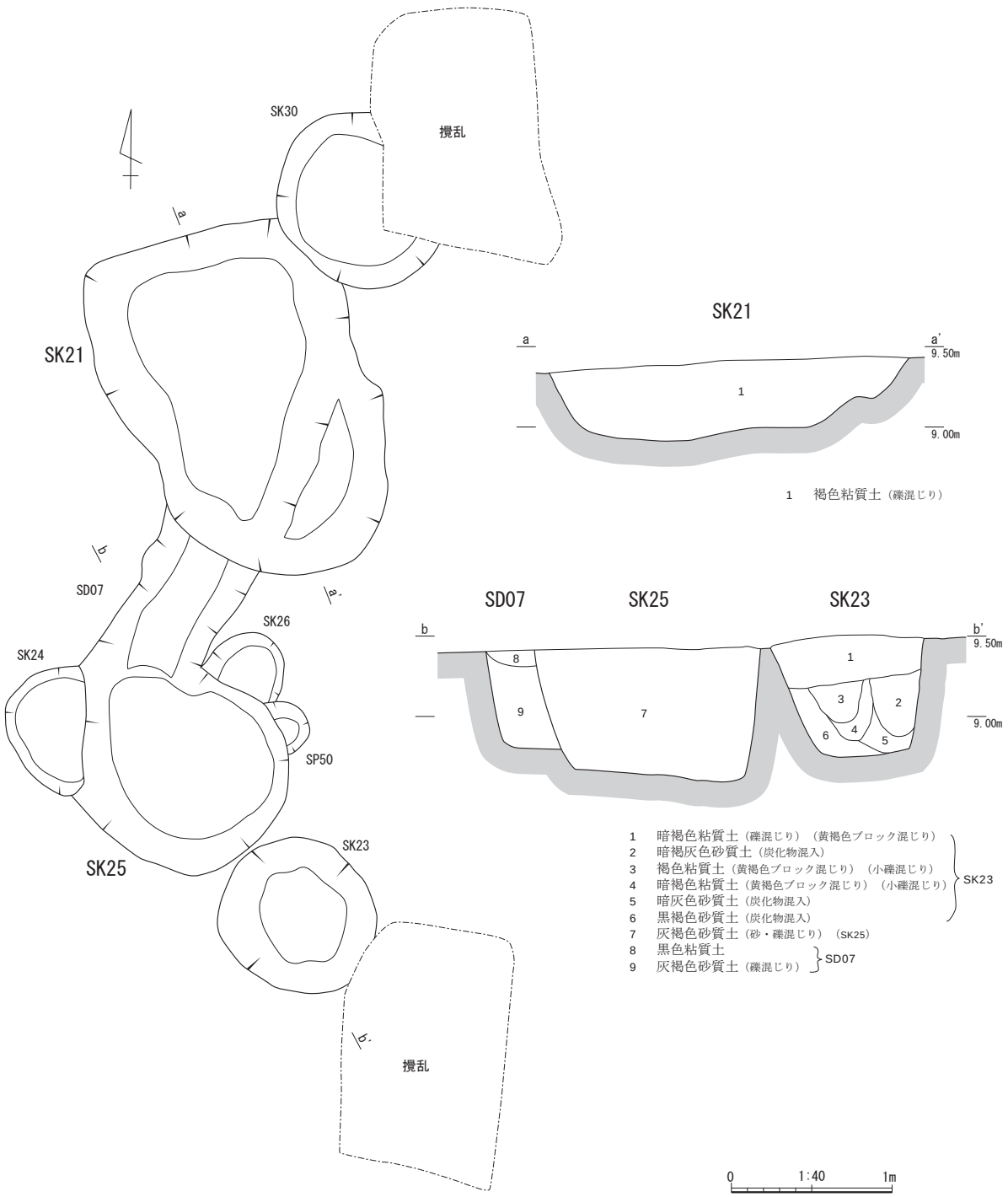
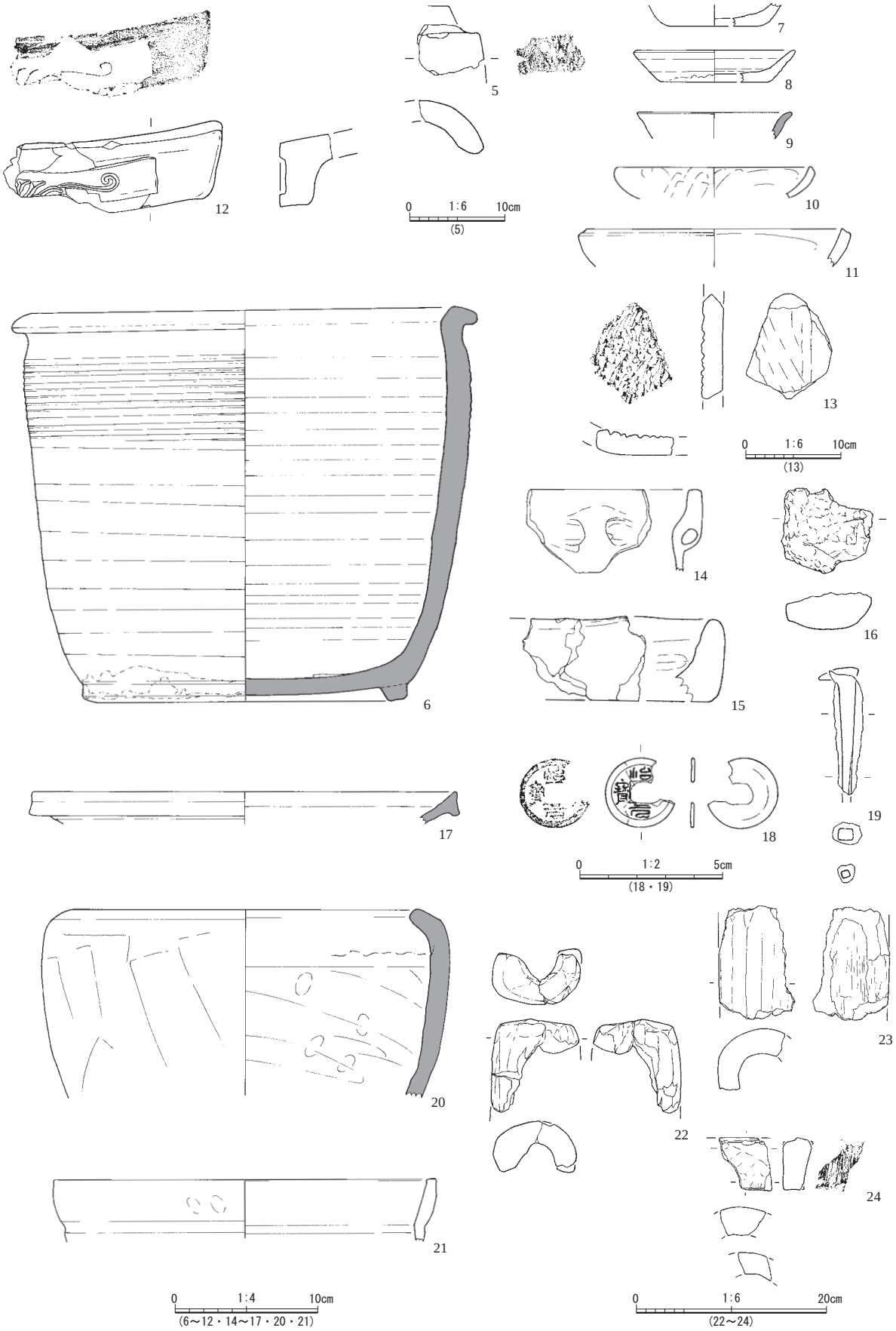


Fig.21　土坑実測図（3）

SK27　不定形の浅い土坑である。長軸 1.1 m、短軸 0.9 m、深さ 0.5 mを測る。遺物は桟瓦、土師器の小片が出土している。近世末～近代頃の遺構と考えられる。

SK28　東側が調査区外まで及んでおり、北側を SP20、南側を SK29 に切られているため全体像が掴めないが、直径 1 mを超える円形土坑とみられる。検出面からの深さ 0.3 mを測る。SX01 を切っており、SK29、SP20 に切られている。遺物は土師器、銅銭、鉄製品が出土している。18 は治平元宝である。初鋳年が 1064 年の北宋銭であるが、中世を通じて国内で流通した。19 は和釘である。その他にかわらけの小片が出土している。遺構の時期は出土遺物に乏しく不明であるが、治平元宝の存在から中世まで遡る可能性がある。



5：SK09、6：SK10、7・8：SK11、9：SK14、10・11：SK15、12・13：SK19、14～16：SK21、17：SK23、18・19：SK28、20～24：SK29

Fig.22　土坑出土遺物実測図

SK29　不定形の大型土坑である。東側が調査区外まで及んでいるが、長軸２ｍ、短軸 1.3 ｍ、検出面からの深さ 0.15 ｍを測る。SX01・SD08・SK28 を切り、SP37・39 に切られている。遺物は 20 ～ 24 が出土している。20 は火鉢状の陶器である。21 は内湾形内耳鍋である。22・23 は不明土製品である。鞴の羽口に似るが、筒状ではなく半筒状で端面を有する。粘土の接合部が剥離し疑似的に端面状を呈している可能性もあるが詳細不明である。24 は長さが 5.5 ㎝と短く、輪違瓦とみられる。出土遺物から遺構の時期を特定できないが、切り合い関係から 19 世紀までは降らないと考えられる。

（３）小穴

SP02　直径 0.3 ｍ、深さ 0.1 ｍを測る。25 の管状土錘が出土している。

SP05　長径 0.35 ｍ、短径 0.3 ｍ、深さ 0.18 ｍを測る。内耳鍋の小片が出土している。

SP11　長径 0.35 ｍ、短径 0.32 ｍ、深さ 0.53 ｍを測る。形状から柱穴とみられる。土師器の小片が出土している。

SP14　長径 0.35 ｍ、短径 0.3 ｍ、深さ 0.15 ｍを測る。土師器の小片が出土している。

SP15　長径 0.28 ｍ、短径 0.24 ｍ、深さ 0.05 ｍを測る。須恵器甕の小片が出土している。

SP17　長径 0.57 ｍ、短径 0.39 ｍ、深さ 0.3 ｍを測る。かわらけ、陶器の小片が出土している。

SP19　長径 0.65 ｍ、短径 0.56 ｍ、深さ 0.57 ｍを測る。SA01 を構成する柱穴であり、SK15 を切っている。前述のとおり瀬戸美濃産の陶器碗が出土しており、17 世紀中葉頃の遺構と考えられる。

SP22　長径 0.7 ｍ、短径 0.43 ｍ、深さ 0.65 ｍを測る。SA02 を構成する柱穴であり、土師器・磁器の小片が出土している。18 世紀以降の遺構と推測される。

SP24　長軸 0.4 ｍ、短軸 0.37 ｍ、深さ 0.36 ｍを測る。26 の瓦が出土している。丸瓦や平瓦よりも厚みがあり、片面が丸みを帯びていることから装飾的な瓦の一部と考えられる。

SP26　長径 0.42 ｍ、短径 0.38 ｍ、深さ 0.3 ｍを測る。27 の丸瓦が出土している。玉縁部の破片で磨滅が著しいが、凹面には棒状叩痕が確認される。

SP27　長径 0.57 ｍ、短径 0.45 ｍ、深さ 0.25 ｍを測る。28 の志野丸皿が出土している。登窯第１段階第２～３小期に位置づけられる。17 世紀半ば頃の遺構と推測される。

SP28　長径 0.4 ｍ、短径 0.34 ｍ、深さ 0.69 ｍを測る。SA02 を構成する柱穴であり、SK16・SP29・SP30・SP38 を切っている。瓦の小片が出土している。

SP35　直径 0.4 ｍ、深さ 0.28 ｍを測る。瓦、陶器の小片が出土している。

SP36　直径 0.5 ｍ、深さ 0.45 ｍを測る。SA02 を構成する柱穴である。瓦、磁器の小片が出土している。18 世紀以降の遺構と推測される。

SP37　長径 0.76 ｍ、短径 0.54 ｍ、深さ 0.54 ｍを測る。SA01 を構成する柱穴であり、SK29 を切っている。瓦の小片が出土している。

SP39　長径 0.52 ｍ、短径 0.45 ｍ、深さ 0.57 ｍを測る。遺物は出土していない。

SP43　直径 0.4 ｍ、深さ 0.54 ｍを測る。遺物は 29 のかわらけが出土している。非ロクロ成形によるもので、内外面には指頭痕が残る。

SP44　直径 0.5 ｍ、深さ 0.22 ｍを測る。遺物は 30 の磁器の他に内耳鍋の小片が出土している。

SP48　長径 0.45 ｍ、短径 0.33 ｍ、深さ 0.4 ｍを測る。SX01 を切っている。遺物は 31・32 が出土している。31 は肥前産とみられる磁器の碗の底部である。32 は平瓦である。他に須恵器、丸瓦、磁器の小片が出土している。18 世紀以降の遺構と推測される。

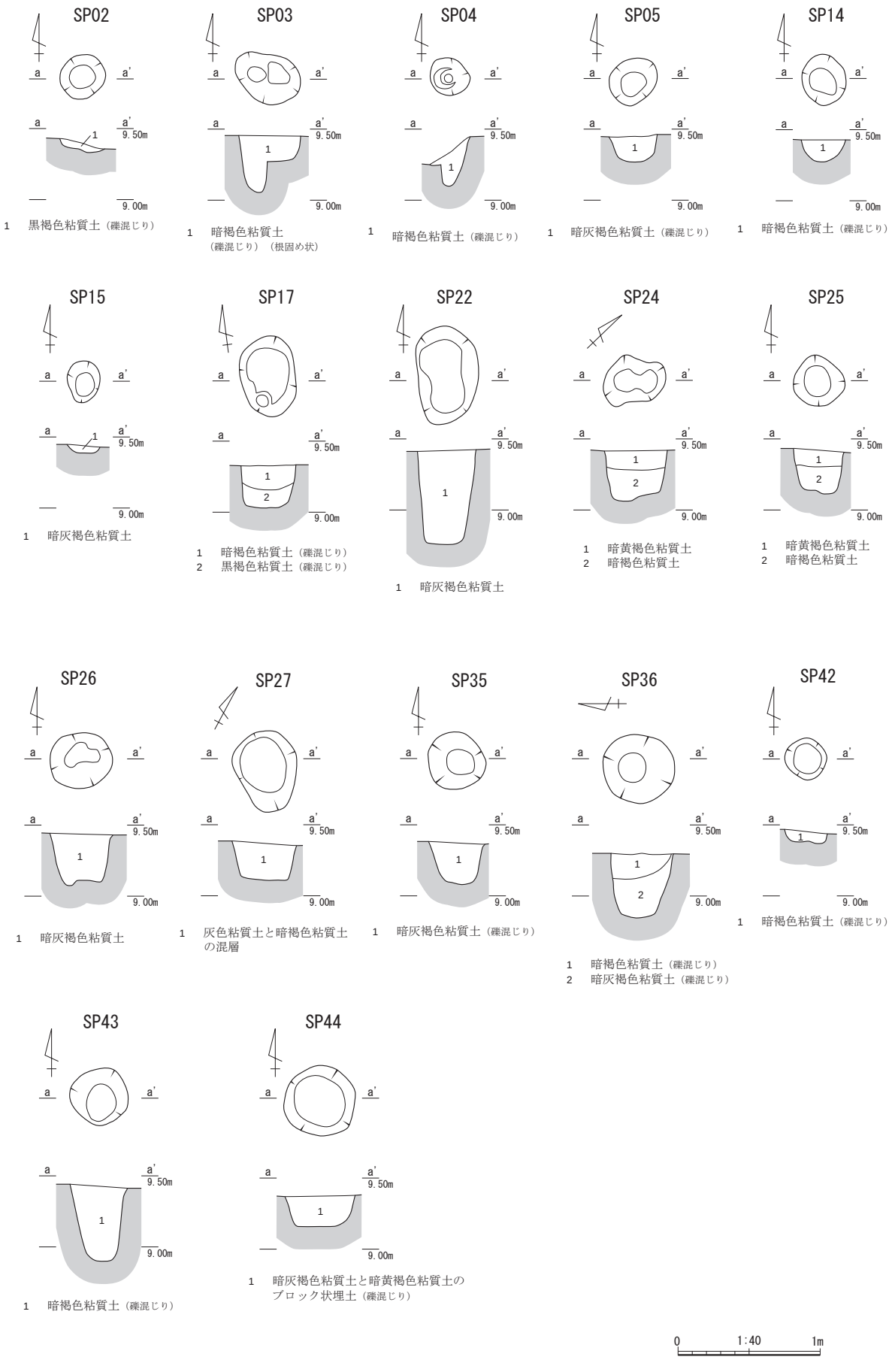
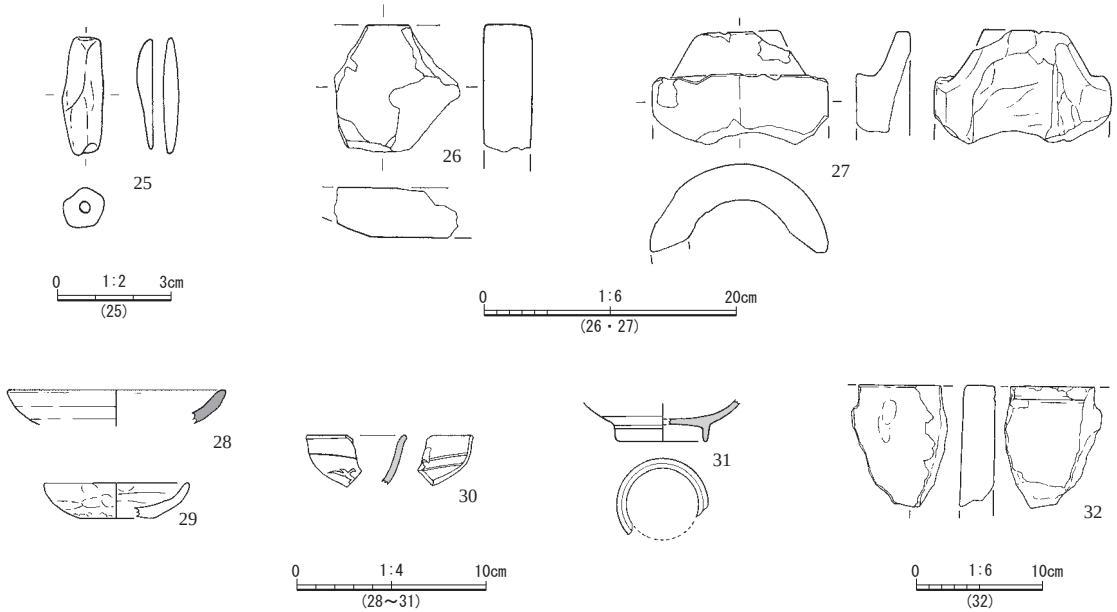

SP02
1　黒褐色粘質土（礫混じり）
SP03
1　暗褐色粘質土（礫混じり）（根固め状）
SP04
1　暗褐色粘質土（礫混じり）
SP05
1　暗灰褐色粘質土（礫混じり）
SP14
1　暗褐色粘質土（礫混じり）
SP15
1　暗灰褐色粘質土
SP17
1　暗褐色粘質土（礫混じり）
2　黒褐色粘質土（礫混じり）
SP22
1　暗灰褐色粘質土
SP24
1　暗黄褐色粘質土
2　暗褐色粘質土
SP25
1　暗黄褐色粘質土
2　暗褐色粘質土
SP26
1　暗灰褐色粘質土
SP27
1　灰色粘質土と暗褐色粘質土の混層
SP35
1　暗灰褐色粘質土（礫混じり）
SP36
1　暗褐色粘質土（礫混じり）
2　暗灰褐色粘質土（礫混じり）
SP42
1　暗褐色粘質土（礫混じり）
SP43
1　暗褐色粘質土（礫混じり）
SP44
1　暗灰褐色粘質土と暗黄褐色粘質土のブロック状埋土（礫混じり）
a
a'
9.50m
9.00m
0
1:40
1m

Fig.23　小穴実測図



25：SP02、26：SP24、27：SP26、28：SP27、29：SP43、30：SP44、31・32：SP48

Fig.24　小穴出土遺物実測図

（４）溝

SD01・04・05・06　埋土の状況や出土品から近代の溝と考えられる。SD05 からは 33 の登窯第１段階第２小期に位置づけられる織部焼の鉄絵鉢が出土している。

SD02　東西方向に延びる溝である。西端は攪乱で失われており、現存長 1.85 m、幅 0.24 m、深さ 0.05 mを測る。中央付近で少し屈折しており、西側は西南西の方向に延びている。遺物は内耳鍋または焙烙とみられる土師器の小片が出土していることから、近世の遺構であると推測される。

SD03　南北方向に延びる溝である。SP07・10・12・16 と切り合い関係にある。長さ 3.05 m、幅 0.24 ～ 0.42 m、深さ 0.05 mを測る。遺物は出土していない。

SD07　SK21 と SK25 に切られている。現存長 0.8 m、幅 0.6 m、深さ 0.55 mを測る。桟瓦、土師器、陶器の小片が出土している。

SD08　東西方向に延びる溝で、西端を近代の水路跡、東端を SK29、上部を SX01 に切られている。一部北側がテラス上に２段となっている。現存長 3.2 m、幅 0.6 ～ 0.9 m、検出面からの深さ 0.35 mを測る。遺物は出土していないが、切り合い関係から近世以前の遺構と考えられる。

（５）不定形遺構

SX01　調査区中央部で検出された大型の不定形遺構である。SD08 を切り、SK28・29、SP47・48 に切られている。また、西側は近代の水路や攪乱によって失われている。残存部の規模は、南北 3.2 m、東西 3.65 m、深さ８～ 15 ㎝を測る。遺物は、瓦、陶器、磁器、土師器、須恵器を出土しているが、いずれも小片であり、年代にも幅がみられるため、遺構の時期を特定することが難しい。図示できるのは 34 の内湾形内耳鍋のみである。

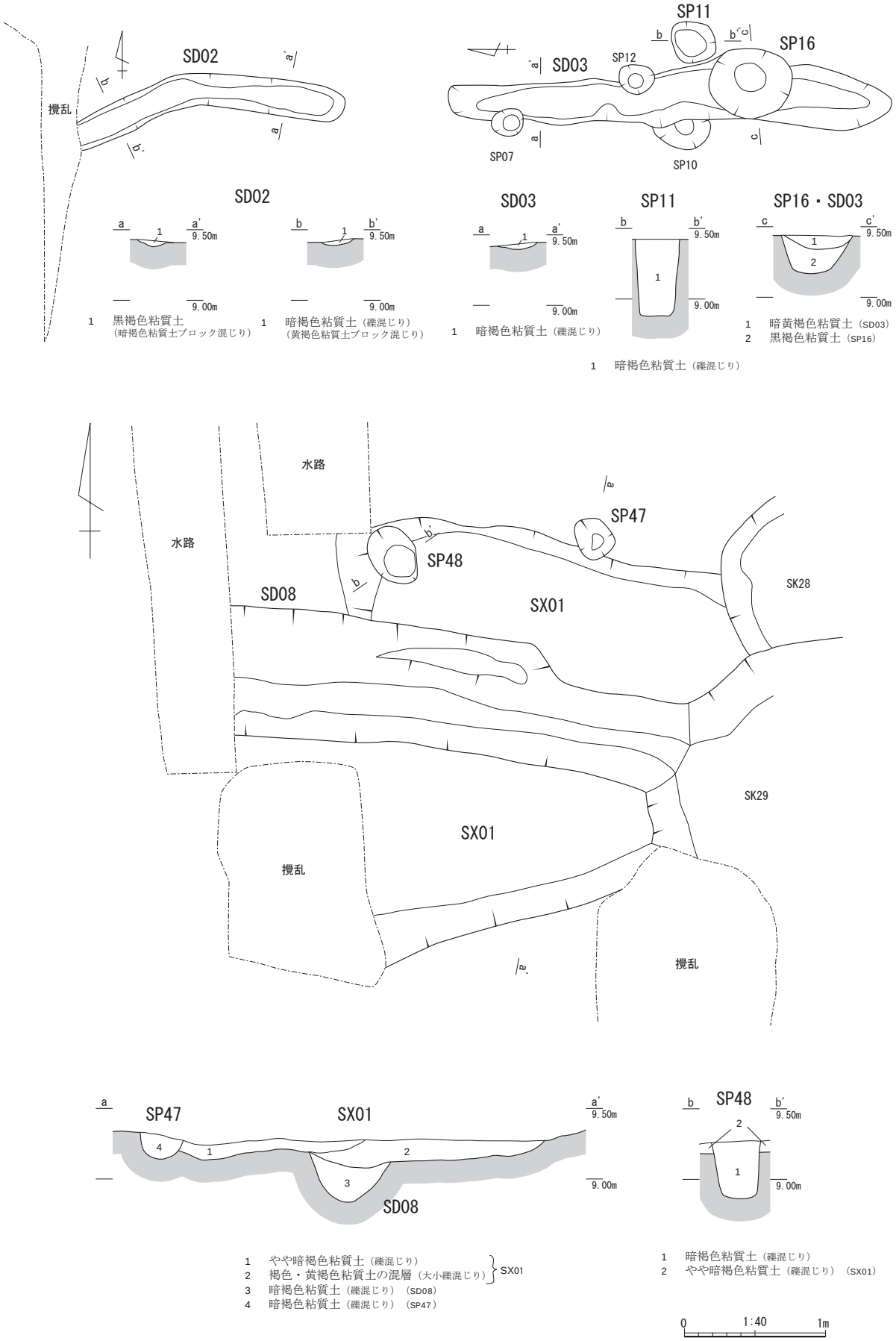


Fig.25　溝・不定形遺構実測図

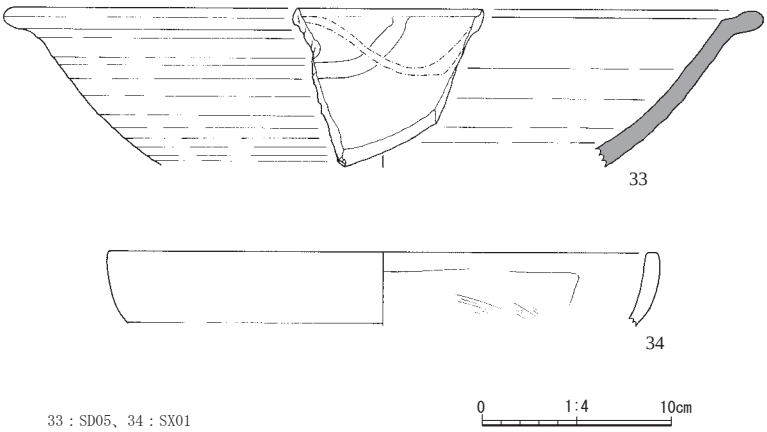


Fig.26　溝・不定形遺構出土遺物実測図

（6）遺構外の出土遺物

重機掘削時や、人力による遺構精査時などに遺構外で確認された出土遺物のうち、実測可能なものをFig.27・28に掲載する。

瓦　35は連珠三ツ巴紋の軒丸瓦である。瓦当面の1/2を欠失しているが、珠文数は８点とみられる。巴は反時計回りで尾が長い。36は軒平瓦である。瓦当面中央部付近の破片であるが、中心に12弁の菊紋、外側に唐草紋を配しているのが確認される。唐草紋は端部を欠失しているが、形状より３反転するものと考えられる。37は軒丸瓦である。小片であり瓦当紋様は確認できない。38～44は丸瓦である。いずれも小片であり、全体像をうかがえるものは確認されていない。39は布目痕や吊り紐圧痕、40は布目痕と棒状叩き痕、43はコビキＢ技法など、凹面に製作時の痕跡が確認される。44には釘穴が穿たれている。45は平瓦である。凹凸面ともにナデ調整が施されている。46は長さが5.1㎝と短いことから輪違瓦と考えられる。47～49は桟瓦である。いずれも近代初頭とみられる水路跡の底面に敷かれていたものであり、幅は不明であるが長さは23～28㎝を測る。近世末～近世初頭の所産と考えられる。

陶磁器・土器類　50～52は陶器である。50は瀬戸美濃産とみられる舟徳利である。内外面に鉄釉が施されている。大窯第３段階の所産と考えられる。51は外面に鉄釉の施された蓋である。近代に降る可能性がある。52は志戸呂産とみられる鉢の底部である。残存部に釉は認められず高台内側周辺には小礫が付着している。53・54は磁器である。53は染付碗である。近代に降る可能性がある。54は肥前産とみられる染付皿である。55・56はかわらけである。いずれもロクロ成形によるものである。

その他　57～59は銅銭である。57は天保通宝である。近世末～明治にかけて流通したもので、小判形を呈している。58・59は寛永通宝である。60は針状の鉄製品である。用途は不明であるが、先端を極めて細く仕上げている。61～63は棒状の石製品である。用途は不明で、61の断面は方形を呈する。62・63は断面を多角形に加工しており、先端を尖らせている。64～68は文字が記された近代以降の出土品である。64～67はガラス製の瓶である。64は「MEIDI-YA」(明治屋？)、65は「玄蕃商会」、66は「～商標」「日本～」、67は「登～」「〇二」という文字が読み取れる。68は文鎮とみられる円盤状の陶器である。上面と側面には鉄釉が施されており、底面は露胎である。上面中央に把手を有し、周囲には月桂冠紋と「賞」の文字がみられる。また、底面には「あいち」「新愛～」の文字がみられる。何らかの賞品・記念品として製作されたものとみられる。

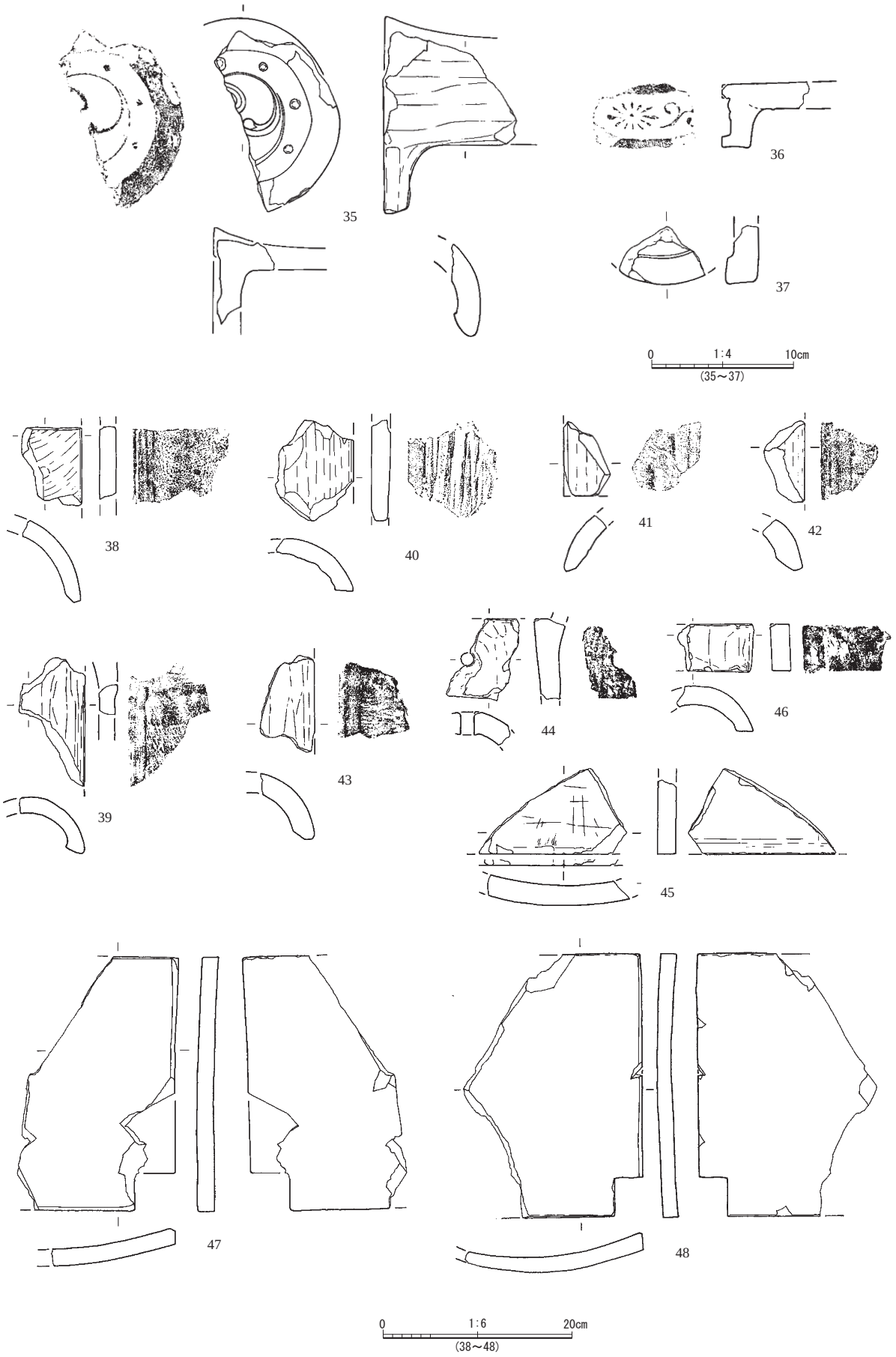


Fig.27　遺構外出土遺物実測図（１）

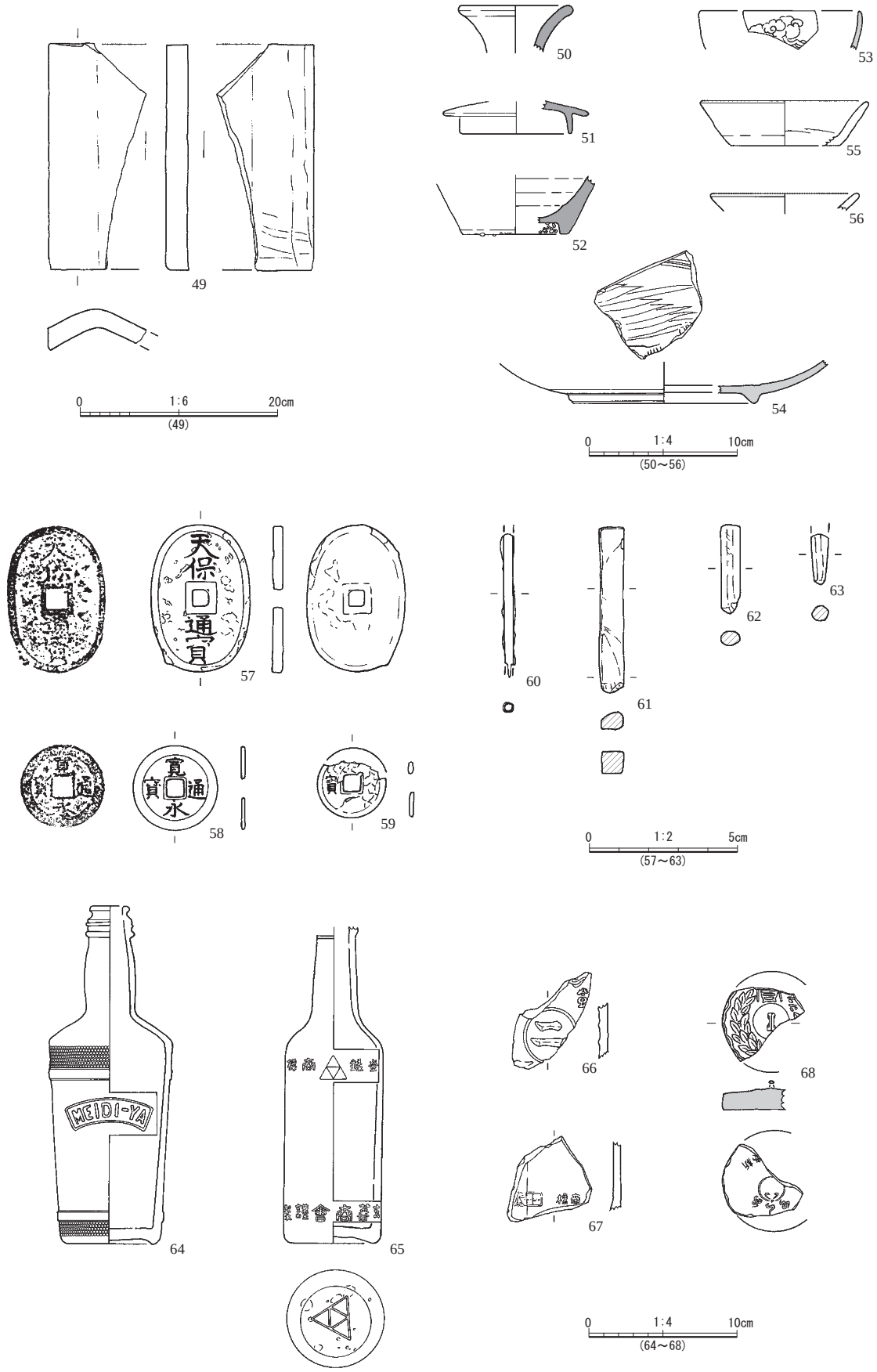


Fig.28　遺構外出土遺物実測図（2）

３　小結

今回の調査は浜松城三の丸の南西部に相当する箇所で行われた。これまで浜松城跡の発掘調査は、天守曲輪や本丸、二の丸、引間城（古城）とその周辺にほぼ限られており、三の丸の状況は不明であったが、今回の調査によって、近代以降の市街地化の影響を大きく受けながらも遺構・遺物が残存していることが明らかとなった。

検出された遺構の中では、柱列跡 SA01・02 が注目される。今回の調査地は近世の絵図で「侍町」や「侍」、「屋舗地」等と記されているが、建物は表現されていない。調査範囲の制約等から柱列の性格を明確にできなかったが、建造物の存在を捉えられたのは、今後に向けた収穫といえる。また、土塁に面した調査区南端部では基盤層が急激に高くなっている状況が確認された。三の丸整備時に斜面地形を削り取ることで土塁の内側の三の丸に平坦面を作り出した可能性がうかがえる。

遺物については出土量が多くないものの、大窯段階～登窯第１段階（16 世紀後葉～ 17 世紀中葉）の陶器が一定量確認された点が注目される。三の丸が整備された時期については、堀尾氏が転封し松平氏が城主となった 17 世紀初頭から太田氏が城主を務めた 17 世紀中葉までの間と考えられており、出土した陶器の年代は三の丸整備の時期に先行または符合する。

また、土塁上の塀や大手門等に葺かれていたとみられる瓦も一定数確認されている。次章で報告する 34 次調査で堀から出土した飾り瓦（Fig.47-83・Fig.48-85）と類似する個体（13）も出土しており、城の外縁部の施設で用いられた瓦の様相を知る上でも注目される。

Tab.2　浜松城跡 33 次調査　出土遺物観察表（１）

Fig.	No.	遺　構	種　別	細　別	反転	口径・幅（cm）	器高・長（cm）	底径・厚（cm）	残存率(%)	色　調	備　考
17	1	SA01(SK08)	瓦	丸瓦	－			2.6	20	灰	凹面布目圧痕、棒状叩き痕
17	2	SA01(SP19)	陶器	丸碗	反			4.9	30	灰白	瀬戸美濃産、内面透明釉、登窯第１段階第３～４小期
17	3	SA01(SK08)	石製品	碁石	－	2.2	2.2	0.5	100	黒	重さ 3.8g
17	4	SA02(SP36)	鉄製品	不明	－			0.4			環状または鉤状
22	5	SK09	瓦	丸瓦	－			2.5	5	暗灰	玉縁部、凹面粗い布目圧痕
22	6	SK10	陶器	甕		29.4	27.4	20.5	100	灰白	瀬戸美濃産、鉄釉流し掛け、登窯第３段階第９～ 10 小期
22	7	SK11	土師器	かわらけ	反			6.2	20	浅黄橙	ロクロ成形
22	8	SK11	土師器	かわらけ	反	10.8	2.2	7.2	30	淡黄	ロクロ成形
22	9	SK14	陶器	丸皿	反	10.6			10	淡黄	瀬戸美濃産、長石釉、登窯第１段階第１～２小期
22	10	SK15	土師器	かわらけ	反	13.6			10	にぶい黄橙	非ロクロ成形
22	11	SK15	土師器	焙烙	反	17.8			5	浅黄橙	
22	12	SK19	瓦	軒平瓦	－				5	灰	五葉紋２反転唐草紋
22	13	SK19	瓦	飾り瓦	－			2.2	5	灰	凹面棒状工具による刺突紋
22	14	SK21	土師器	内湾形内耳鍋	－				5	浅黄橙	内耳部破片
22	15	SK21	土製品	不明	－		5.9		5	にぶい黄橙	盤状？　22・23 と胎土は類似
22	16	SK21	鉄滓	碗形鉄滓	－	(6.3)	(5.9)	(2.7)			小礫多く含む
22	17	SK23	陶器	擂鉢	反	29.4			5	淡黄	瀬戸美濃産、鉄釉、大窯第１段階
22	18	SK28	銅銭	治平通宝	－	2.5	2.5	0.1	80		重さ 1.8g
22	19	SK28	鉄製品	和釘	－		(4.3)	0.6	50		
22	20	SK29	陶器	鉢	反	24.0			10	橙	外面鉄釉
22	21	SK29	土師器	内湾形内耳鍋	反	26.6			5	にぶい黄橙	
22	22	SK29	土製品	不明	－	(7.0)	(12.0)	2.5		にぶい黄橙	鞴の羽口か
22	23	SK29	土製品	不明	－	(9.3)	(9.8)	3.1		灰白	鞴の羽口か　SK21 出土破片と接合
22	24	SK29	瓦	輪違瓦	－	(5.0)	5.5	2.2	30	灰白	凹面縦方向に筋状の調整痕
24	25	SP02	土製品	管状土錘	－	1.1	3.1	0.4	100	にぶい橙	重さ 2.7g
24	26	SP24	瓦	飾り瓦	－			3.9	5	暗灰	

※括弧内の数値は現存値

Tab.3　浜松城跡33次調査　出土遺物観察表（2）

Fig.	No.	遺　構	種　別	細　別	反転	口径・幅（cm）	器高・長（cm）	底径・厚（cm）	残存率(%)	色　調	備　考
24	27	SP26	瓦	丸瓦	－	14.0		2.8	10	灰	玉縁部、凹面棒状叩き痕
24	28	SP27	陶器	丸皿	反	11.4			10	灰白	瀬戸美濃産、登窯第1段階第2～3小期
24	29	SP43	土師器	かわらけ	反	7.4	1.8	3.8	20	浅黄橙	非ロクロ成形
24	30	SP44	磁器	染付碗	－				5	灰白	肥前産か
24	31	SP48	磁器	染付碗	－			4.6	40	灰白	肥前産か
24	32	SP48	瓦	平瓦	－	(7.7)	(9.7)	2.7	5	灰	
26	33	SD05	陶器	鉄絵鉢	反	39.0			10	淡黄	瀬戸美濃産、登窯第1段階第2小期
26	34	SX01	土師器	内湾形内耳鍋	反	28.8			5	灰白	
27	35	遺構外	瓦	軒丸瓦	－			1.6	10	灰	三ツ巴紋、珠紋8点
27	36	遺構外	瓦	軒平瓦	－			1.8	5	浅黄橙	菊紋（12弁）3反転均整唐草紋
27	37	遺構外	瓦	軒丸瓦	－			2.2	5	灰黄	瓦当紋不明
27	38	遺構外	瓦	丸瓦	－			1.8	5	にぶい黄橙	凹面小礫付着
27	39	遺構外	瓦	丸瓦	－			1.7	5	灰	凹面布目痕、吊紐圧痕
27	40	遺構外	瓦	丸瓦	－			2.0	5	橙	凹面布目痕、棒状叩き痕
27	41	遺構外	瓦	丸瓦	－			1.9	5	灰	
27	42	遺構外	瓦	丸瓦	－			2.4	5	灰白	凹部布目痕
27	43	遺構外	瓦	丸瓦	－			2.2	5	灰	コビキB
27	44	遺構外	瓦	丸瓦	－			2.2	5	灰	釘穴有
27	45	遺構外	瓦	平瓦	－			2.0	5	灰	縦横方向板ナデ
27	46	遺構外	瓦	輪違瓦	－		5.1	2.0	50	灰	
27	47	遺構外	瓦	桟瓦	－		27.1	1.8	40	灰	明治期とみられる水路より出土
27	48	遺構外	瓦	桟瓦	－		28.0	1.5	50	灰	明治期とみられる水路より出土
28	49	遺構外	瓦	桟瓦	－		23.0	1.9	20	灰白	明治期とみられる水路より出土
28	50	遺構外	陶器	舟徳利	反	7.0			5	浅黄橙	瀬戸美濃産、内外面鉄釉、大窯第3段階
28	51	遺構外	陶器	蓋	反	7.3			30	灰白	器形9.8㎝、外面鉄釉、近代か
28	52	遺構外	陶器	鉢	反			7.0	10	灰	志戸呂産か、高台内側に小礫付着
28	53	遺構外	磁器	染付皿	反			12.0	10	灰白	肥前産か、内面に重ね焼き痕
28	54	遺構外	磁器	染付碗	反	10.6			5	灰白	肥前産か、近代か
28	55	遺構外	土師器	かわらけ	反	11.2	3.0	7.0	50	橙	ロクロ成形
28	56	遺構外	土師器	かわらけ	反	10.7			5	にぶい橙	ロクロ成形
28	57	遺構外	銅銭	天保通宝	－	3.3	5.0	0.3	100		重さ22.0g
28	58	遺構外	銅銭	寛永通宝	－	2.8	2.8	0.1	100		重さ4.4g
28	59	遺構外	銅銭	寛永通宝	－	2.3	2.3	0.1	80		重さ0.8g、錆化・剥離著しい
28	60	遺構外	鉄製品	不明	－		(4.8)	0.3			先端部針状　近代か
28	61	遺構外	石製品	不明	－	0.85	(5.6)			黄灰	棒状　断面方形　近代か
28	62	遺構外	石製品	不明	－	0.6	(3.0)			黄灰	棒状　断面多角形　先端尖る　近代か
28	63	遺構外	石製品	不明	－	0.6	(1.7)			黄灰	棒状　断面多角形　先端尖る　近代か
28	64	遺構外	ｶﾞﾗｽ製品	瓶		2.4	22.7	5.9	100	透明	側面に「MEIDI-YA」
28	65	遺構外	ｶﾞﾗｽ製品	瓶				5.5	95	透明（淡緑）	側面に「登録商標」「玄蕃商会謹製」、底面に三角形印
28	66	遺構外	ｶﾞﾗｽ製品	瓶	－				5	透明（淡緑）	側面に「登」と○の中に二のマーク
28	67	遺構外	ｶﾞﾗｽ製品	瓶	－				5	透明（淡緑）	側面に「商標」「日本」
28	68	遺構外	陶器	文鎮	－	6.6	6.6	1.9	40	灰	上面に「賞」と月桂冠紋、下面に「あいち」「新愛」

※括弧内の数値は現存値

第３章　34 次調査の成果

１　概要

調査区の位置　34 次調査区は、浜松城南端にある大手門の西側に位置する。調査区の大部分を堀（SD01）が占める。

基本土層　本調査における基本土層は、上層から順に表土、土塁構築以前の遺物包含層、基盤層に大別される(Fig.30)。表土は、1 層が該当し、現代の造成土と考えられる。基盤層は黄橙色砂礫(21 層)、緑灰色砂（22 層）の順に堆積し、緑灰色砂以下の層は掘削していないため不明である。この黄褐色砂礫は、本調査区から北西に約 270 m離れた 12 次調査の基盤層であるにぶい黄褐色シルト質細砂に相当すると考えられる。

検出遺構　本調査では基盤層(21 層)上面で遺構を検出した(Fig.29)。堀１条、柱列跡２列、溝１条、土坑１基、ピット 18 基である。SD01 北側の平坦部は近代以降の攪乱を受けている箇所が多いものの、D ８～E ８グリッドで部分的に遺構が確認できた。一方 SD01 南側の平坦部は北側に比べて検出範囲が狭いこともあり、遺構は確認できなかった。検出できた遺構の内、堀（SD01)、柱列跡（SA01・02)、溝（SD02)、土坑（SK02）について、次項で述べる。

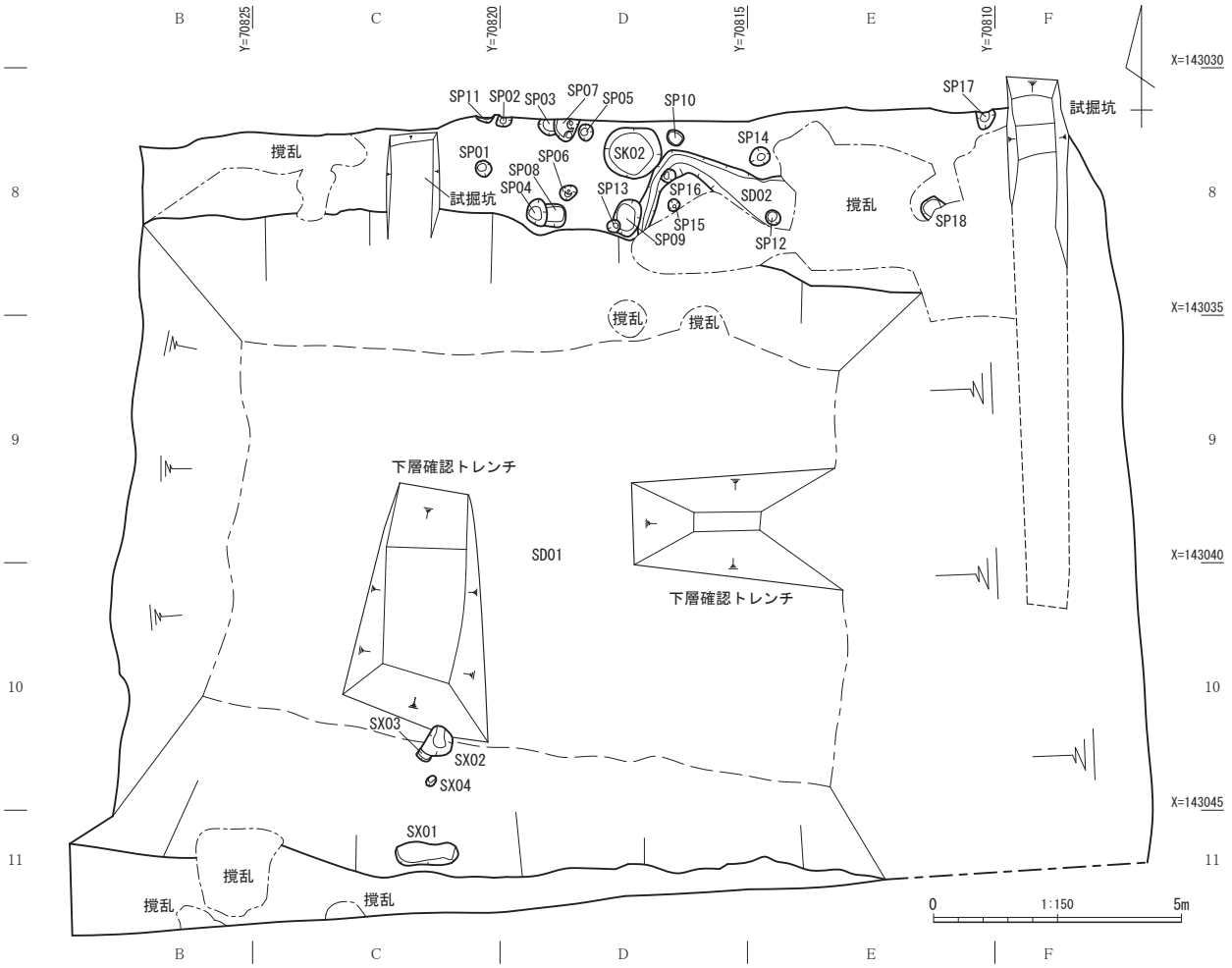


Fig.29　34 次調査区全体平面図

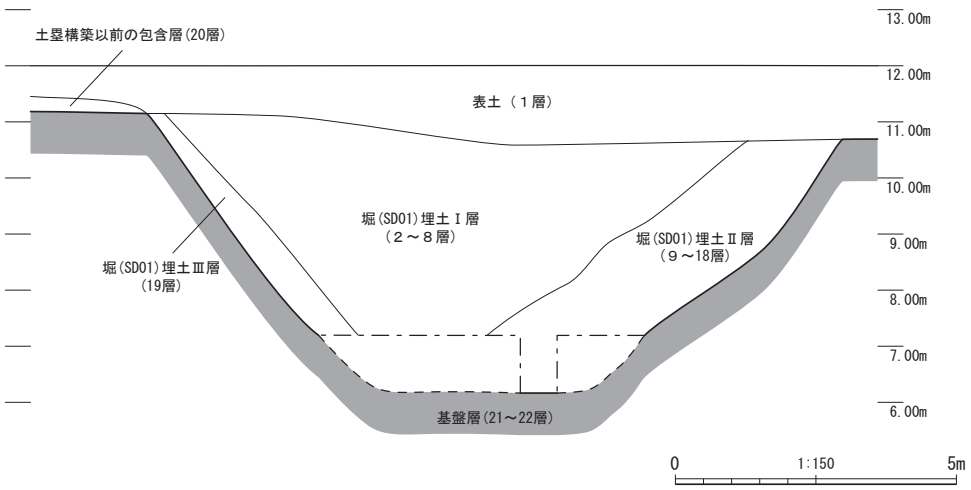


Fig.30　34 次調査区土層断面模式図

２　検出遺構と出土遺物

（１）堀

SD01（Fig.31・32・33）　平面形状は直線状を呈する。東西方向に流れ、西側と東側は調査区外に延びる。断面形状は底面まで全体的に掘り下げていないため不明であるが、現状での掘方形状から逆台形を呈すると考えられる。規模は検出長で 16.4 m、最大幅 13.4 m、堀底はトレンチ掘削で部分的に確認でき、深さは最大で 5.6 mを測る。主軸方向は N-87°-W である。掘方の傾斜は、北側及び南側ともに約 50°で開削されている。

埋土は、大別するとⅠ～Ⅲ層（２～ 19 層）に分けられる。

Ⅰ層は、２～８層が該当する。これらの層は黄褐色系の粘質土もしくはシルトであり、２層は褐色、３層は灰褐色の埋土で、４～８層は黄褐色系の埋土である。基盤層の黄褐色砂礫に似ている。土層の堆積状況は北から南への斜堆積であった。出土した遺物は近世瓦や陶器など僅かである。

Ⅱ層は、９～ 18 層が該当する。南側掘方に沿うように堆積している。これらの層は黒みの強い粘質土であり、基盤層ブロックや炭化物・焼土を含み、多数の近世瓦や陶磁器などが出土した。土層の堆積状況は南から北への斜堆積である。この堆積状況は検出範囲内でおおむね同じ様相であるが、西端付近では、12 層がほぼ平坦に堆積した所に９～ 11 層が堆積していた。これらの層は、12 層と埋土の色調や含有物にあまり違いがないものの、礫や基盤層ブロックが比較的多い。

Ⅲ層は、19 層が該当する。北側掘方に沿うように堆積していた。灰黄褐色粘質土である。Ⅰ層と同じく北から南への斜堆積であるが、埋土の色調や基盤層ブロック土を含まない点が異なる。遺物は近世瓦や近世陶器が少量出土した。

本遺構は、江戸時代の絵図との位置関係から大手門西側の南外堀と考えられる。出土遺物から、19 世紀中頃以降に廃絶されたと考えられる。Ⅰ層は、本遺構掘削時の排土で構築された土塁を廃城後に崩して埋め立てた層と考えられる。Ⅱ層は、城外である遺構南側から流入した層と考えられる。Ⅲ層は、遺構北側の土塁構築土などが雨水などで流入して生じた自然堆積層と考えられる。

また南側法面で、遺構４基（SX01 ～ 04）を確認した。それぞれの平面形は SX02 が不定形である以外は楕円形を呈し、長さが約 0.25 m～ 1.2 m、深さ約 0.15 m～ 0.4 mと規模にはばらつきがある。埋土はⅡ層に近い黒みの強い粘質土であった。遺物は出土していない。法面にこれらを設ける

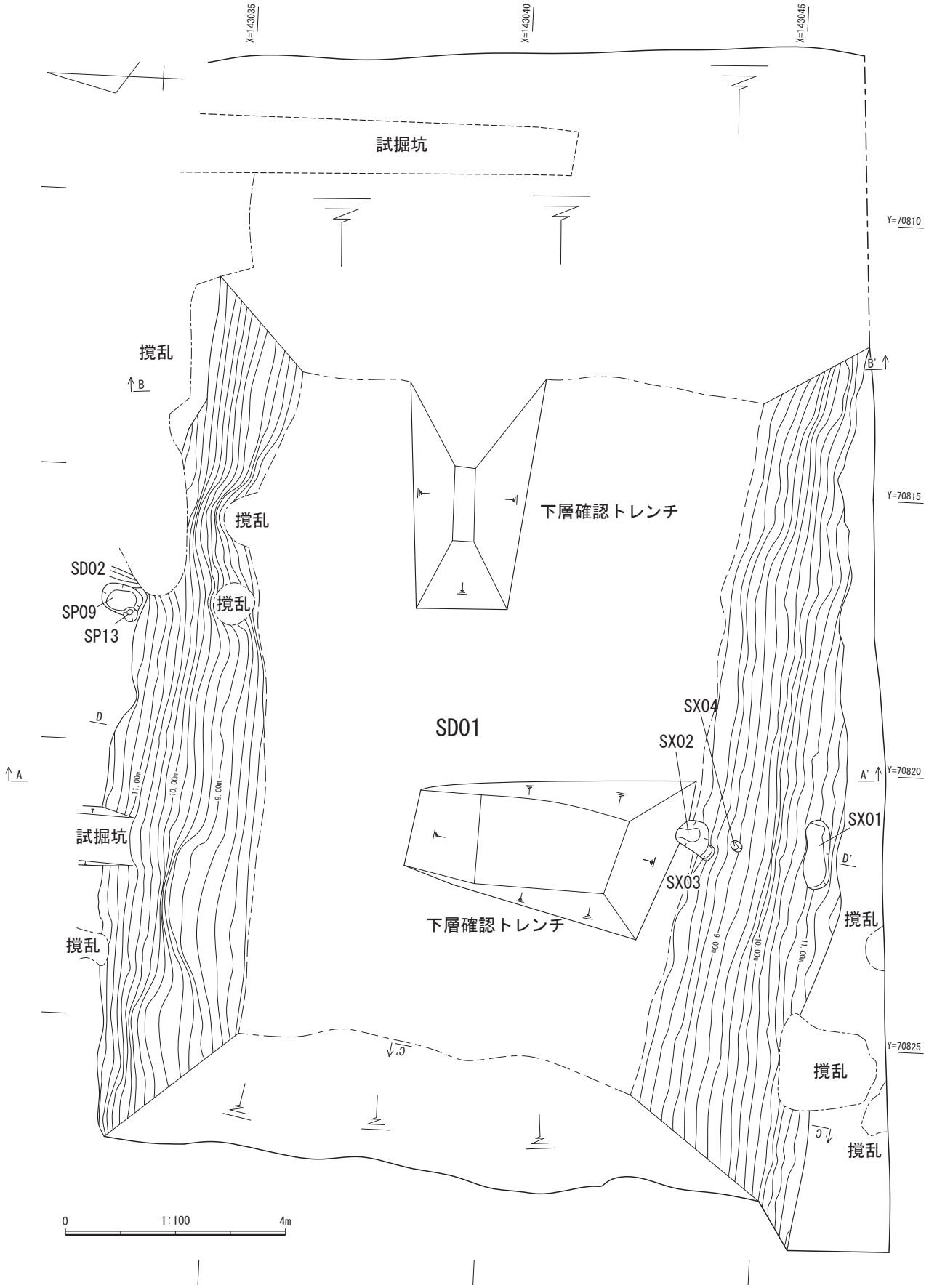


Fig. 31　SD01 実測図

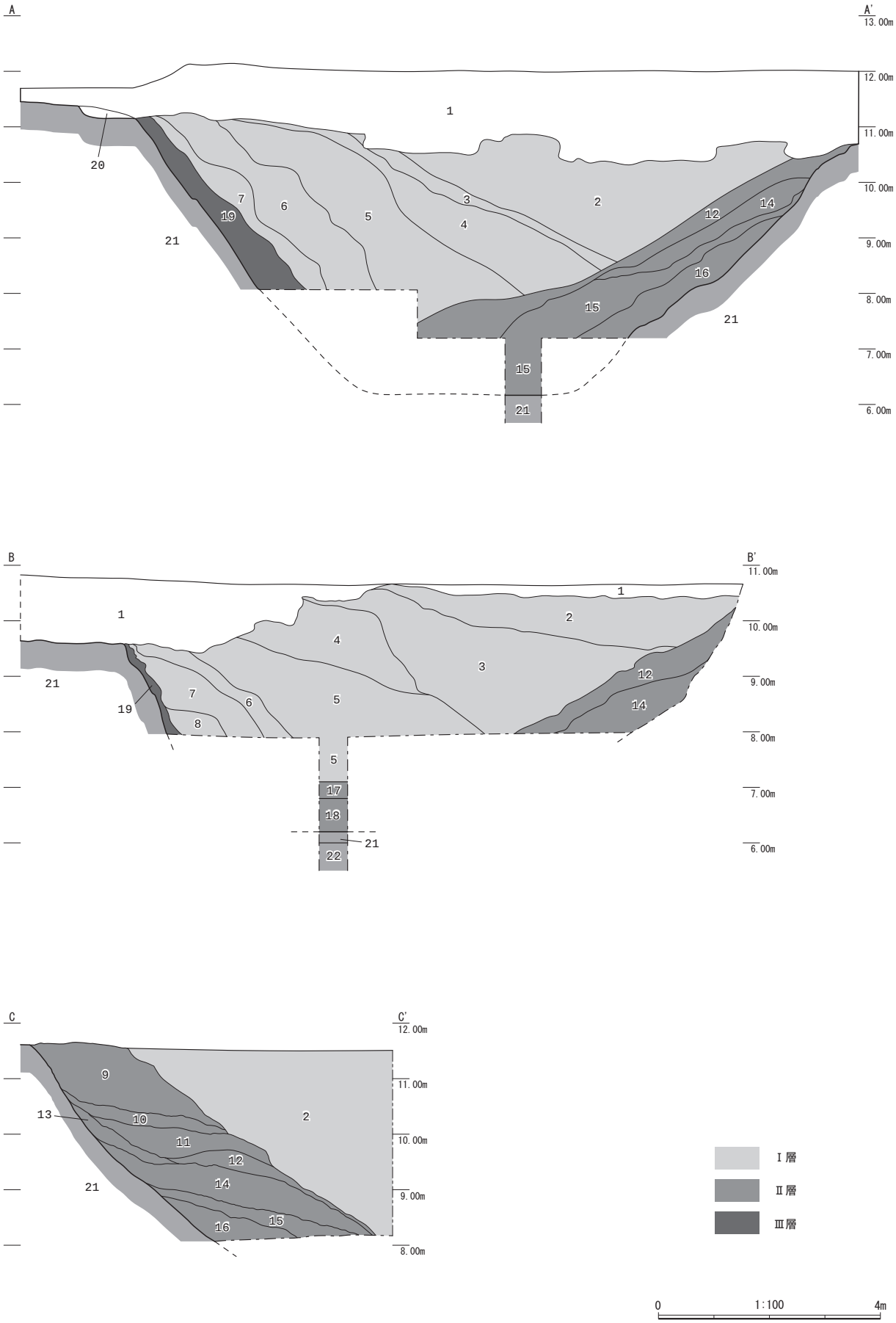


Fig.32　SD01 土層断面図

	1	表土				砕石・コンクリート・レンガなど含む。
堀(SD01)埋土 Ⅰ層:近代の埋立土	2	7.5YR4/4	褐色粘質土	しまり弱い	粘性強い	φ1～15cmの礫中量含む。基盤層ブロック多量に含む。
	3	7.5YR4/2	灰褐色粘質土	しまり弱い	粘性あり	基盤層ブロック含む。
	4	10YR5/6	黄褐色粘質土	しまり弱い	粘性強い	基盤層ブロック多量に含む。
	5	10YR5/4	にぶい黄褐色粘質土	しまりややあり	粘性あり	φ2～8cmの円礫中量含む。φ0.5～1cmの炭化物少量含む。 10YR4/3にぶい黄褐色粘質土多く堆積する。
	6	10YR5/6	黄褐色粘質土	しまり弱い	粘性強い	基盤層ブロック多量に含む。
	7	10YR6/6	明黄褐色シルト	しまりややあり	粘性あり	
	8	10YR6/6	明黄褐色シルト	しまりややあり	粘性あり	一部10YR5/2灰黄褐色粘質土を含む。
堀(SD01)南側埋土 Ⅱ層:流入土	9	10YR3/2	黒褐色粘質土	しまりあり	粘性あり	φ1～10cmの礫多量に含む。φ0.5～1cmの焼土多量に含む。 φ0.5～1cmの炭化物多量に含む。基盤層ブロック多量に含む。 10YR4/1褐灰色粘質土層状に堆積する。
	10	10YR4/2	灰黄褐色粘質土	しまりややあり	粘性あり	φ1～10cmの礫中量含む。φ0.5～1cmの焼土多量に含む。 φ0.5～1cmの炭化物多量に含む。
	11	7.5YR4/2	灰褐色粘質土	しまりややあり	粘性強い	φ5～10cmの礫少量含む。φ1～2cmの基盤層ブロック少量含む。
	12	10YR3/2	黒褐色粘質土	しまりややあり	粘性あり	φ2～10cmの礫含む。φ0.5～2cmの炭化物中量含む。φ1～5mmの焼土少量含む。
	13	5YR4/4	にぶい赤褐色粘質土	しまり弱い	粘性強い	φ0.5～3cmの炭化物多量に含む。φ1～3cmの礫中量含む。
	14	7.5YR5/2	灰褐色粘質土	しまりあり	粘性あり	φ1～2cmの基盤層ブロック少量含む。φ0.5～2cmの炭化物中量含む。 φ1～5mmの焼土少量含む。φ1～2cmの礫少量含む。
	15	10YR5/1	褐灰色粘質土	しまり弱い	粘性あり	φ1～5cmの礫少量含む。一部グライ化した粘土ブロック含む。 φ1～2cmの基盤層ブロック少量含む。
	16	10YR5/2	灰黄褐色粘質土	しまり弱い	粘性あり	φ0.5～1cmの炭化物少量含む。φ2～15cmの礫少量含む。 φ1～2cmの基盤層ブロック少量含む。
	17	10YR3/2	黒褐色粘質土	しまりややあり	粘性あり	φ2～10cmの礫含む。φ0.5～2cmの炭化物中量含む。φ1～5mmの焼土少量含む。
堀(SD01)北側埋土 Ⅲ層:流入土	18	10YR5/1	褐灰色粘質土	しまり弱い	粘性あり	φ1～5cmの礫少量含む。一部グライ化した粘土ブロック含む。 φ1～2cmの基盤層ブロック少量含む。
土塁構築前の包含層	19	10YR5/2	灰黄褐色粘質土	しまり弱い	粘性あり	φ5～10cmの礫少量含む。φ1～5mmの炭化物中量含む。鉄分中量含む。
	20	10YR4/3	にぶい黄褐色シルト	しまりあり	粘性あり	φ1～10mmの炭化物中量含む。φ1～5cmの礫少量含む。(SD02埋土)
基盤層	21	10YR7/8	黄橙色砂礫	よくしまる	粘性なし	φ1～10cmの円礫多量に含む。
	22	10GY6/1	緑灰色砂		粘性なし	

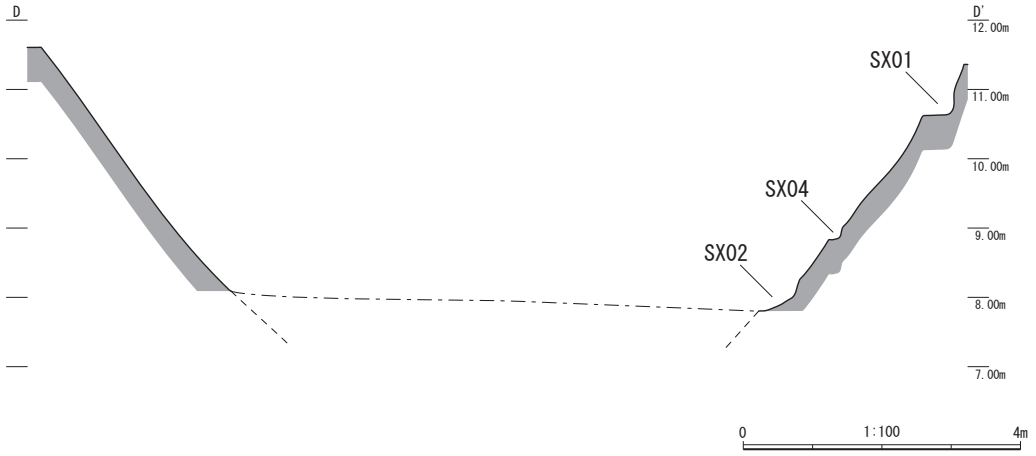


Fig.33　SD01・SX01・SX02・SX04 エレベーション図

目的として昇降施設が考えられるが、それぞれ手を掛けたり足を置くために均等な配置ではないこと、法尻側の SX02 ～ 04 から法肩側の SX01 までやや距離があり昇降するのが困難と考えられることから、その性格は不明である。

SD01 出土遺物（Fig.34 ～ 52）　151 点を図示した。１～ 11 は家紋を瓦当紋様に用いた軒丸瓦である。３は２層、２は５層、４・11 は９層、５・８は 12 層、１・７は 14 層、６・９は 15 層、10 は 16 層から出土した。１～９は繋九目結紋で、本庄松平氏在城期（1702 ～ 1729 年、1749 ～ 1758 年）の所産とみられ、軒丸瓦Ⅴ類に分類される（鈴木 2019）。いずれも離れ砂を使用したためか、瓦当内区は滑らかではない。１・２・５・８・９の家紋紋様は薄く角張り、３・４・６・７の家紋紋様は厚く丸みを帯びている。

10・11 は桔梗紋で、太田氏在城期（1644 ～ 1678 年）の所産とみられる。10 は桔梗の花弁が立体的に表現され、軒丸瓦Ⅲａ類に分類される（鈴木 2019）。11 は桔梗の花弁が隆帯で表現され、軒丸瓦Ⅲｂ類に分類される（鈴木 2019）。いずれも離れ砂が使用されている。

12 ～ 27 は連珠三ツ巴紋の軒丸瓦である。15・25 は 11 層、17・19・22・23・26 は 12 層、24 は 13 層、12・16・18・21 は 14 層、14・27 は 15 層、13・20 は 19 層から出土した。12 ～ 16 は連珠と巴紋の

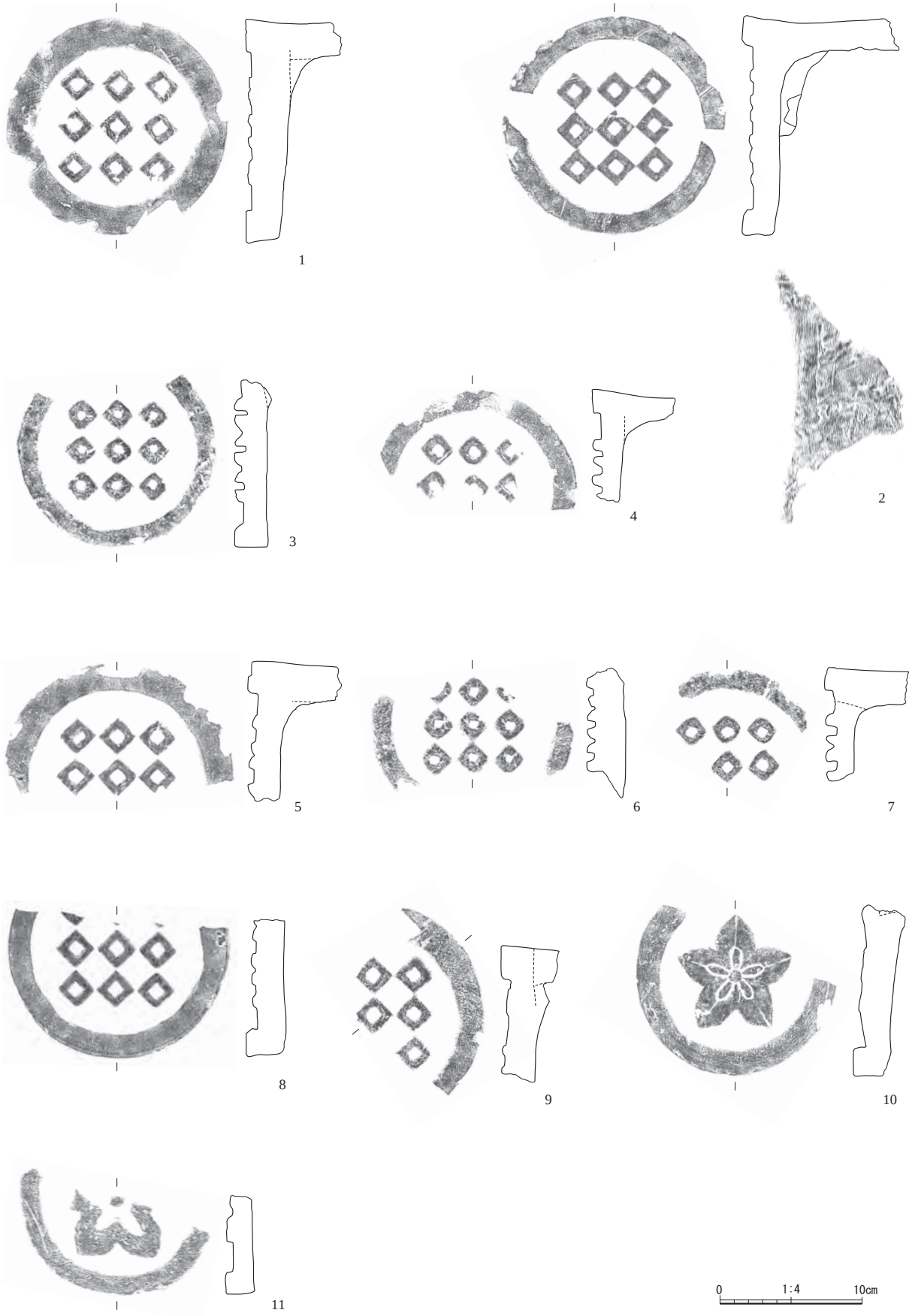


Fig.34　SD01 出土遺物実測図（1）

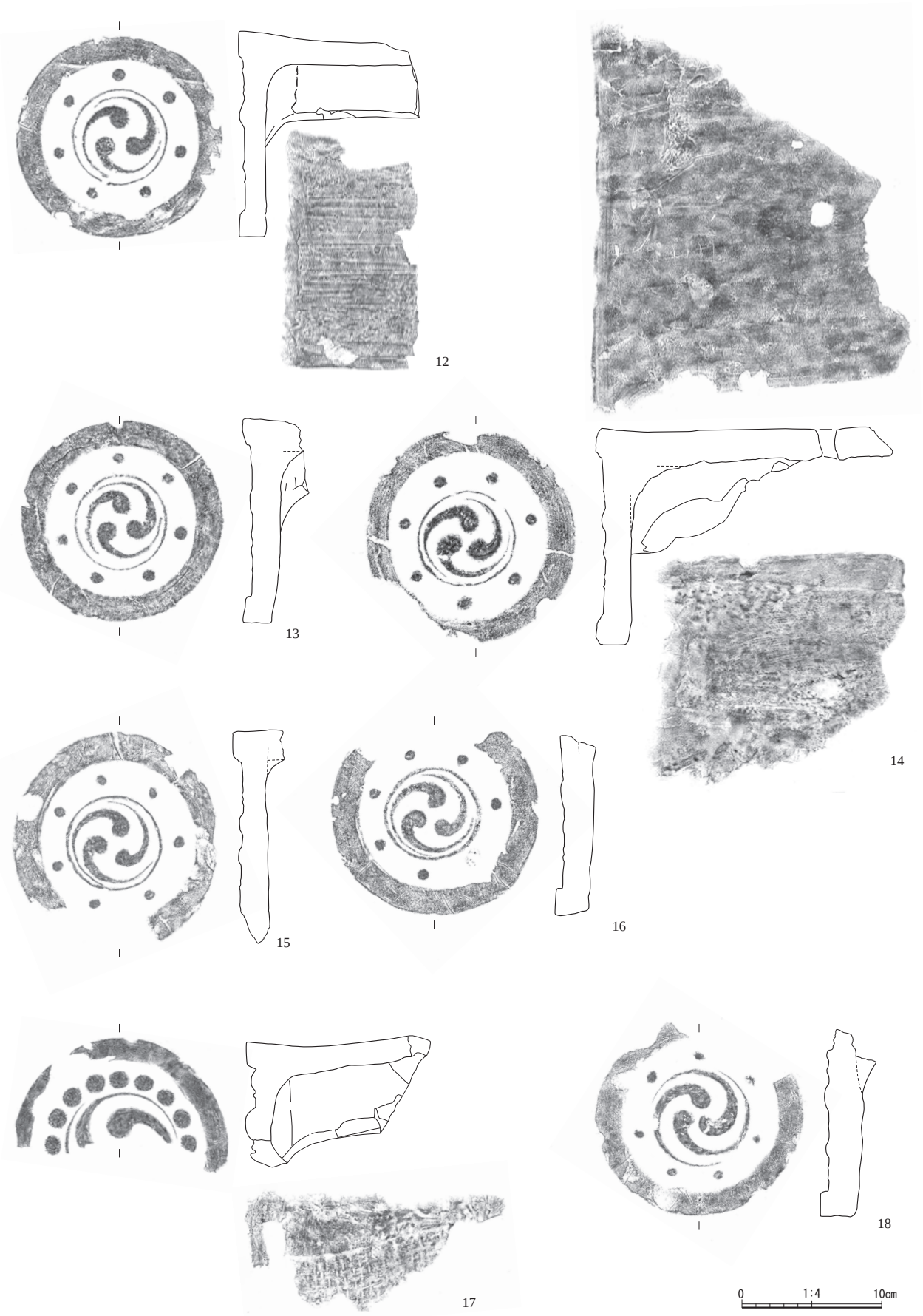


Fig.35　SD01 出土遺物実測図（２）

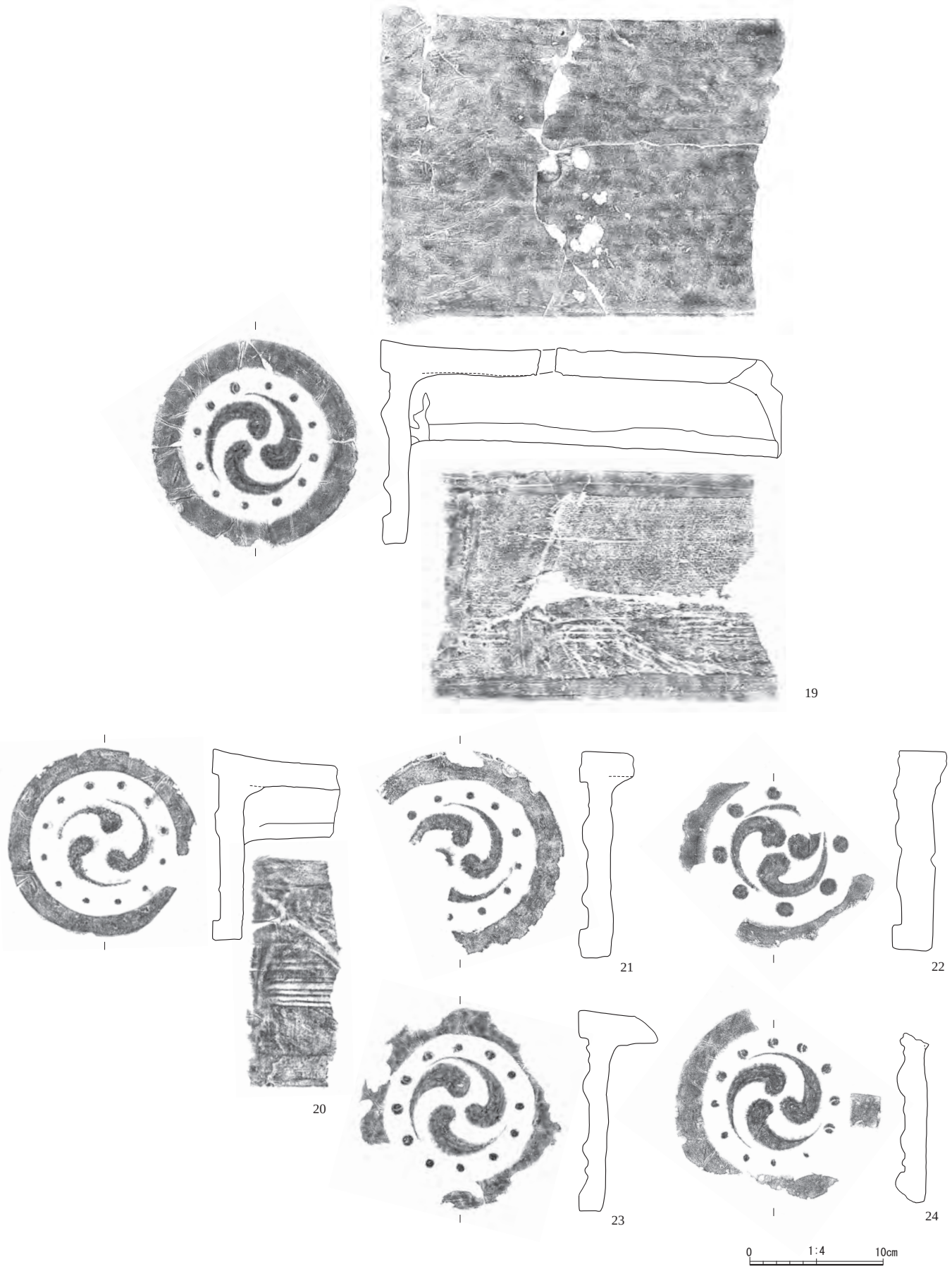


Fig.36　SD01 出土遺物実測図（3）

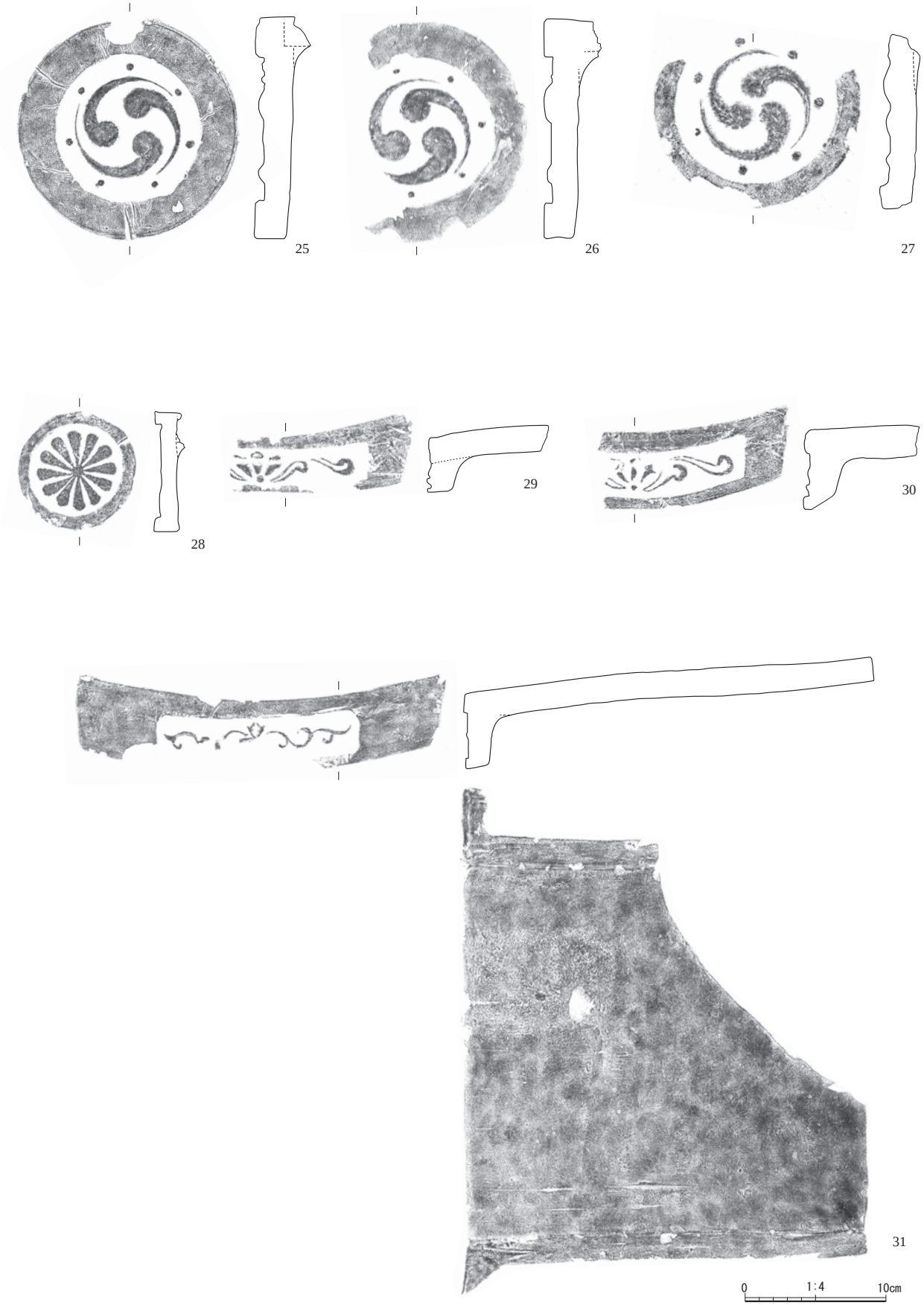


Fig.37　SD01 出土遺物実測図（４）

間に圏線がめぐるもの、17 ～ 27 は連珠と巴紋の間に圏線がめぐらないものである。12 は珠文を７個数え、いずれも扁平である。凹面には棒状叩痕とナデ調整がみられるものの、布目痕をわずかに残す。13 は珠文を７個数え、扁平である。巴は中肉で、尾は細長く、圏線にも次の巴にも接しない。14 は珠文を７個数える。釘穴がみられる。凹面には布目痕や吊紐痕、コビキ痕がみられる。コビキ痕はごくわずかで、判別するに至らない。15･16 は珠文を７個数え、巴は全体的に肉が薄く、尾は長い。巴の尾は圏線に接する。17 は珠文が９個残るが、全体では 16 個と推測される。向かって右側に瓦当がゆがんでいる。凹面は布目痕と一部ユビオサエが観察できる。18 は珠文を７個数える。19 は珠文を 12 個数える。釘穴がみられる。凹面には布目痕がみられる。20 は珠文がやや小振りで 12 個を数える。凸面はミガキ調整がみられ、凹面には布目痕と一部櫛目がみられる。21 は瓦当が欠け、珠文は９個残るが、全体では 12 個と考えられる。22 は瓦当が欠け、珠文は大振りで７個残るが、全体では８個と考えられる。23 は珠文を 12 個数える。24 は珠文を 12 個数え、笵傷のためか、ほぼすべての珠文は半球状ではない。25 は珠文が小振りで７個を数え、周縁が幅広い。26 は珠文が小振りで５個残るが、全体で７個と考えられる。周縁が幅広く、25 と類似している。27 は珠文を７個数える。

28 は 14 層から出土した小型の菊丸瓦である。点珠に 12 弁を配す菊紋で、点珠と花弁は接している。

29 ～ 49 は軒平瓦である。35・41 は９層、34・49 は 11 層、29・33・36・42 は 12 層、31・32・37・40・47 は 14 層、30・38・44・48 は 15 層、39・43・45 は 19 層から出土した。29・30 は三葉紋２反転唐草紋で、唐草の巻が弱く、重線で表現されている。軒平瓦Ｖｂ類に分類される（鈴木 2019）。はなれ砂の影響を受けたのか、瓦当内区は滑らかではない。31 ～ 34 は形状が直線的ではあるが、中心飾りは三葉牡丹と思われる。31・32・34 は片側に４単位の唐草が残り、唐草はすべて接している。33 は両側に４反転唐草紋がみられ、唐草はすべて接している。35 ～ 38 は菊紋唐草紋である。36・37 は瓦当紋様や形状から桟瓦の可能性も考えられる。35 の中心飾りは点珠に８弁を配す菊紋で、片側に３単位の唐草紋がみられる。36 の中心飾りは点珠に 12 弁を配す菊紋で、花弁の先が鋭く、片側に３単位の唐草紋がみられる。37 の中心飾りは点珠に 12 弁を配す菊紋で、片側に４単位の唐草紋がみられる。38 の中心飾りは点珠に 16 弁を配す菊紋で、片側に３単位の唐草紋が残る。39 ～ 44 は巴紋唐草紋である。39・42 は三ツ巴紋２反転唐草紋である。39 は 43 と類似しているが、43 で子葉が確認できている部分が欠けているため、子葉があるかは不明である。40 は三ツ巴紋子葉付２反転唐草紋で、子葉が３枚みられる。41・44 の中心飾りは三ツ巴紋で、両側に２単位の唐草と子葉が３枚残る。43 は三ツ巴紋子葉付２反転唐草紋で、子葉が１枚みられる。45 ～ 48 は五葉紋２反転唐草紋で、中心飾りは点珠と端部に屈曲を持つ小型の五葉紋である。軒平瓦Ⅵ類に分類される（鈴木 2019）。49 は桔梗紋２反転唐草紋で、中心飾りは凸線で表現された桔梗紋である。離れ砂は用いられていない。

50 ～ 54 は丸瓦である。51 は９層、52・53 は 11 層、50・54 は 14 層から出土した。50 は凸面にはミガキ調整がみられ、凹面には布目痕、縫い取り痕、棒状叩痕がみられる。51 は凸面には横方向にナデ調整後に縦方向にミガキ調整がみられる。凹面には、布目痕と棒状叩痕がみられる。52 の凸面には縦方向のミガキ調整がみられ、凹面には布目痕、棒状叩痕、コビキＢ痕がみられる。一部縄目痕が観察できる。53 の凸面には縦方向のミガキ調整がみられる。凹面には、布目痕や棒状叩痕、縫い取り痕、コビキＢ痕がみられる。54 の凸面には縦方向のミガキ調整がみられる。凹面は布目痕、棒状叩痕がみられる。

Fig.38　SD01 出土遺物実測図（５）

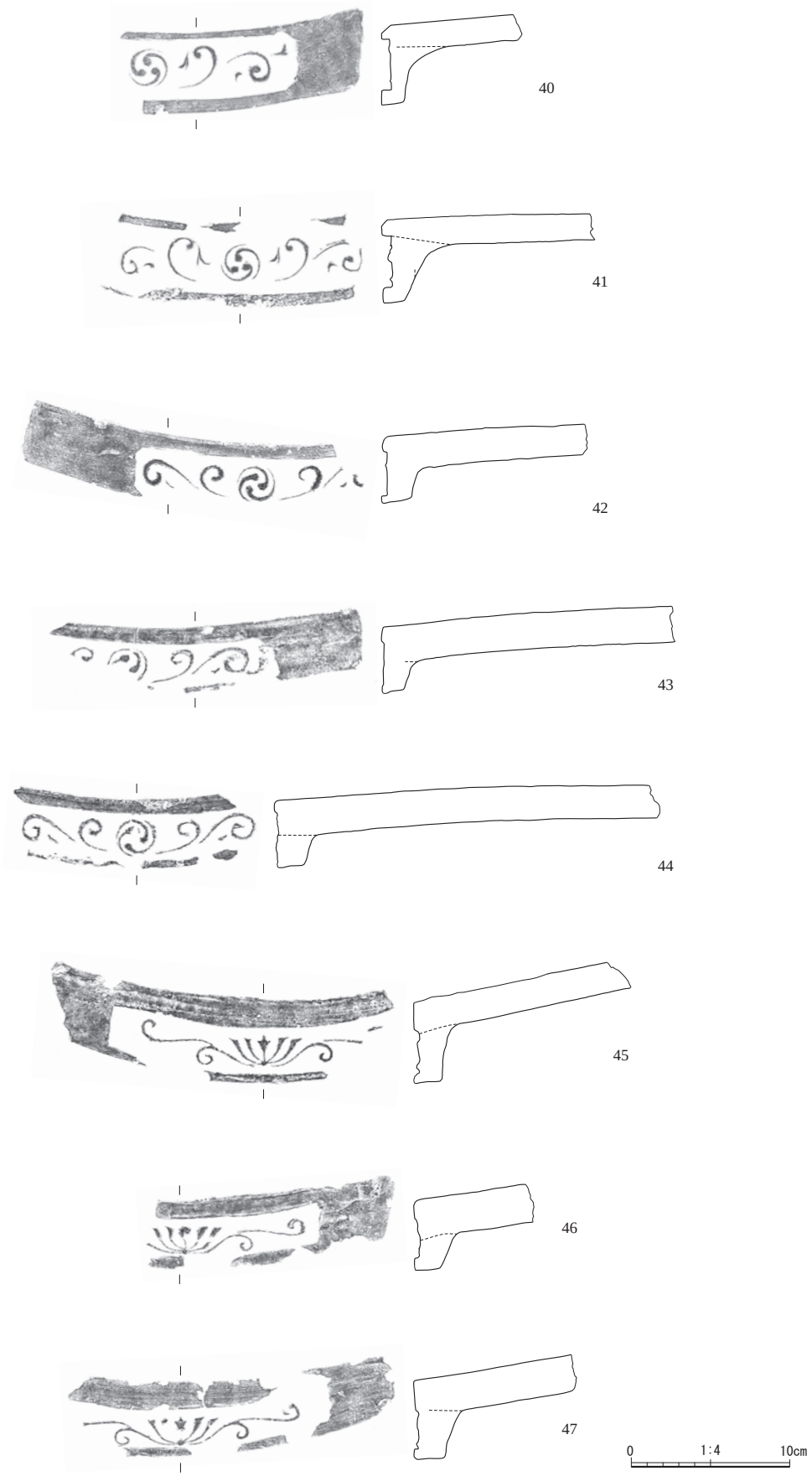


Fig.39　SD01 出土遺物実測図（６）

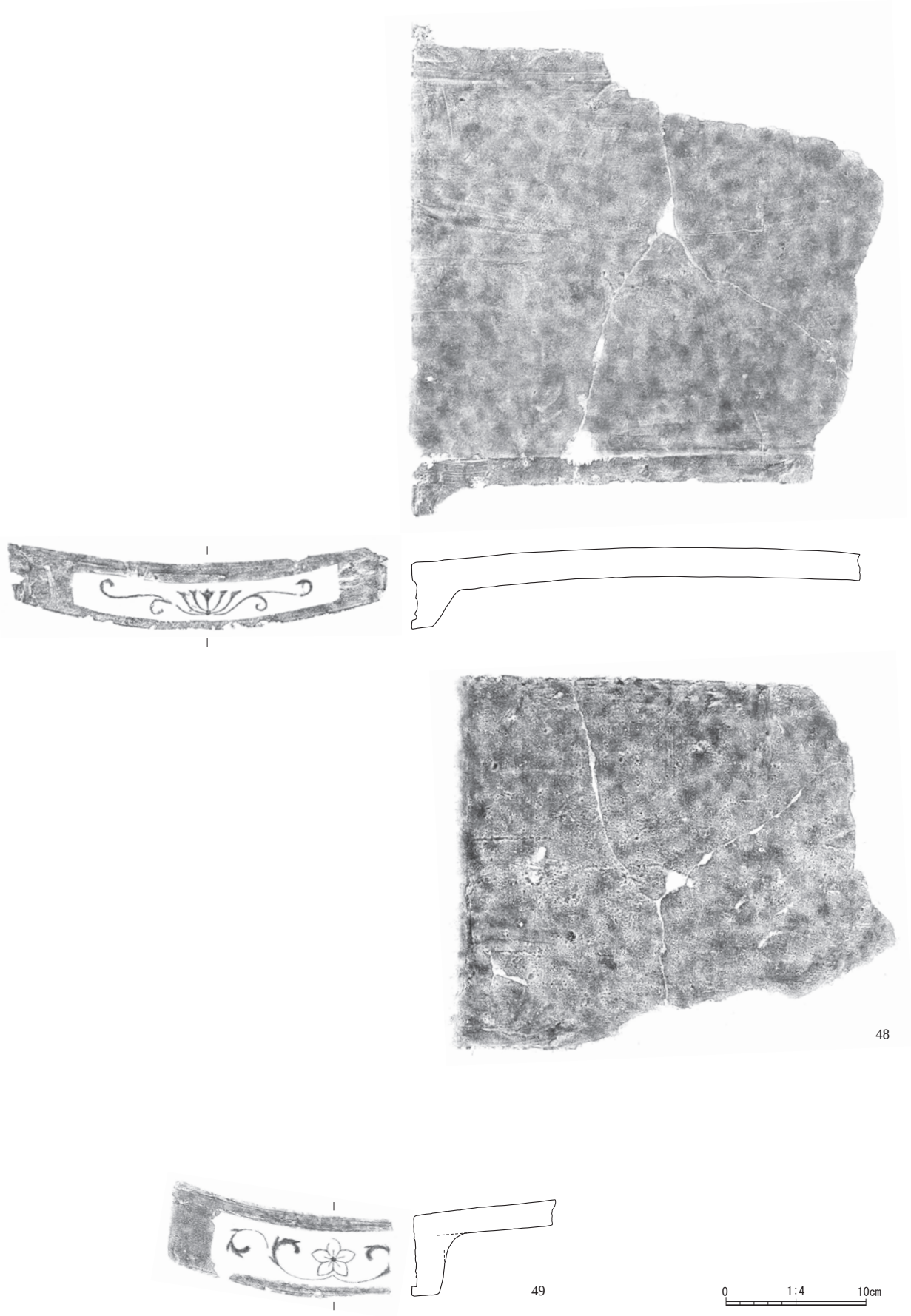


Fig.40　SD01 出土遺物実測図（７）

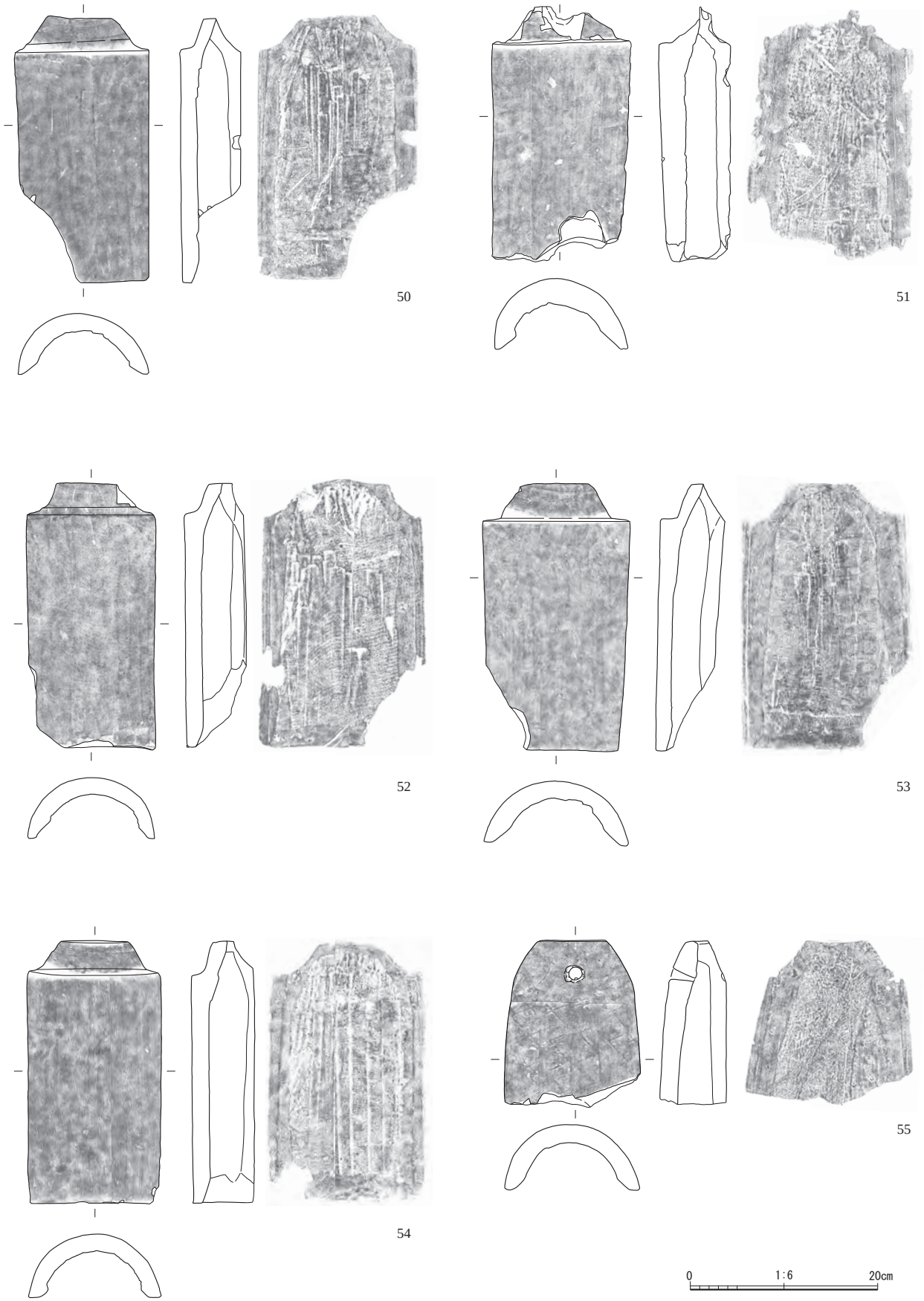


Fig.41　SD01 出土遺物実測図（8）

55 は 14 層から出土した無段式の丸瓦である。釘穴がみられる。凸面は斜格子タタキ後にナデ調整で消されている。凹面には布目痕と抜き紐痕がみられる。

56 ～ 59 は平瓦である。58 は 11 層、57 は 12 層、56・59 は 14 層から出土した。

60・61 は塀瓦である。60 は９層、61 は 12 層から出土した。どちらも角桟がついている。61 は釘穴が２箇所穿たれており、１箇所は鉄分の沈着により埋まっている。

62 は 12 層から出土した隅木先瓦と思われる。紋様はなく、四隅には釘穴が穿たれている。

63 は 14 層から出土した軒用の角瓦である。菊紋子葉付３反転唐草紋で、中心飾りは点珠に 14 弁を配す菊紋である。

64 は 14 層から出土した袖瓦である。

65 ～ 76 は軒桟瓦である。66・67・73 は９層、65・70・74・76 は 11 層、69・71・75 は 12 層、68 は 14 層、72 は 15 層から出土した。65 は子巴の紋様は三ツ巴紋である。垂れの紋様は菊紋３反転唐草紋で、中心飾りは点珠に 12 弁を配す菊紋である。子巴との接合で不明であるが、子葉があった可能性がある。66 は子巴が欠けていて紋様が不明である。垂れの紋様は菊紋子葉付３反転唐草紋で、中心飾りは点珠に 12 弁を配す菊紋である。上下左右の花弁が長く、菊が菱形になっている。67 の中心飾りは点珠に 12 弁を配す菊紋で、片側に３単位の唐草紋と子葉が１枚残る。68 は子巴が欠けていて紋様が不明である。垂れの紋様は菊紋３反転唐草紋で、中心飾りは点珠に 12 弁を配す菊紋である。69 は子巴が欠けていて紋様が不明である。垂れの紋様は菊紋４反転唐草紋で、中心飾りは点珠に 12 弁を配す菊紋である。70 は子巴が欠けているため紋様は不明である。垂れの紋様は菊紋子葉付３反転紋で、中心飾りは点珠に 12 弁を配す菊紋である。花弁は長く、菊が楕円形にみえる。71 は子巴の紋様は三ツ巴紋である。垂れは欠けており、２単位の唐草と子葉が残る。中心飾りは不明である。72 は小巴の紋様は連珠三ツ巴紋で、珠文は７個を数える。垂れの紋様は大割蔦紋を中心飾りとした子葉付３反転唐草紋である。止穴が穿たれている。73 は子巴が欠けていて紋様が不明である。垂れの紋様は大割り蔦紋子葉付３反転唐草紋である。74 は子巴の紋様は三ツ巴紋である。垂れは欠けており、唐草が一部残る。75 は小巴の紋様は三ツ巴紋で、連珠ではなく唐草が周縁をめぐる。垂れの紋様は欠けているため不明である。76 は子巴の紋様は違い鷹の羽紋である。垂れは欠けているため、紋様は不明である。

77 は９層から出土した棟込瓦で、輪違いである。凸面にはナデ調整がみられ、凹面には布目痕と一部ユビオサエ痕がみられる。

78 ～ 81 は鬼瓦である。78・80 は 12 層、81 は 14 層、79 は 15-16 層から出土した。78 は家紋瓦付鬼瓦で、隆帯表現の木瓜桔梗紋をもつ。裏面には龍頭がみられる。79 ～ 81 は鬼瓦の破片である。80・81 は雲形の鬼瓦と思われる。工具によって模様付けされている。

82 ～ 85・87・88 は飾り瓦と思われる。82・83・87・88 は９層、84・85 は 14 層から出土した。83・85 は凸面にはヘラによる刺突後にナデ調整がなされている。鱗のようにみえるが、不揃いで丁寧ではない。84 には３本１組の櫛で模様が施されている。一部だけ４本１組のものがみられる。87 の突出部には貫通していないが、穴がみられる。88 には一部ススが付着している。

86 は 11 層から出土した瓦である。欠損が激しく、どの部位の瓦か不明である。

89 は 14 層から出土した瀬戸産の広東碗形の碗である。白化粧後に釉薬が施される。畳付は露胎である。外面体部には梅が描かれている。登窯第３段階第 11 小期に位置づけられる。

90 は 12 層から出土した美濃産の丸碗である。内外面に鉄釉が施される。高台は露胎である。登窯第２段階第７小期もしくは第３段階第８小期に位置づけられる。

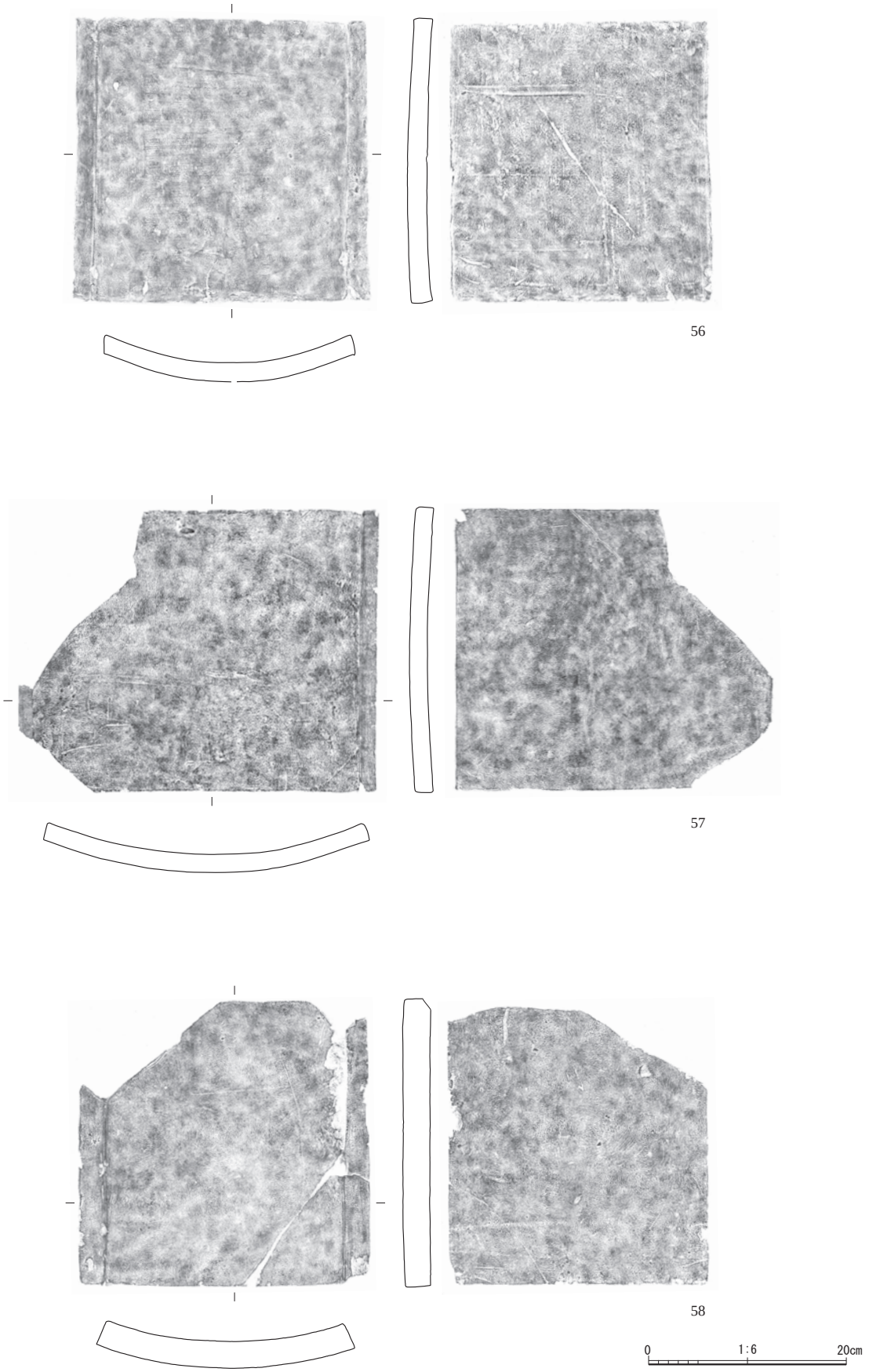


Fig.42　SD01 出土遺物実測図（9）

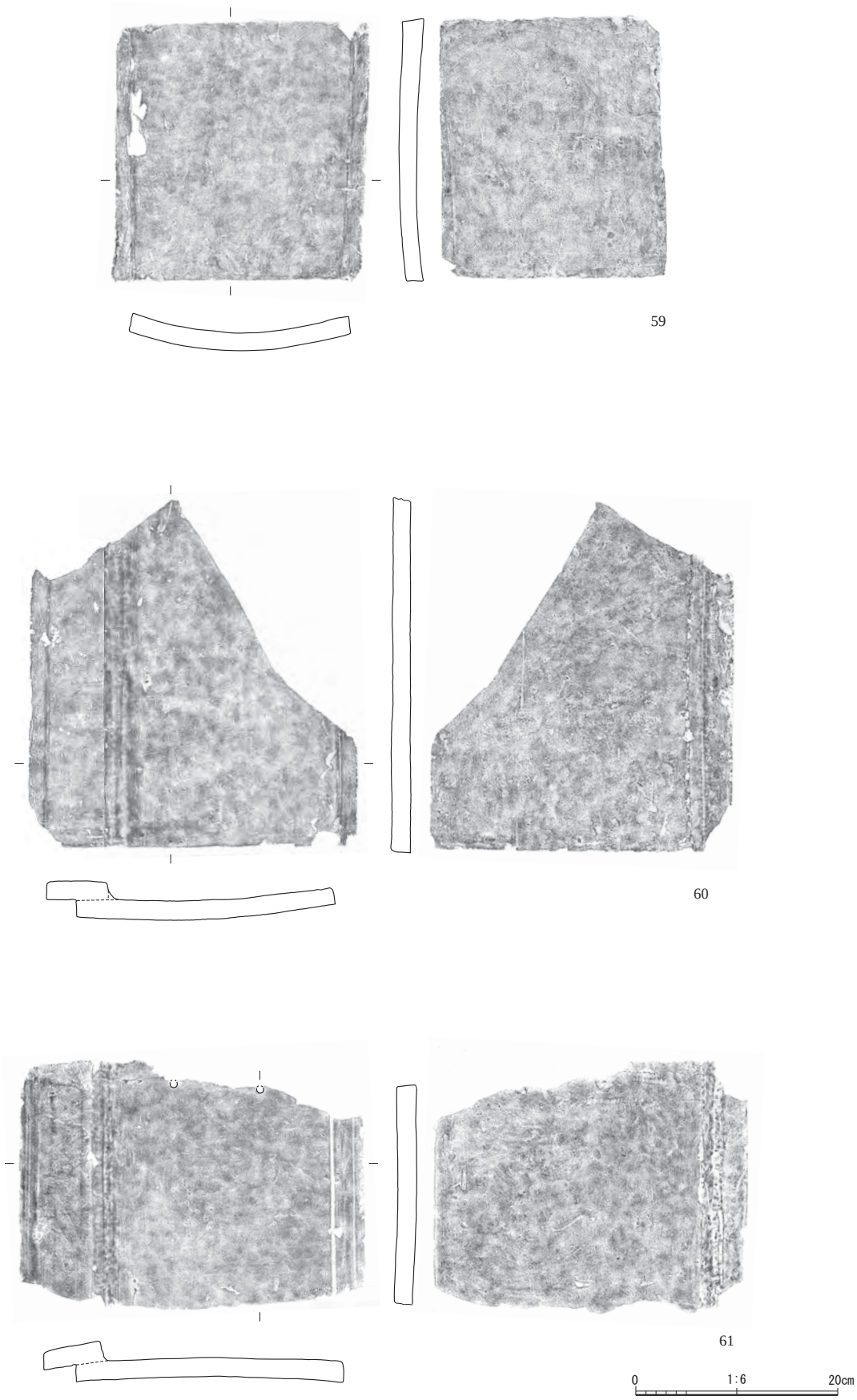


Fig.43　SD01 出土遺物実測図（１０）

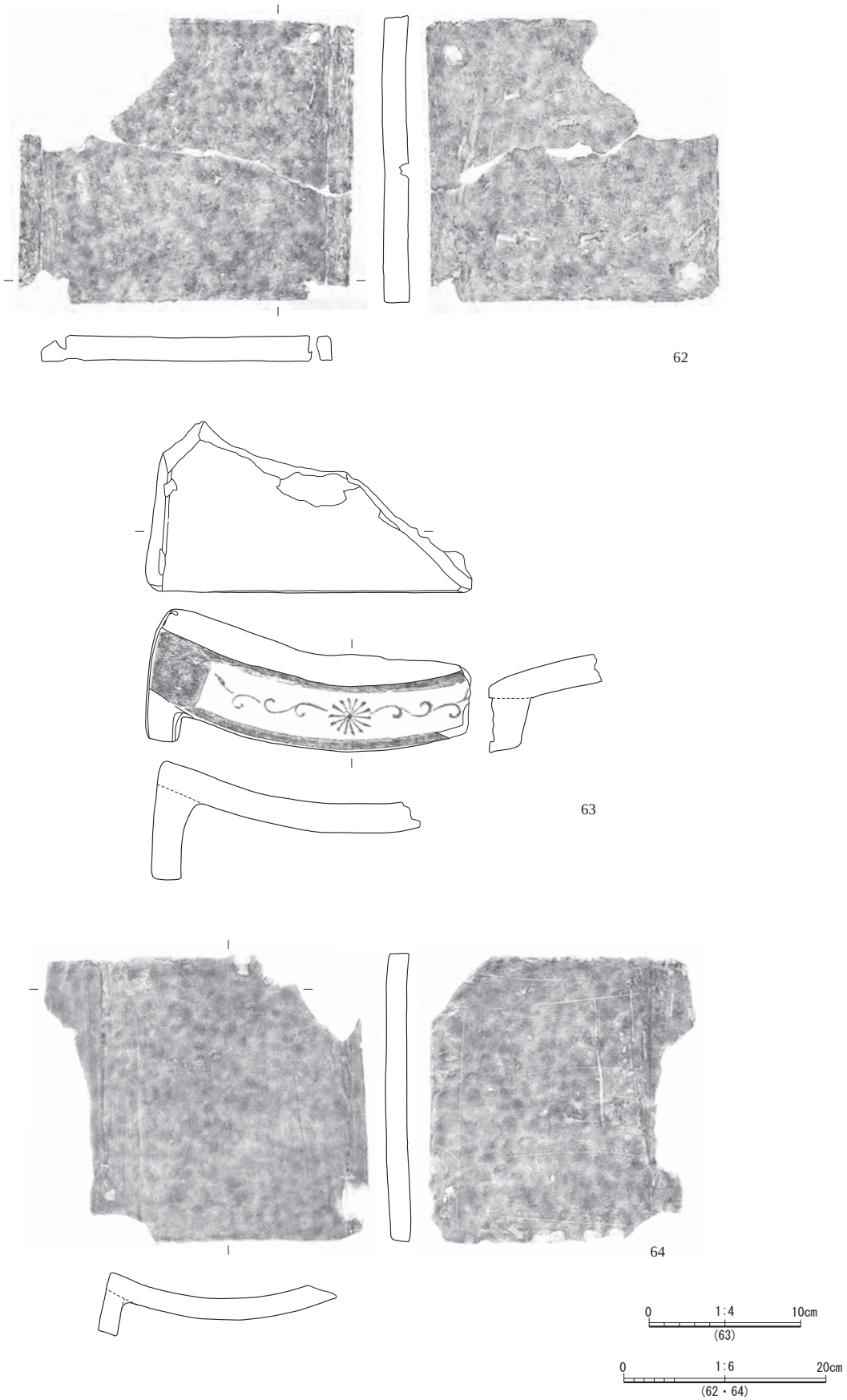


Fig.44　SD01 出土遺物実測図（１１）

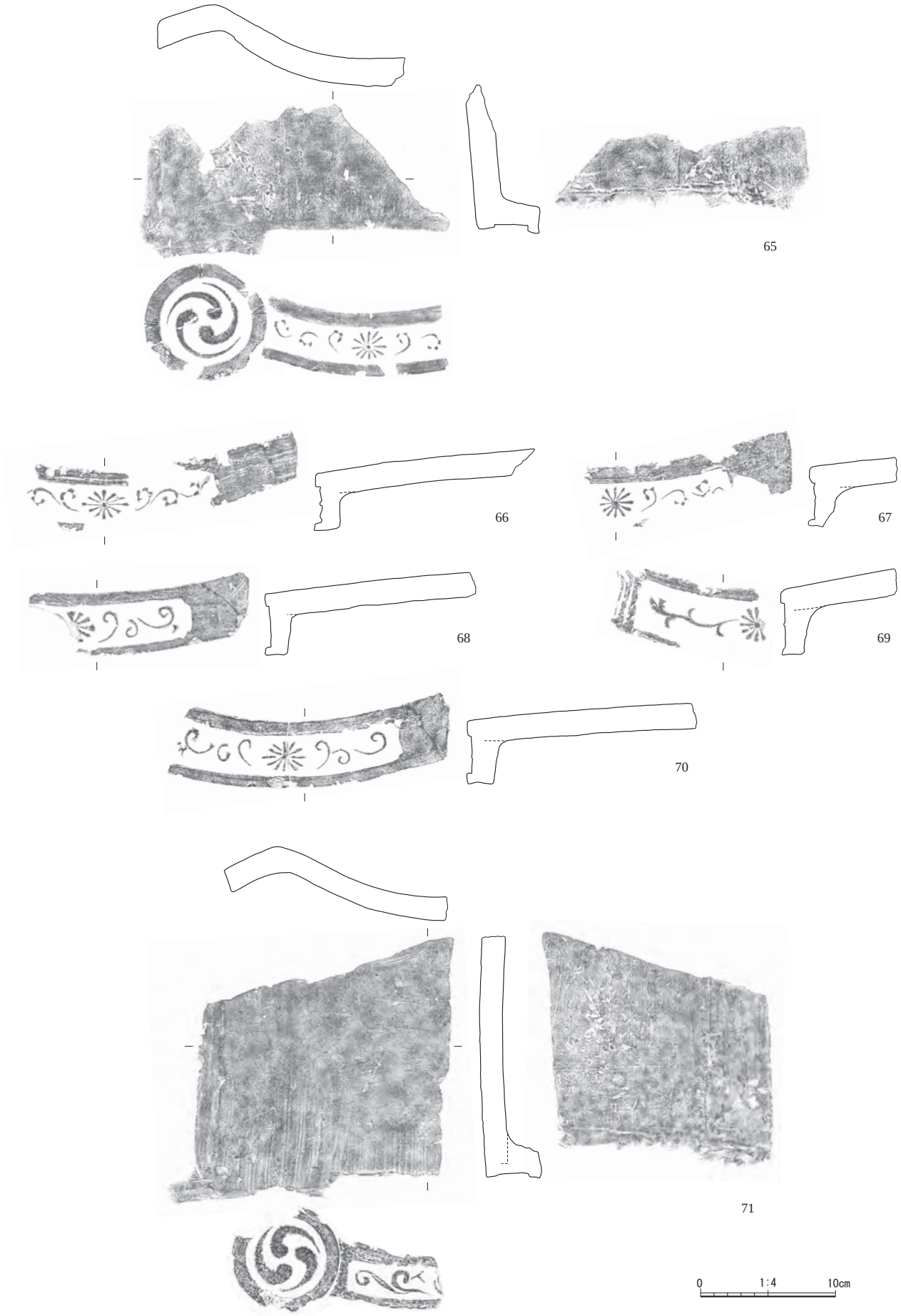


Fig.45　SD01 出土遺物実測図（１２）

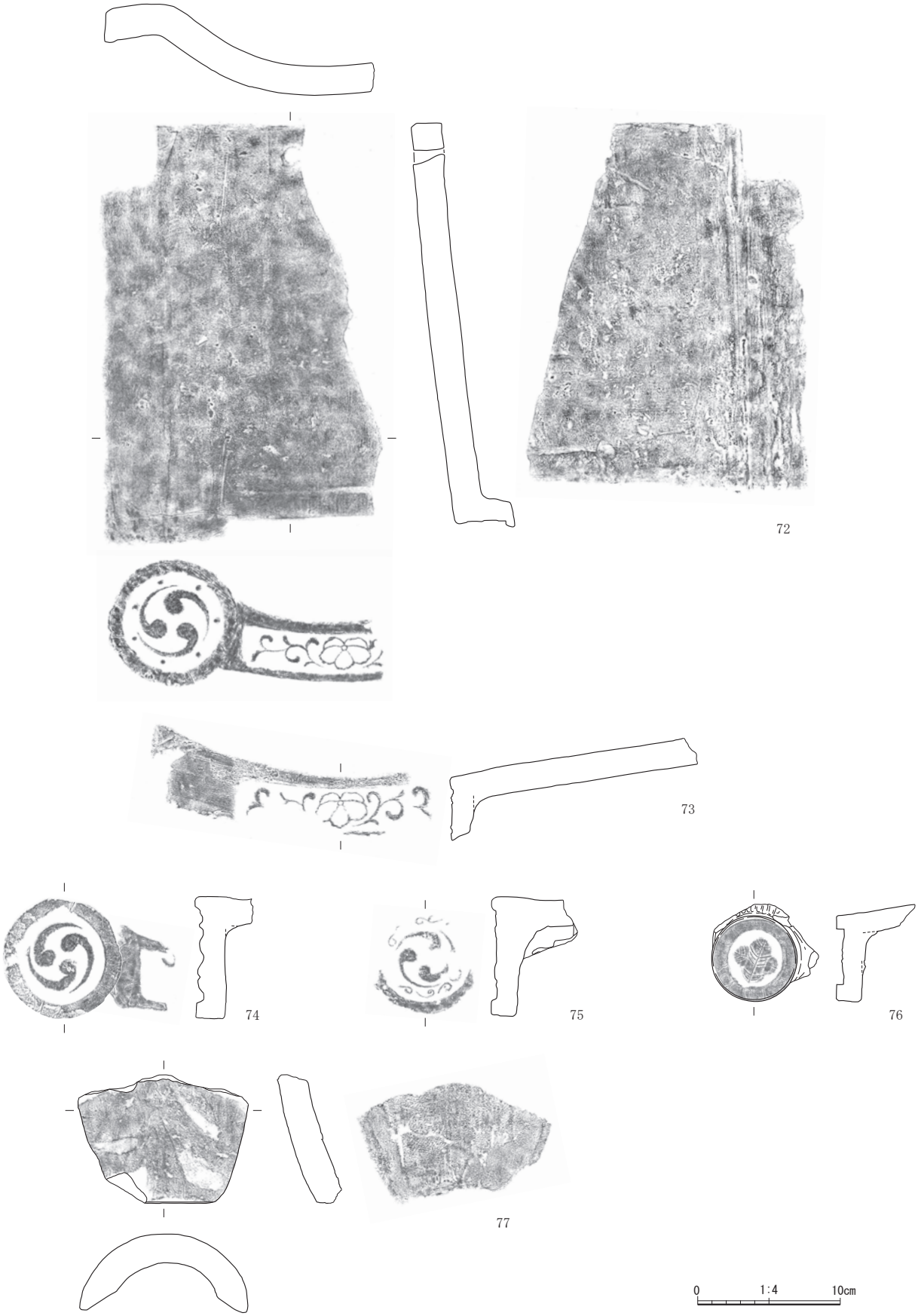


Fig.46　SD01 出土遺物実測図（１３）

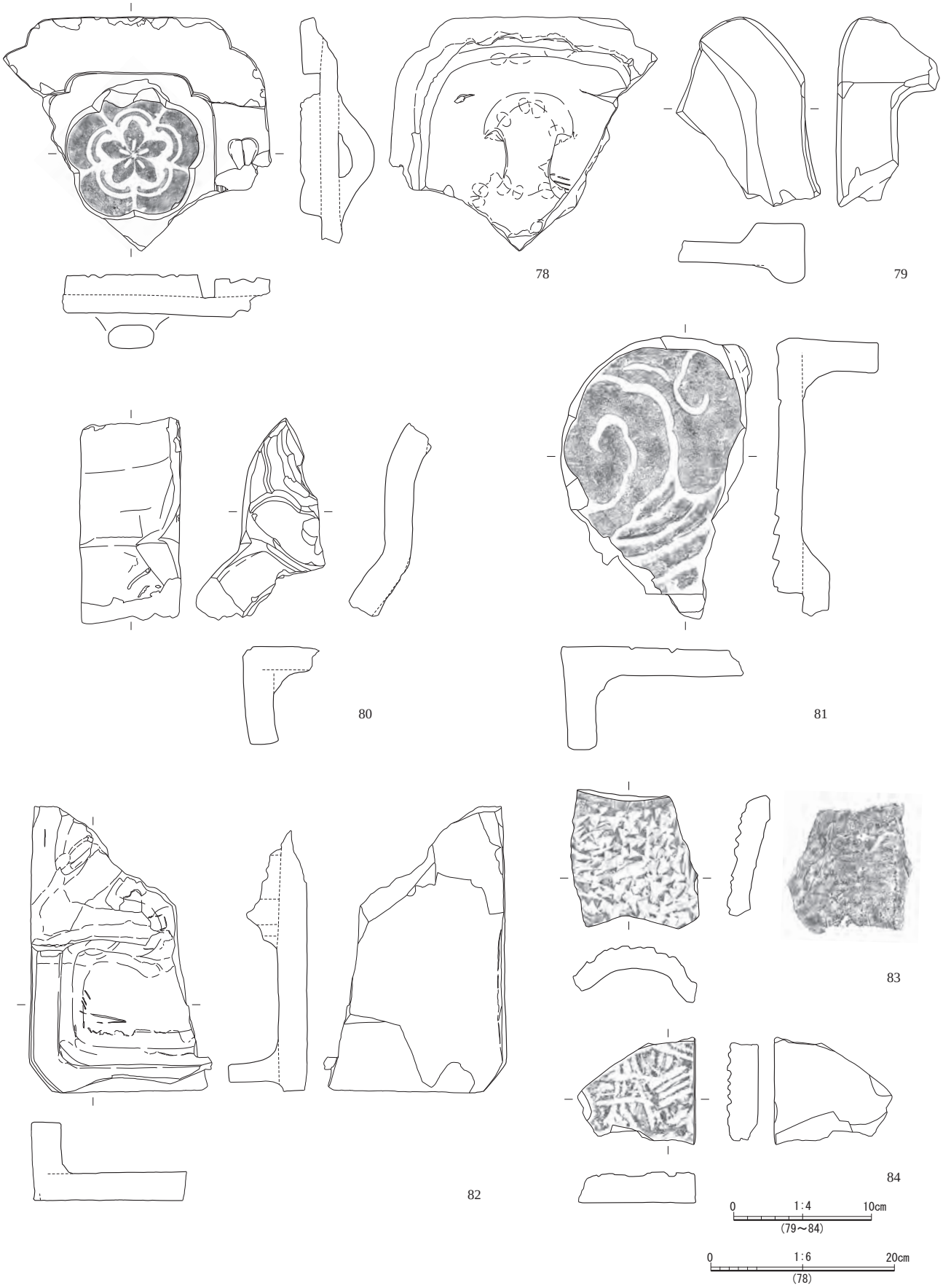


Fig.47　SD01 出土遺物実測図（１４）

91 は 15 層から出土した瀬戸産のせんじ碗である。高台は露胎である。登窯第３段階第９小期に位置づけられる。

92・93 は腰錆碗である。92 は９層、93 は 15 層から出土した。どちらも内面および外面上部にかけて灰釉が施され、外面下部にかけて鉄釉がかけ分けされている。畳付は露胎である。92 は登窯第３段階第９小期に位置づけられる。93 は瀬戸産で、畳付には焼成中に貼付いたと思われる剥離片がみられる。登窯第３段階第 10 小期に位置づけられる。

94 は 11 層から出土した京焼風陶器である。外面は施釉されているが、内面と高台は露胎である。高台内には墨書がみられる。全ては判読できないが、２行にわたって墨書がなされ、「鉄島九左衛□／納留九左門殿」と読める。高台内には刻印もみられるが、判読できない。

95 は 12 層から出土した肥前産の広東碗の蓋である。内外面に文様が描かれている。

96 ～ 100・102 は染付皿である。102 は 11 層、96・98・100 は 12 層、97・99 は 14 層から出土した。96 は肥前産で、内面中央には松竹梅円形紋がみられる。高台内に「大明成化年製」という銘がみられる。97 は肥前産で、内面中央には松竹梅円形紋がみられる。高台が低い。98 は肥前産の青磁染付角皿である。見込みには山水紋がみられる。高台は器形に反して円形である。高台内には「乾」という銘がみられる。99 は肥前産で、内面中央には山水紋がみられる。高台は高く、高台内には銘がみられる。100 は瀬戸産で、登窯第３段階第 10 小期に位置づけられる。102 は瀬戸産で、内面中央の文様は五弁花紋と思われる。登窯第３段階第 10 小期に位置づけられる。

101 は 11 層から出土した小皿である。施釉後に絵や文様が描かれている。一部棒をもった人間が描かれているようにみえる。

103 ～ 105 は摺絵皿である。103 は 11 層、104 は 14 層、105 は 15 層から出土した。いずれも内面及び外面上部に灰釉が施され、外面下部より高台は露胎である。103 は瀬戸産で、内面中央付近には五瓜に三つ星が描かれている。内面中央には重ね焼き痕がみられる。登窯第２段階第５小期もしくは第６小期に位置づけられる。104 は美濃産で、内面中央には梅と思われる絵が描かれている。登窯第２段階第６小期に位置づけられる。105 は美濃産で、剥離のため絵の詳細は不明である。内面中央には重ね焼き痕がみられる。登窯第２段階第７小期に位置づけられる。

106・107 は皿である。106 は 15 層、107 は 19 層から出土した。どちらも美濃産で、灰釉が施される。高台は露胎で、削出高台である。106 は内面底部に重ね焼き痕がみられる。登窯第２段階第７小期もしくは第３段階第８小期に位置づけられる。107 は小片であるが、登窯第２段階第７小期もしくは第３段階第８小期に位置づけられる

108・109 は型打皿である。109 は 12 層、108 は 14 層から出土した。108 は瀬戸産で、内面と外面上部に灰釉が施される。外面底部は露胎である。内型を使用して型打ちされており、内面底部が器形と同じく方形である。高台は器形に反して円形で、碁笥底である。登窯第３段階第８小期に位置づけられる。109 は内外面に鉄釉が施される。畳付は露胎である。内面底部と高台は器形と同じく方形である。高台内には「萬王」という刻印の銘がみられる。登窯第３段階第 11 小期に位置づけられる。

110 は 12 層から出土した皿である。施釉後に紅葉が描かれており、犬山焼と思われる。高台は露胎である。高台内には「乾山」という銘がみられる。

111 は９層から出土した肥前産の箱形湯呑である。見込みに五弁花紋がみられる。

112 は 12 層から出土した肥前産の蓋で、把手は欠けている。外面には文様が描かれている。若干焼成が不十分のようにみえる。

Fig.48　SD01 出土遺物実測図（１５）

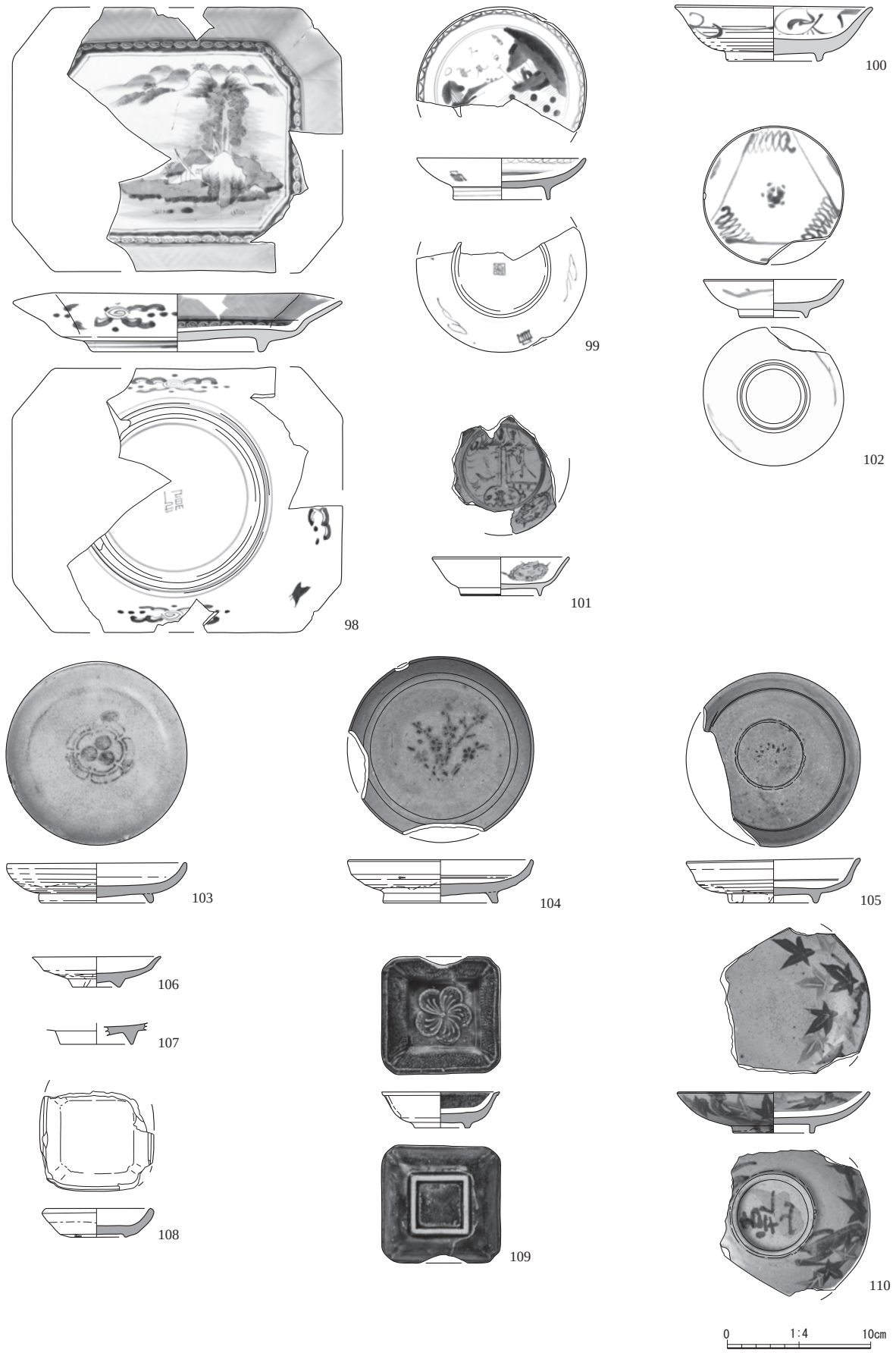


Fig.49　SD01 出土遺物実測図（１６）

113 は 12 層から出土した肥前産の染付八角鉢である。見込みには銀杏の葉が描かれている。蛇ノ目凹形高台である。

114 は２層から出土した唐津産陶器の小片で、斑唐津と思われる。内面と外面上部に藁灰釉が施される。鉢の一部と思われる。

115 ～ 117 は擂鉢である。115・116 は９層、117 は 14 層から出土した。いずれも瀬戸産で内外面に鉄釉が施される。115 の外面底部には糸切痕がみられる。登窯第３段階第８小期に位置づけられる。116 の体部内面上方には丸に大の押印がみられる。登窯第３段階第 10 小期に位置づけられる。117 は登窯第３段階第９小期に位置づけられる。

118 ～ 121 は片口である。120・121 は９層、118・119 は 14 層から出土した。いずれも内外面に灰釉が施され、高台は露胎である。内面底部には重ね焼き痕がみられる。118・119・121 は美濃産である。118・119 は登窯第３段階第９小期に位置づけられる。120 は登窯第３段階第 10 小期に位置づけられる。121 は登窯第３段階第 11 小期に位置づけられる。

122 は 11 層から出土した瀬戸産の半胴で、赤津地域で作られたものと思われる。内外面に鉄釉が施され、外面底部は露胎である。登窯第３段階第 10 小期に位置づけられる。

123 は 11 層から出土した瀬戸産の行平である。内外面に灰釉が施される。内面口縁部端部から屈曲部、外面下部は露胎である。外面体部最下位には半球状の三足が貼付される。外面下部には焦げ痕がみられる。登窯第３段階第 11 小期に位置づけられる。

124 は 11 層から出土した肥前産の染付花瓶である。底部は欠けている。

125 は 11 層から出土した瀬戸産の香炉である。外面口縁部近くに梅の絵が描かれ、内外面上部に灰釉が施される。外面下部及び内面下部は露胎である。登窯第３段階第 11 小期に位置づけられる。

126・127 は水盤である。127 は 12 層、126 は 15 層から出土した。126 は瀬戸産で、内外面に灰釉が施される。外面底部及び脚部は露胎である。脚が貼付されている。内面には重ね焼き痕がみられる。登窯第３段階第８小期に位置づけられる。127 は内外面に呂宋釉が施される。外面底部、脚部の内側は露胎である。内面底部には重ね焼き痕がみられる。脚付であるが、欠けている。外面には雲龍文が施されている。脚部外側には草花の文様が施されている。登窯第３段階第８小期に位置づけられる。

128 ～ 131 は火鉢である。129 は２層、130 は 11 層、131 は 12 層、128 は 15 層から出土した。128 は瀬戸産で、外面に灰釉が施され、鉄釉を流しかけている。内面、外面底部は露胎である。口縁部の穿孔は火箸をさすために用いられたと考えられる。外面底部には二山からなる切り取りが３箇所にみられ、切高台状を呈している。登窯第３段階第 10 小期位置づけられる。129 は小片であるが、瀬戸産で、口縁と外面に鉄釉が施される。口縁部端部上面では釉が剥離している。内面は露胎である。登窯第３段階第 10 小期もしくは第 11 小期に位置づけられる。130 は瀬戸産で、内面は錆釉がハケ塗され、外面に鉄釉が施される。内外面底部は露胎である。内面には重ね焼き痕がみられる。外面底部には半球状の三足が貼付されている。墨書がみられるが、判読できない。登窯第３段階第 10 小期に位置づけられる。131 は内外面に鉄釉が施される。内面は釉薬をハケ塗している。内外面底部は露胎である。内面底部には布目痕がみられる。外面底部には半球状の三足が貼付され、墨書がみられる。全ては判読できないが、「二□三申」と読める。登窯第３段階第 11 小期に位置づけられる。

132・133 は瓦質の脚付火鉢である。132 は９層、133 は 12 層から出土した。132 は底部にナデ調整がみられる。133 は外面には線刻が施されている。

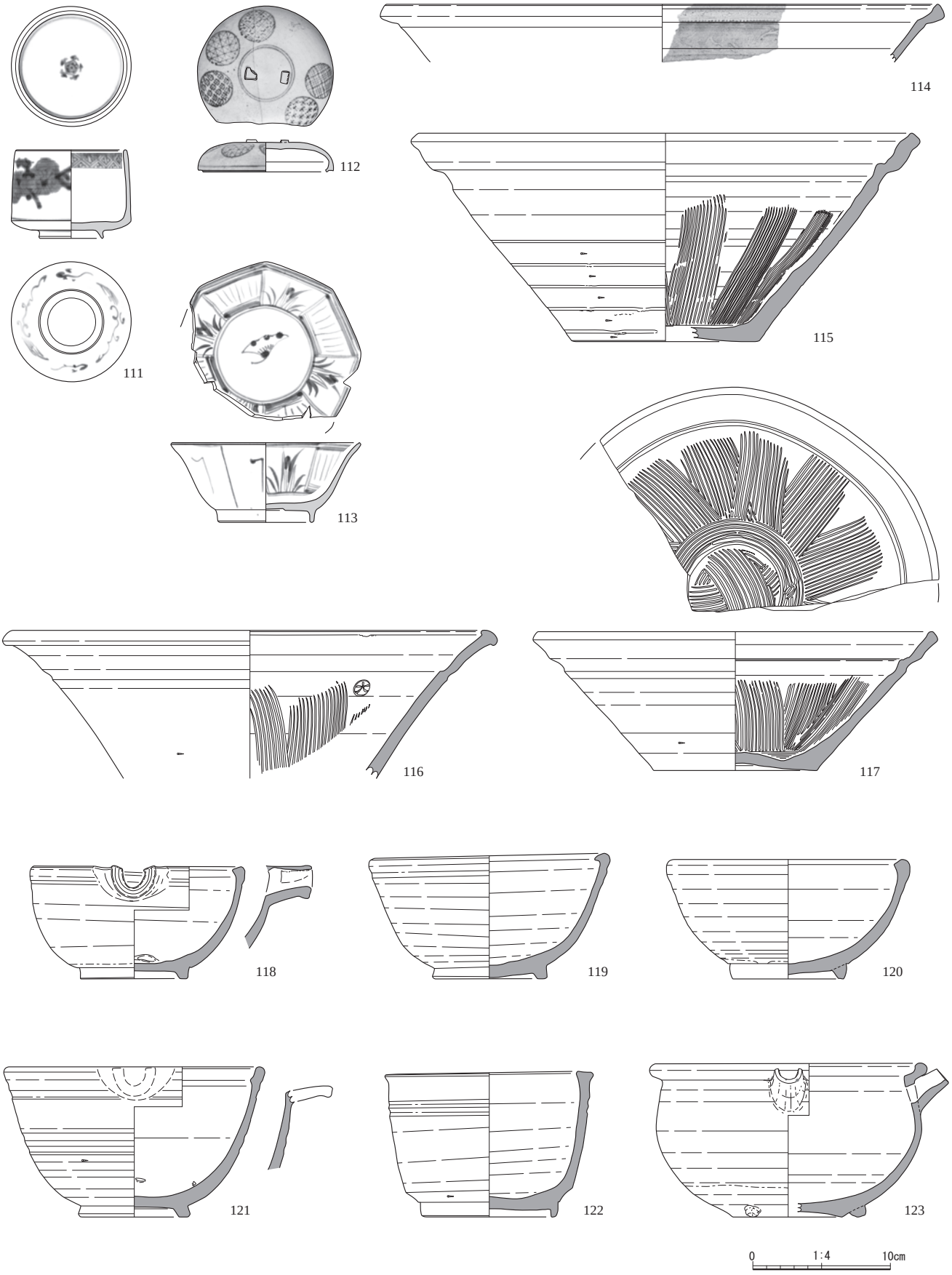


Fig.50　SD01 出土遺物実測図（１７）

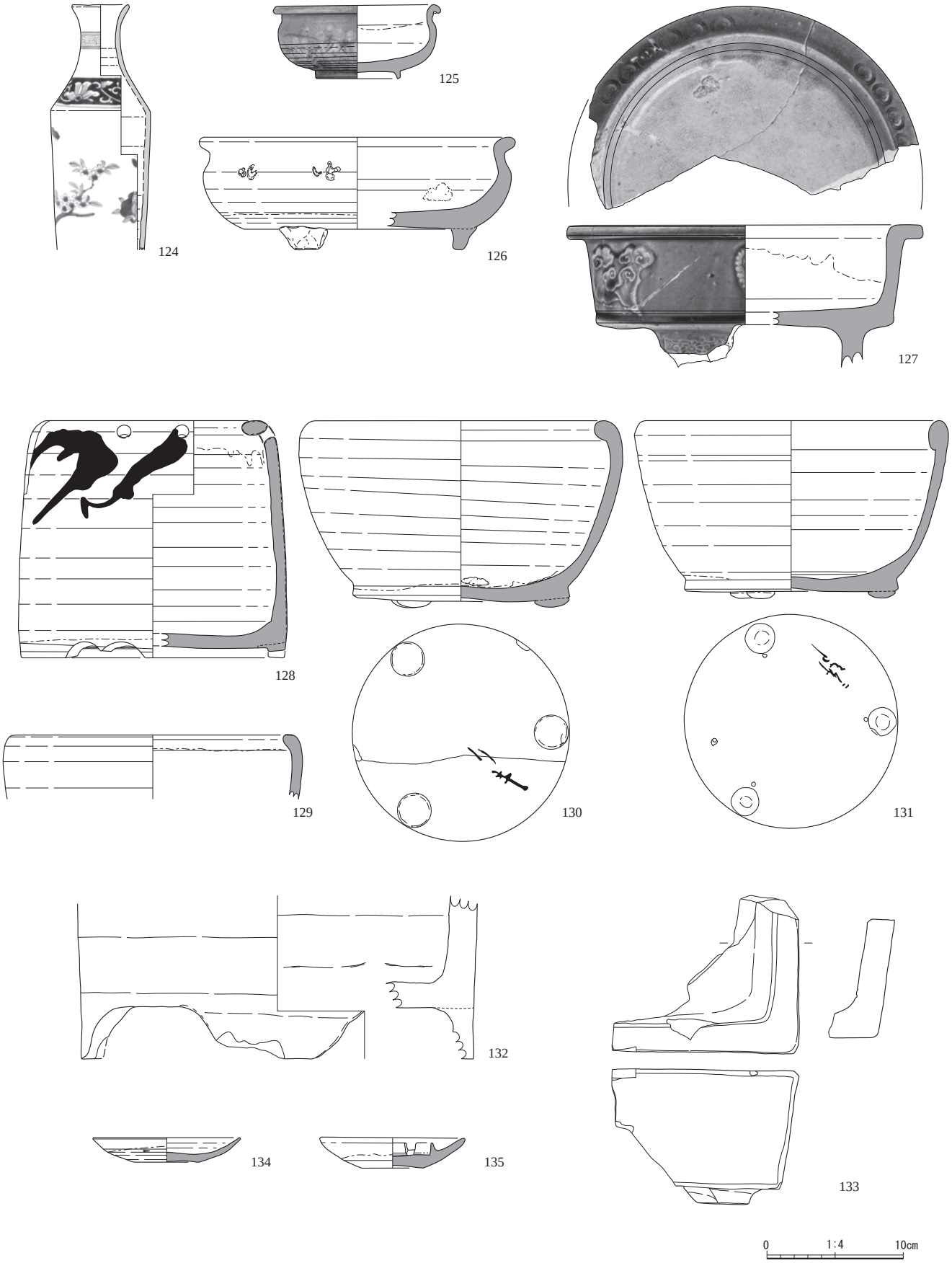


Fig.51　SD01 出土遺物実測図（１８）

134・135 は灯明皿である。135 は９層、134 は 12 層から出土した。134 は美濃産で、内面および外面口縁部に鉄釉が施される。外面体部から底部にかけては施釉時に触れたためか、指痕がみられる。登窯第３段階第９～ 10 小期に位置づけられる。135 は瀬戸産で、内外面に灰釉が施されるが、外面底部は露胎である。登窯第３段階第 11 小期に位置づけられる。

136 は 14 層から出土した常滑産の涼炉の部品の一部である。赤物で、６箇所穿孔がみられる。外面底部には糸切痕がみられる。

137 は 11 層から出土した軟質施釉陶器の一部である。表面に透明釉が施される。縦に「□容」、「正吉」の刻印がある。

138 は 15 層から出土したかわらけである。ロクロ成形で、底部には糸切痕がみられる。

139 は 12 層から出土した人形の型である。形状から女性の後ろ姿と思われる。

140 ～ 142 は石製品である。141・142 は 14 層、140 は 15 層から出土した。140 は鋳型で、形状から錠の鋳型と思われる。141 は硯である。全体的に縁を欠損する。裏面に線刻がみられるが、判読できない。142 は１辺が弧状に削られており、内面は研磨されている。欠損しているため、全容は不明であるが、遺物の一部に円形状の孔が穿たれていたと考えられる。

143・144 は瓦製品である。144 は９層、143 は 12 層から出土した。どちらも転用瓦である。143 は表面に十字に線刻が施されている。144 は砥石として使用されたと考えられる。瓦片の側面を砥

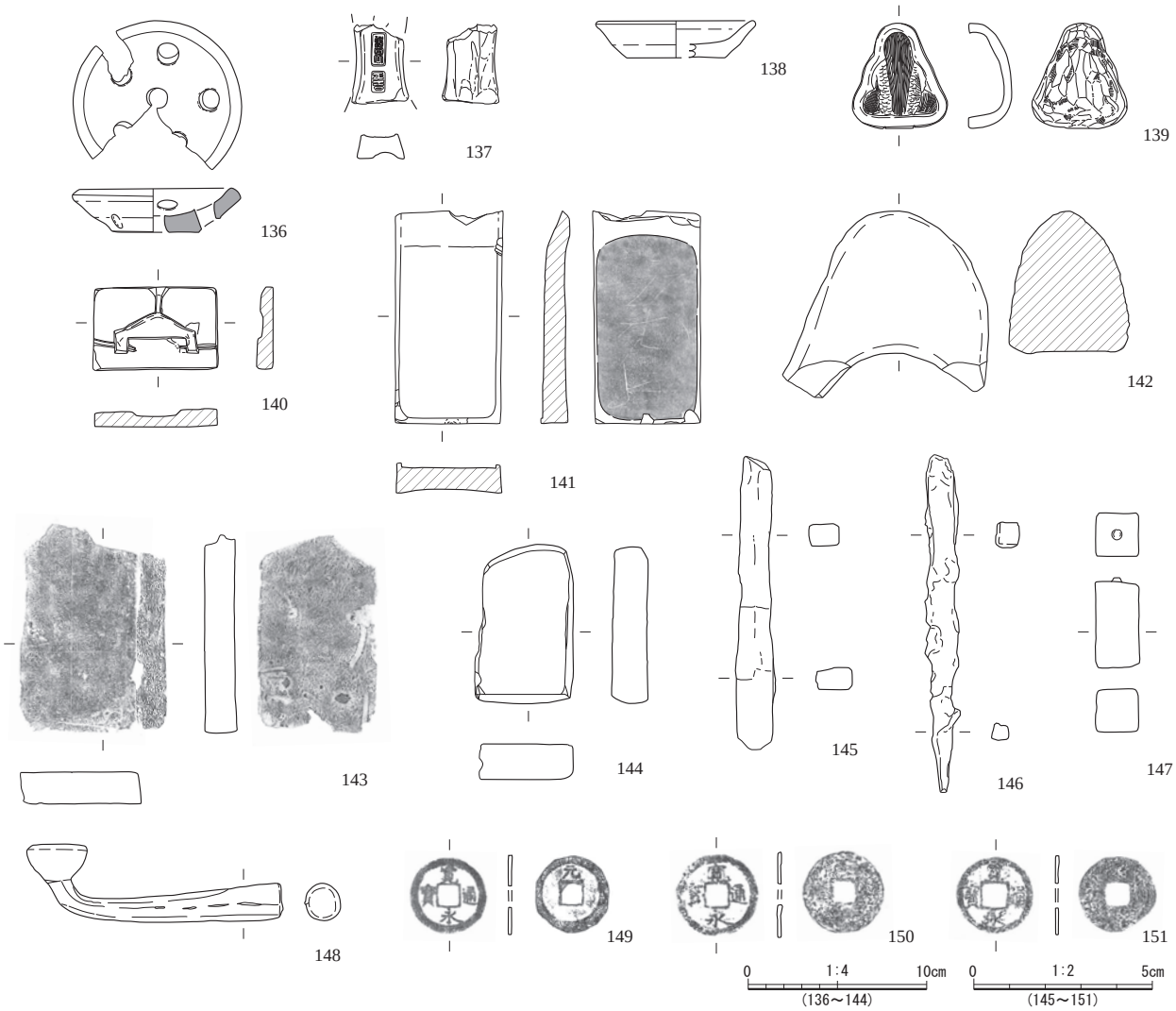


Fig.52　SD01 出土遺物実測図（１９）

面としている。

145・146 は鉄製品の釘である。146 は９層、145 は 11 層から出土した。145 の断面形は長方形で、基部が扁平であることから平釘だと考えられる。146 の断面形は方形で、脚部を持つが、腐食のため形状は明確ではない。どちらも腐食が激しく頭部の形態は不明である。

147 は 14 層から出土した青銅製の錘である。棹秤に使用されていたおもりと考えられる。

148 は 11 層から出土した青銅製の煙管の雁首である。補強帯がなく、脂反しは火皿の付け根から湾曲するため、第Ⅳ段階（古泉 1987）のものと考えられる。

149 ～ 151 は 14 層から出土した銅銭で、いずれも寛永通寶である。149 は「元」の背文字を持つため、寛保期高津銭と考えられる。150・151 は無背銭で、書体から新寛永３期に分類される（兵庫埋蔵銭調査会 1996）。

（２）柱列跡

SA01（Fig.53）　調査区北部の D8・E8 グリッドに位置する。SP02・SP05・SP10・SP14 の４基から構成される。他の遺構との重複関係は無い。確認できた規模は、東西方向 5.2 m（３間）の柱列跡である。但し狭い範囲での確認に留まり、調査区外に対応する他のピットが存在している可能性もある。軸方向は N-83°-W で、柱間は約 1.8 m である。ピットの平面形は楕円形もしくは円形を呈する。規模は直径 0.3 ～ 0.4 m程度である。それぞれの底面標高は SP02 が 11.51 m、SP05 が 11.37 m、SP10 が 11.38 m、SP14 が 11.06 m であり、標高差が大きく、不揃いである。埋土は、にぶい黄褐色シルトで、柱痕は確認できなかった。遺物は出土しなかった。

本遺構は、柱列跡と考えられる。上述した通り各ピットの底面標高が統一されていないことから、構造物を構成する柱列跡としては疑問の余地がある。また南に約２m離れた SD01 と平行に位置している。遺物が出土しなかったため、時期については不明である。

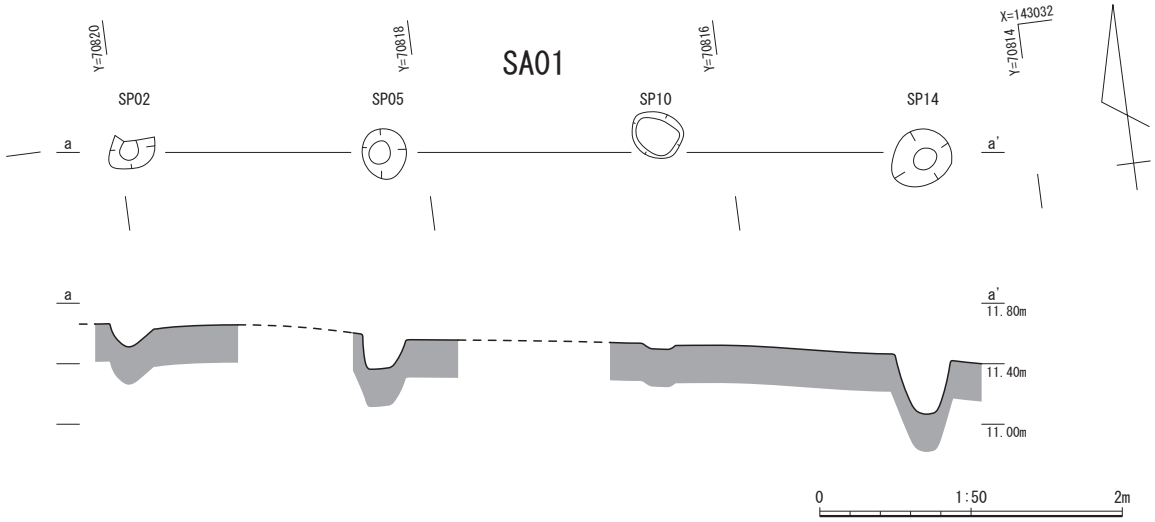


Fig.53　SA01 実測図

SA02（Fig.54）　調査区北部の D8・E8 グリッドに位置する。SP01・SP06・SP15・SP12 の４基から構成される。SD02 と重複関係にあり、SD02 より古い。確認できた規模は、東西方向 5.9 m（３間）の柱列跡である。但し狭い範囲での確認に留まり、調査区外に対応する他のピットが存在している可能性もある。軸方向は N-83°-W で、柱間は約 2.0 m である。ピットの平面形は楕円形もしくは

円形を呈する。規模は直径約 0.3 ｍで、それぞれの底面標高は SP01 が 11.41 ｍ、SP06 が 11.32 ｍ、SP15 が 11.24 ｍ、SP12 が 11.05 ｍであり、標高差が大きく、不揃いである。埋土は、にぶい黄褐色シルトで、SP06 のみ柱痕を確認できた。柱痕は直径約 0.05 ｍを測る。遺物は出土しなかった。

本遺構は､柱列跡と考えられる。上述した通り各ピットの底面標高が統一されていないことから、構造物を構成する柱列跡としては疑問の余地がある。また南に約１ｍ離れた SD01 と平行に位置している。遺物が出土しなかったが、SD02 との新旧関係から 15 世紀後半以前の可能性がある。

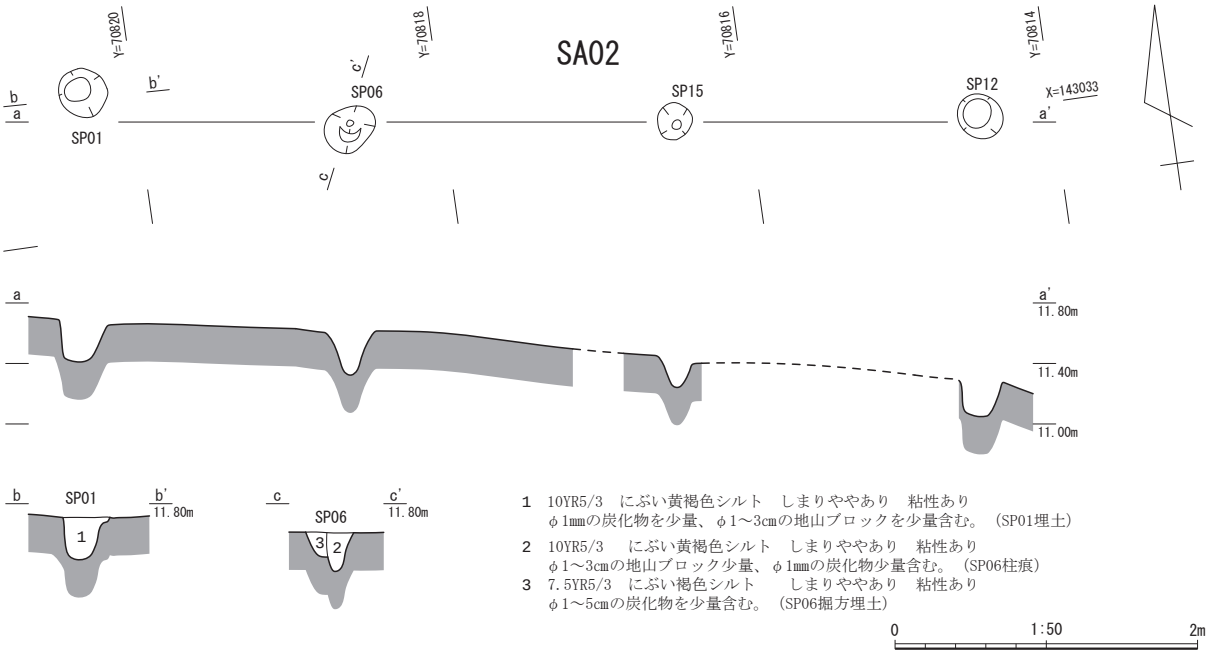


Fig.54　SA02 実測図

（３）溝

SD02（Fig.55・56）　調査区北部の D8・E8 グリッドに位置する。平面形状はＬ字状で、南北方向に延び、屈折して東に延伸する。南側や東側にも続くと考えられるが、それぞれ近代以降の攪乱によって削平されているため確認できなかった。SK02･SP09 と重複関係にあり、SK02･SP09 より古い。また底面で検出した SP12 や SP16 より新しいと考えられる。断面形状は皿状を呈する。規模が検出長 4.1 ｍ、最大幅 0.5 ｍを測り、深さは南端からＬ字に屈折する箇所まで 0.1 ｍ程度で一定であるが、そこから東に向かい緩やかに傾斜し東端では 0.2 ｍ程度となる。埋土はにぶい黄褐色シルトである。遺物は土師器、須恵器、中世陶器が少量出土した。152 は１層から出土した縁釉小皿である。口縁部に釉薬が施される。古瀬戸後期様式第Ⅳ期新である。

出土遺物は少量でいずれも底面からの出土ではないため、詳細な時期は不明であるが、最も新しい遺物が古瀬戸後期Ⅳ期新のものであることから、15 世紀後半以降に位置づけられる。

（４）土坑

SK02（Fig.55）　調査区北部の D8 グリッドに位置する。SD02 と重複関係にあり､SD02 より新しい。平面形状は楕円形で、断面形状は逆台形を呈する。規模が長軸 1.1 ｍ、短軸 1.0 ｍ、深さ 0.2 ｍを測る。埋土は２層に分かれ、１層は灰黄褐色シルト、２層は褐灰色粘質土が堆積する。遺物は２層から灰釉陶器、土師質土器が出土したが、小片のため時期比定が困難である。

SD02 との新旧関係から、15 世紀後半以降に位置づけられる。

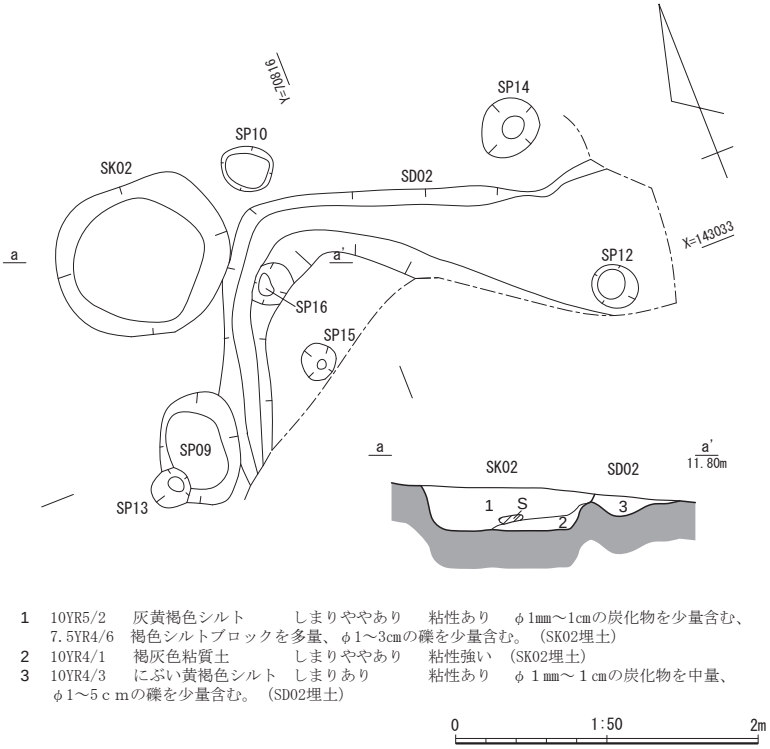


Fig. 55　SD02・SK02 実測図

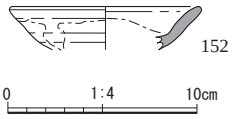


Fig. 56　SD02 出土遺物実測図

（５）遺構外の出土遺物

遺構外出土遺物（Fig. 57）　表土から出土した２点を図示した。153 は１層から出土した軒丸瓦である。連珠三ツ巴紋で、連珠と巴紋の間に圏線がめぐらないものである。周縁が幅広く、珠文は 12 個を数え、やや大振りである。154 は１層から出土した煉瓦である。「ENSYUTAIKA」と刻まれている。文字の周辺には格子列が施され、縁には文様が無い。

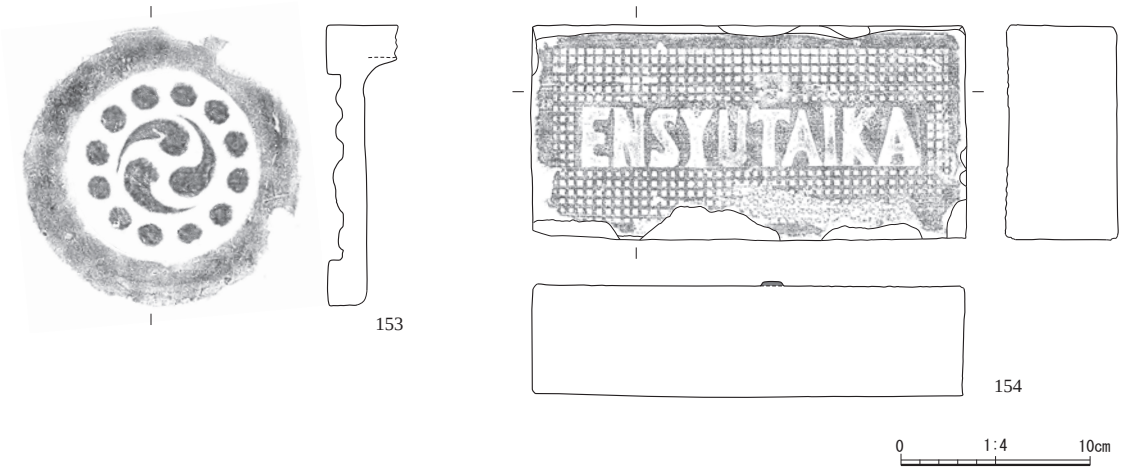


Fig. 57　遺構外出土遺物実測図

３　小結

今回の調査は、浜松城大手門西側の外堀跡に相当する箇所で行われた。これまで浜松城跡の発掘調査は、天守曲輪や本丸、二の丸などの城の中心部と引間城（古城）の周辺というほぼ限られた場所で行われてきた。外堀の調査はこれまで前例がなく、今回初めて状況を知ることとなった。今回の調査によって、近代以降の都市開発の影響を受けて削平されているものの、遺構や遺物がいまだに残存していることが判明した。

調査区の大半を堀 SD01 が占める。今回の調査では全体的に堀底まで掘り下げていないため、構築時期に関しては不明である。堀の廃絶時期は、埋土の堆積状況と出土遺物から 19 世紀中頃以降と考えられる。堀の埋土から、層位ごとに大幅な時期差が認められないため、堀の廃絶は比較的短期間で行われていると思われる。また、堀と平行して SA01・02 が検出されたが、第 33 次調査で検出されている柱列跡とは主軸の向きもそれぞれの柱穴規模も異なるため、別物である。SA01・02 は底面標高も不揃いのため、構造物を構成するかは疑問が残る。近世に描かれた絵図から、堀の北側には土塁が構築され、その上に土塀を築いていたと考えられており、他に構造物は確認できていない。柱列跡 SA01・02 については、外堀との関係性の有無も考慮しながら、今後の調査の中で検討を重ねていく必要があるだろう。

遺物については堀跡からの出土数は多く、17 世紀末以降～ 19 世紀後半までに相当する陶器が確認される。ただし、出土遺物の大半はⅡ層から出土しているため、城跡との関わりだけでなく、城下町の変遷をも含めての検討が必要である。太田氏や本庄松平氏の家紋瓦も確認されており、その他軒瓦や塀瓦なども確認されている。また、前章で報告されている飾り瓦（Fig.22-13）と類似する飾り瓦（Fig.47-83・Fig.48-85）も出土しており、今後の調査事例の増加に伴って外堀沿いにみられる施設で用いられた瓦についての様相も明らかになることが期待される。

Tab.4　浜松城跡 34 次調査　出土遺物観察表（１）

Fig	No.	遺　構	種　別	細　別	反転	口径・幅 (cm)	器高・長さ (cm)	底径・厚さ (cm)	残存率 (%)	色　調	備　考
34	1	SD1(14 層)	瓦	軒丸瓦	－	15.5	(5.9)	2.9	20	灰白	繋九目結紋、瓦当周縁に板目状圧痕、離れ砂、Vb 類
34	2	SD1(5 層)	瓦	軒丸瓦	－	15.6	(9.8)	2.2	30	灰白	下層確認トレンチ、繋九目結紋、コビキＢ技法、凸面タテミガキ、離れ砂か、Vb 類
34	3	SD1(2 層)	瓦	軒丸瓦	－	14.0	－	2.3	10	灰白	繋九目結紋、離れ砂、Va 類
34	4	SD1(9 層)	瓦	軒丸瓦	－	(13.8)	(5.7)	1.7	15	灰白	繋九目結紋、離れ砂、Va 類
34	5	SD1(12 層)	瓦	軒丸瓦	－	(16.0)	(5.9)	2.8	10	灰白	繋九目結紋、離れ砂、吊紐痕か、Vb 類
34	6	SD1(15 層)	瓦	軒丸瓦	－	(13.7)	－	2.7	10	灰白	繋九目結紋、離れ砂、Va 類
34	7	SD1(14 層)	瓦	軒丸瓦	－	(8.6)	(5.5)	2.8	10	灰白	繋九目結紋、コビキＢ技法、離れ砂、Va 類
34	8	SD1(12 層)	瓦	軒丸瓦	－	15.5	－	2.8	10	灰白	下層確認トレンチ、繋九目結紋、離れ砂、Vb 類
34	9	SD1(15 層)	瓦	軒丸瓦	－	(8.9)	(4.1)	2.8	10	灰白	繋九目結紋、離れ砂、Vb 類
34	10	SD1(16 層)	瓦	軒丸瓦	－	14.2	－	2.8	15	灰白	桔梗紋（立体表現）、離れ砂、Ⅲa 類
34	11	SD1(9 層)	瓦	軒丸瓦	－	(9.0)	－	1.8	20	灰白	西端トレンチ、桔梗紋（隆帯表現）、離れ砂、Ⅲb 類
35	12	SD1(14 層)	瓦	軒丸瓦	－	14.8	(12.1)	2.0	50	灰白	左三ツ巴紋、珠紋 7、圏線あり、凸面タテミガキ、凹面縦方向の棒状叩痕、凹面ナデ、Ⅱc 類
35	13	SD1(19 層)	瓦	軒丸瓦	－	14.8	－	2.1	15	灰白	左三ツ巴紋、珠紋 7、圏線あり、Ⅱc 類
35	14	SD1(15 層)	瓦	軒丸瓦	－	15.3	(21.2)	2.4	60	灰白	左三ツ巴紋、珠紋 7、圏線あり、凸面タテミガキ、凹面コビキ痕、凹面布目単位 6 ～ 7 本 / ㎠、胴部に釘穴あり、凹面吊紐痕、Ⅱc 類
35	15	SD1(11 層)	瓦	軒丸瓦	－	15.0	－	2.0	20	灰白	左三ツ巴紋、珠紋 7、圏線あり、離れ砂か、Ⅱc 類
35	16	SD1(14 層)	瓦	軒丸瓦	－	15.0	－	2.5	10	灰白	左三ツ巴紋、珠紋 7、圏線あり、離れ砂、Ⅱc 類
35	17	SD1(12 層)	瓦	軒丸瓦	－	(13.8)	(11.5)	2.4	20	灰白	下層確認トレンチ、右三ツ巴紋、珠紋 16 か (9 個残存)、コビキＢ技法、凸面タテミガキ、凹面布目単位 10 ～ 12 本 / ㎠、凹面縫い取り痕か、Ⅱd 類
35	18	SD1(14 層)	瓦	軒丸瓦	－	14.8	－	3.4	20	灰白	左三ツ巴紋、珠紋 7、Ⅱc 類
36	19	SD1(12 層)	瓦	軒丸瓦	－	15.3	(28.2)	2.1	90	灰白	左三ツ巴紋、珠紋 12、凸面タテミガキ、凹面布目単位 6 本 / ㎠、胴部に釘穴あり、凹面布綴じ痕、凹面縦方向の棒状叩痕、Ⅱa 類
36	20	SD1(19 層)	瓦	軒丸瓦	－	14.3	(9.2)	2.0	35	灰白	左三ツ巴紋、珠紋 12、コビキＢ技法、凸面タテミガキ、凹面布目単位 11 本 / ㎠、凹面櫛目痕、Ⅱa 類
36	21	SD1(14 層)	瓦	軒丸瓦	－	15.4	－	2.3	20	灰白	左三ツ巴紋、珠紋 12 か (9 個残存)、Ⅱa 類
36	22	SD1(12 層)	瓦	軒丸瓦	－	15.0	(5.9)	3.0	10	灰白	左三ツ巴紋、珠紋 8 か (7 個残存)、Ⅱb 類
36	23	SD1(12 層)	瓦	軒丸瓦	－	15.4	－	1.8	20	灰白	左三ツ巴紋、珠紋 12、Ⅱa 類
36	24	SD1(13 層)	瓦	軒丸瓦	－	15.3	－	2.1	30	灰白	左三ツ巴紋、珠紋 12、Ⅱa 類
37	25	SD1(11 層)	瓦	軒丸瓦	－	15.6	－	2.4	25	灰白	右三ツ巴紋、珠紋 7、Ⅱc 類
37	26	SD1(12 層)	瓦	軒丸瓦	－	15.6	－	2.4	10	灰白	右三ツ巴紋、珠紋 7 か (5 個残存)、キラコ、Ⅱc 類
37	27	SD1(15 層)	瓦	軒丸瓦	－	14.9	－	2.4	10	灰白	右三ツ巴紋、珠紋 7、キラコ、Ⅱc 類
37	28	SD1(14 層)	瓦	菊丸瓦	－	8.5	－	1.7	25	黄灰	菊紋 (12 弁)、キラコ
37	29	SD1(12 層)	瓦	軒平瓦	－	(12.7)	(8.5)	1.8	15	灰	三葉紋 2 反転均整唐草紋、唐草の巻きが弱い、凸面ヨコナデ、凹面タテナデ、離れ砂、Ⅴb 類
37	30	SD1(15 層)	瓦	軒平瓦	－	(12.9)	(8.1)	2.4	15	灰白	三葉紋 2 反転均整唐草紋、唐草の巻きが弱い、凸面ヨコナデ、凹面タテミガキ、離れ砂、Ⅴb 類
37	31	SD1(14 層)	瓦	軒平瓦	－	26.0	28.9	2.0	75	黄灰	三葉牡丹 4 反転均整唐草紋、凹面タテミガキ、凸面ナデ、Ⅸ類
38	32	SD1(14 層)	瓦	軒平瓦	－	(21.5)	(13.7)	2.0	35	灰白	三葉牡丹 4 反転均整唐草紋、凸面ナデ、凹面ミガキ、キラコ、Ⅸ類
38	33	SD1(12 層)	瓦	軒平瓦	－	(20.6)	(12.1)	2.0	15	灰	三葉牡丹 4 反転均整唐草紋、凸面ヨコナデ、凹面ヨコナデ、キラコ、Ⅸ類
38	34	SD1(11 層)	瓦	軒平瓦	－	(14.2)	(20.3)	2.1	25	灰白	三葉牡丹 4 反転均整唐草紋、凸面ナデ、凹面ミガキ、キラコ、Ⅸ類
38	35	SD1(9 層)	瓦	軒平瓦	－	(15.3)	(16.1)	1.8	20	灰白	菊紋 (8 弁)3 反転均整唐草紋、コビキＢ技法、凸面ヘラナデ、凹面ヘラミガキ、キラコ、Ⅷa 類
38	36	SD1(12 層)	瓦	軒平瓦 (桟瓦か)	－	(15.3)	(8.2)	2.0	20	灰白	菊紋 (12 弁)3 反転均整唐草文、横方向ナデ、ヘラナデ、ヘラミガキ、キラコ、Ⅷb 類
38	37	SD1(14 層)	瓦	軒平瓦 (桟瓦か)	－	(21.5)	(13.1)	1.7	25	灰白	菊紋 (12 弁)3 反転均整唐草文、凸面ヨコナデ、凹面ミガキ、キラコ、Ⅷb 類
38	38	SD1(15 層)	瓦	軒平瓦	－	(9.2)	(6.4)	2.1	5	灰白	菊紋 (16 弁)3 反転均整唐草文、凸面ナデ、凹面ミガキ、Ⅷc 類
38	39	SD1(19 層)	瓦	軒平瓦	－	28.8	(22.7)	2.2	70	灰白	三ツ巴唐草紋 (左巻き)、凸面ナデ、Ⅹb 類
39	40	SD1(14 層)	瓦	軒平瓦	－	(15.7)	(8.8)	1.8	25	灰白	三ツ巴唐草紋 (右巻き)、凸面ナデ、凹面ヨコナデ、Ⅹa 類
39	41	SD1(9 層)	瓦	軒平瓦	－	(18.0)	(13.2)	1.9	25	にぶい橙	三ツ巴唐草紋 (右巻き)、凸面ナデ、凹面ヨコミガキ、Ⅹa 類
39	42	SD1(12 層)	瓦	軒平瓦	－	(22.1)	(12.8)	2.2	20	灰白	三ツ巴唐草紋 (左巻き)、凸面ナデ、キラコ、Ⅹb 類

※括弧内の数値は現存値

Tab.5　浜松城跡 34 次調査　出土遺物観察表（2）

Fig	No.	遺　構	種　別	細　別	反転	口径・幅 (cm)	器高・長さ (cm)	底径・厚さ (cm)	残存率 (%)	色　調	備　考
39	43	SD1(19 層)	瓦	軒平瓦	−	(20.0)	(18.3)	2.3	45	灰白	三ツ巴唐草紋（左巻き）凸面ナデ、凹面タテミガキ、キラコ、Ⅹｂ類
39	44	SD1(15 層)	瓦	軒平瓦	−	(21.0)	(23.5)	2.3	30	灰白	三ツ巴唐草紋（左巻き）、凸面ナデ、凹面タテミガキ、櫛目痕、Ⅹｂ類
39	45	SD1(19 層)	瓦	軒平瓦	−	(21.0)	(13.9)	1.9	40	灰白	五葉紋 2 反転均整唐草紋、凸面タテナデ、凹面ミガキ、Ⅵ類
39	46	SD1(15 層)	瓦	軒平瓦	−	(14.9)	(15.4)	2.4	20	灰白	五葉紋 2 反転均整唐草紋、凸面ナデ、凹面タテミガキ、Ⅵ類
39	47	SD1(14 層)	瓦	軒平瓦	−	(21.6)	(10.1)	2.3	20	灰白	五葉紋 2 反転均整唐草紋、凸面ナデ、凹面タテナデ、Ⅵ類
40	48	SD1(15 層)	瓦	軒平瓦	−	27.3	(32.0)	2.1	85	灰白	五葉紋 2 反転均整唐草紋、凸面タテナデ、凹面タテミガキ、Ⅵ類
40	49	SD1(11 層)	瓦	軒平瓦	−	(15.7)	(10.1)	1.8	20	灰白	桔梗紋 2 反転均整唐草紋、凸面ナデ、凹面ミガキ、Ⅺ類
41	50	SD1(14 層)	瓦	丸瓦	−	14.0	28.2	2.0	90	灰	コビキＢ技法、凸面タテミガキ、凹面縦方向の棒状叩痕、布目単位 10 本 / ㎠、縫い取り痕、布綴じ痕
41	51	SD1(9 層)	瓦	丸瓦	−	14.7	(26.5)	2.8	70	灰白	コビキＢ技法、凸面ヨコナデ後タテミガキ、凹面縦方向の棒状叩痕、布目単位 6 ～ 7 本 / ㎠、布綴じ痕
41	52	SD1(11 層)	瓦	丸瓦	−	13.7	28.2	2.6	95	灰白	コビキＢ技法、凸面タテミガキ、凹面縦方向の棒状叩痕、布目単位 8 本 / ㎠（細目）、6 本 / ㎠（粗目）、縄目痕
41	53	SD1(11 層)	瓦	丸瓦	−	15.7	28.4	2.1	95	灰	西側トレンチ、コビキＢ技法、凸面タテミガキ、凹面縦方向の棒状叩痕、布目単位 15 ～ 16 本 / ㎠、縫い取り痕
41	54	SD1(14 層)	瓦	丸瓦	−	14.2	27.8	2.8	95	灰白	コビキＢ技法、凸面タテミガキ、凹面縦方向の棒状叩痕、布目単位 7 ～ 8 本 / ㎠
41	55	SD1(14 層)	瓦	丸瓦	−	14.4	(16.7)	2.4	50	灰白	凸面斜格子タタキ後ナデ消し、凹面布目単位 7 本 / ㎠、抜き紐痕、玉縁部に釘穴あり
42	56	SD1(14 層)	瓦	平瓦	−	25.4	28.8	2.1	100	灰白	コビキＢ技法か、凸面ナデ、凹面ヨコナデ
42	57	SD1(12 層)	瓦	平瓦	−	31.4	28.7	1.9	75	灰白	
42	58	SD1(11 層)	瓦	平瓦	−	26.0	28.9	2.7	90	灰白	コビキＢ技法か、凸面ナデ、凹面ミガキ
43	59	SD1(14 層)	瓦	平瓦	−	21.7	25.7	2.0	100	灰白	コビキＢ技法か、凸面ナデ、凹面ミガキ
43	60	SD1(9 層)	瓦	塼瓦	−	28.3	(35.1)	1.9	50	灰白	凸面ナデ、凹面ミガキ
43	61	SD1(12 層)	瓦	塼瓦	−	29.7	(21.8)	2.1	50	灰白	凸面ナデ、凹面ミガキ、釘穴あり
44	62	SD1(12 層)	瓦	棟込瓦？ 垂木先・ 隅木先瓦？	−	28.8	28.8	2.5	85	灰白	凸面ナデ、凹面ミガキ、釘穴あり、離れ砂か
44	63	SD1(14 層)	瓦	角瓦	−	(15.8)	(7.0)	2.0	28	灰白	菊紋（14 弁）3 反転均整唐草紋、凸面ナデ、凹面ヨコミガキ
44	64	SD1(14 層)	瓦	袖瓦	−	19.6	28.5	2.1	85	灰白	凸面ナデ、凹面ナデ、ミガキ、工具痕あり
45	65	SD1(11 層)	瓦	軒桟瓦	−	(18.3)	(9.2)	2.0	20	灰白	小丸瓦当：左三ツ巴紋、平部瓦当：菊紋（12 弁）唐草紋、凸面ナデ、凹面ミガキ、キラコ、Ⅱ類
45	66	SD1(9 層)	瓦	軒桟瓦	−	(20.5)	(17.5)	1.8	30	灰白	平部瓦当:菊紋（12 弁）唐草紋、凸面ナデ、凹面ミガキ、キラコ、Ⅱ類
45	67	SD1(9 層)	瓦	軒桟瓦	−	(15.6)	(6.4)	1.9	15	灰白	平部瓦当:菊紋（12 弁）唐草紋、凸面ナデ、凹面ミガキ、キラコ、Ⅱ類
45	68	SD1(14 層)	瓦	軒桟瓦	−	(16.6)	(15.2)	1.8	30	灰白	平部瓦当:菊紋（12 弁）唐草紋、凸面ナデ、凹面ミガキ、キラコ、Ⅱ類
45	69	SD1(12 層)	瓦	軒桟瓦	−	(13.6)	(8.6)	1.9	20	灰白	平部瓦当：菊紋（12 弁）唐草紋、凸面ヨコナデ、凹面ミガキ、キラコ、Ⅱ類
45	70	SD1(11 層)	瓦	軒桟瓦	−	(23.0)	(16.6)	1.9	40	灰白	平部瓦当：菊紋（12 弁）唐草紋、凸面ヨコナデ、凹面ミガキ、キラコ、Ⅱ類
45	71	SD1(12 層)	瓦	軒桟瓦	−	(16.4)	(17.5)	1.9	25	灰白	小丸瓦当：右三ツ巴紋、平部瓦当：唐草紋、凸面ナデ、凹面タテミガキ、Z 類
46	72	SD1(15 層)	瓦	軒桟瓦	−	(18.7)	28.1	2.2	80	灰黄	小丸瓦当：右三ツ巴紋、珠紋 7、平部瓦当：蔦紋唐草紋、凸面ヨコナデ、凹面ヨコミガキ、釘穴、キラコ、Ⅲ類
46	73	SD1(9 層)	瓦	軒桟瓦（左）	−	(17.9)	(16.5)	2.0	25	灰白	平部瓦当：蔦紋唐草紋、凸面ナデ、凹面ヨコミガキ、キラコ、Ⅲ類
46	74	SD1(11 層)	瓦	軒桟瓦	−	(11.8)	−	2.0	10	灰白	西側トレンチ、小丸瓦当：右三ツ巴紋、キラコ、Z 類
46	75	SD1(12 層)	瓦	軒桟瓦	−	(9.0)	(4.8)	1.8	50	灰白	小丸瓦当：左三ツ巴紋の周りに唐草紋 12、タテナデ、キラコ、Z 類
46	76	SD1(11 層)	瓦	軒桟瓦 （小丸瓦当）	−	(7.5)	(5.6)	1.6	5	灰白	小丸瓦当：違い鷹の羽紋、凸面ナデ後ヨコミガキ、キラコ、Z 類
46	77	SD1(9 層)	瓦	棟込瓦 （輪違い）	−	(11.8)	(8.9)	2.1	10	灰白	凸面ナデ、凹面布目単位 10 本 / ㎠、ユビオサエ
47	78	SD1(12 層)	瓦	鬼瓦	−	(22.5)	(23.2)	4.2	−	灰白	桔梗紋、ミガキ、ナデ、ユビオサエ
47	79	SD1(15-16 層)	瓦	鬼瓦	−	(8.5)	(12.4)	4.3	10	にぶい褐	ミガキ、ナデ
47	80	SD1(12 層)	瓦	鬼瓦	−	(5.5)	(10.9)	2.2	−	灰白	雲形か、工具による模様付け、ミガキ、ナデ、ユビオサエ
47	81	SD1(14 層)	瓦	鬼瓦	−	(13.0)	(19.9)	2.1	−	灰白	雲形か、工具による模様付け、ミガキ、ナデ
47	82	SD1(9 層)	瓦	飾瓦	−	(11.3)	(18.9)	2.0	−	灰白	ミガキ、ナデ
47	83	SD1(9 層)	瓦	飾瓦	−	(9.0)	(10.0)	2.1	5	オリーブ黒	縦方向・横方向ナデ、ヘラによる刺突、ユビオサエ、ヘラ切り、ミガキ

※括弧内の数値は現存値

Tab.6　浜松城跡 34 次調査　出土遺物観察表（３）

Fig	No.	遺　構	種　別	細　別	反転	口径・幅 (cm)	器高・長さ (cm)	底径・厚さ (cm)	残存率 (%)	色　調	備　考
47	84	SD1(14 層)	瓦	飾瓦	－	(7.6)	(8.6)	2.2	－	灰白	クシ目、ミガキ
48	85	SD1(14 層)	瓦	飾瓦	－	(6.5)	(10.6)	1.6	－	灰白	縦方向･横方向ナデ、ヘラによる刺突、ユビオサエ、ヘラ切り、ミガキ
48	86	SD1(11 層)	瓦	飾瓦	－	(4.8)	(10.6)	1.7	－	灰黄褐	クシ目、ミガキ、ナデ
48	87	SD1(9 層)	瓦	飾瓦	－	(9.8)	(5.8)	4.5	－	灰白	ナデ
48	88	SD1(9 層)	瓦	飾瓦	－	(16.2)	(16.4)	3.3	－	灰白	ミガキ、ナデ、ヘラケズリ、スス付着
48	89	SD1(14 層)	磁器	広東碗	－	11.2	6.1	5.6	80	灰白	瀬戸産、登窯第 11 小期、白化粧後施釉
48	90	SD1(12 層)	陶器	丸碗	－	10.0	6.3	4.7	70	灰白	美濃産、登窯第 7 ～ 8 小期
48	91	SD1(15 層)	陶器	せんじ碗	－	10.0	5.4	4.2	100	灰白	瀬戸産、登窯第 9 小期
48	92	SD1(9 層)	陶器	腰錆茶碗	－	9.8	5.8	3.8	80	灰白	瀬戸産、登窯第 9 小期、外面上部:灰釉、外面下部:鉄釉、内面:灰釉
48	93	SD1(15 層)	陶器	腰錆茶碗	－	9.3	5.4	4.0	100	灰白	瀬戸産、登窯第 10 小期、外面上部：灰釉、外面下部：鉄釉、高台に窯屑あり、内面：灰釉
48	94	SD1(11 層)	陶器	碗	反	－	(4.3)	5.8	30	地：浅黄橙 釉：浅黄	京焼または京焼風陶器、高台に墨書あり
48	95	SD1(12 層)	磁器	広東碗　蓋	－	9.4	2.7	4.7	90	灰白	肥前産か
48	96	SD1(12 層)	磁器	染付皿	反	(25.8)	3.9	15.4	40	灰白	肥前産か
48	97	SD1(14 層)	磁器	皿	－	22.0	2.9	13.2	50	灰白	肥前産か
49	98	SD1(12 層)	磁器	皿	－	17.2	4.1	11.5	60	灰白	肥前産か
49	99	SD1(14 層)	磁器	皿	－	11.8	2.9	6.4	60	灰白	肥前産か
49	100	SD1(12 層)	磁器	皿	－	13.6	3.9	6.3	80	灰白	瀬戸産、登窯第 10 小期
49	101	SD1(11 層)	磁器	小皿	反	(9.4)	2.7	5.4	30	地：灰白 釉：灰白	
49	102	SD1(11 層)	陶器	染付皿	－	9.6	2.6	4.6	90	灰白	瀬戸産、登窯第 10 小期
49	103	SD1(11 層)	陶器	摺絵皿	－	12.4	2.8	7.6	100	灰白	瀬戸産か、登窯第 5 または 6 小期、外面:ナデ、ケズリ、内面:ナデ
49	104	SD1(14 層)	陶器	摺絵皿	反	(12.7)	3.0	(7.9)	80	灰白	美濃産、登窯第 6 小期、外面：ヘラ削り
49	105	SD1(15 層)	陶器	摺絵皿	－	12.0	3.0	6.0	80	灰黄	美濃産、登窯第 7 小期、内面：重ね焼き痕
49	106	SD1(15 層)	陶器	皿	－	9.9	2.1	3.2	70	黄灰	美濃産、登窯第 7 ～ 8 小期、内面：重ね焼き痕
49	107	SD1(19 層)	陶器	皿	反	－	(1.5)	(5.0)	10	黄灰	美濃産、登窯第 7 ～ 8 小期、内面；施釉
49	108	SD1(14 層)	陶器	型打皿	－	7.3	2.0	3.8	70	灰白	瀬戸産、登窯第 8 小期か、外面：口縁部に灰釉
49	109	SD1(12 層)	陶器	型打皿	－	8.2	2.5	3.8	90	灰白	登窯第 11 小期、高台内側に「萬？王」のスタンプ
49	110	SD1(12 層)	陶器	皿	反	(13.2)	2.9	5.6	60	灰白	瀬戸・美濃産ではない、犬山焼か？外面底部に「乾山」の銘款あり
50	111	SD1(9 層)	磁器	箱型湯飲み	反	(7.8)	6.4	4.5	70	地：灰白 釉：灰白	肥前産か
50	112	SD1(12 層)	磁器	蓋	－	8.9	2.1	－	90	灰白	肥前産か、生焼け
50	113	SD1(12 層)	磁器	小鉢	反	(13.4)	5.7	6.6	70	灰白	肥前産か、蛇の目凹形高台
50	114	SD1(2 層)	陶器	鉢	反	(40.0)	(4.2)	－	10	明赤褐	唐津産か
50	115	SD1(9 層)	陶器	擂鉢	反	(35.8)	15.2	(13.0)	30	地：浅黄橙 釉：褐	瀬戸産、登窯第 8 小期、外面：鉄釉、糸切痕
50	116	SD1(9 層)	陶器	擂鉢	反	(34.4)	(10.8)	－	20	淡黄	瀬戸産、登窯第 10 小期、内面：「丸に大」のスタンプあり
50	117	SD1(14 層)	陶器	擂鉢	反	(28.2)	10.1	(11.8)	30	地：浅黄橙 釉：にぶい赤褐	瀬戸産、登窯第 9 小期
50	118	SD1(14 層)	陶器	片口鉢	－	15.0	8.2	7.6	90	地：灰白 釉：オリーブ黄	美濃産、登窯第 9 小期、内面：重ね焼き痕
50	119	SD1(14 層)	陶器	片口鉢	－	16.6	9.0	7.9	70	地：褐灰 釉：黄褐	美濃産、登窯第 9 小期、外面：露胎、内面：重ね焼き痕
50	120	SD1(9 層)	灰釉陶器	片口鉢	反	(16.5)	8.7	8.0	60	地：灰白 釉：灰白	登窯第 10 小期、内部に重ね焼き痕
50	121	SD1(9 層)	陶器	片口鉢	反	(18.4)	10.9	7.8	60	地：灰白 釉：灰オリーブ	美濃産、登窯第 11 小期、外面：ヘラ削り、削り出し高台 内面：離れ砂
50	122	SD1(11 層)	陶器	半胴	－	12.9	10.5	9.0	90	地：橙色 釉：灰褐	瀬戸（赤津）産、登窯第 10 小期
50	123	SD1(11 層)	陶器	行平	－	19.4	11.2	7.9	90	灰白	瀬戸産、登窯第 11 小期、外面：底部にこげ、ケズリ、半球状の脚 3 カ所
51	124	SD1(11 層)	磁器	花瓶	－	4.0	(18.0)	－	90	灰白	肥前産
51	125	SD1(11 層)	陶器	香炉	－	11.5	5.4	5.9	90	地：浅黄橙 釉：浅黄	瀬戸産、登窯第 11 小期

※括弧内の数値は現存値

Tab.7　浜松城跡 34 次調査　出土遺物観察表（4）

Fig	No.	遺　構	種　別	細　別	反転	口径・幅（cm）	器高・長さ（cm）	底径・厚さ（cm）	残存率（%）	色　調	備　考
51	126	SD1(15 層)	陶器	水盤	反	(22.0)	8.3	(16.6)	40	灰白	瀬戸産、登窯第 8 小期、内面：重ね焼き痕
51	127	SD1(12 層)	陶器	水盤	反	(23.0)	(10.4)	(18.6)	40	灰白	登窯第 8 小期、呂宋釉、雲龍紋
51	128	SD1(15 層)	陶器	火鉢	反	(15.8)	17.4	19.2	50	灰白	瀬戸産、登窯第 10 小期、口縁部に穿孔 2 カ所あり、高台を 3 カ所くりぬいている
51	129	SD1(2 層)	陶器	火鉢	反	(20.0)	(4.7)	－	10	灰白	瀬戸産、登窯第 10・11 小期、外面：口縁部釉スレ
51	130	SD1(11 層)	陶器	火鉢	－	21.2	13.7	15.9	80	地：灰白 外釉：黒褐 内釉：暗赤褐	瀬戸産、登窯第 10 小期、外面：鉄釉、半球状の脚 3 カ所あり、墨書、内面：錆釉刷毛塗り、重ね焼き痕 5 カ所あり
51	131	SD1(12 層)	陶器	火鉢	－	21.2	13.0	15.2	60	灰白	登窯第 11 小期、外面：鉄釉、露胎、内面：鉄釉刷毛塗り、布目痕
51	132	SD1(9 層)	瓦質土器	火鉢	反	－	(12.0)	(28.8)	10	黒褐	横方向ナデ、離れ砂、4 脚？
51	133	SD1(12 層)	瓦質土器	火鉢	－	－	－	10.1	－	灰白	
51	134	SD1(12 層)	陶器	灯明皿	反	10.6	1.8	4.8	50	地：灰白 釉：にぶい赤褐	美濃産、登窯第 9 ～ 10 小期
51	135	SD1(9 層)	陶器	灯明皿	－	10.4	2.2	4.4	100	灰白	瀬戸産、登窯第 11 小期
52	136	SD1(14 層)	陶器	涼炉か	－	8.4	2.4	4.5	70	橙	常滑産、外面：糸切痕、穿孔 6 カ所
52	137	SD1(11 層)	陶器	把手か	－	－	－	2.6	－	浅黄橙	軟質施釉陶器
52	138	SD1(15 層)	かわらけ	小皿	－	8.5	2.1	5.4	20	橙	ロクロ成形、底部糸切痕
52	139	SD1(12 層)	陶製品	人形の型	－	－	5.9	0.6	100	浅黄橙	
52	140	SD1(15 層)	石製品	鋳型	－	6.8	4.6	1.0	－	－	石材：粘板岩
52	141	SD1(14 層)	石製品	硯	－	5.9	11.9	1.5	95	－	石材：粘板岩、被熱で変色している
52	142	SD1(14 層)	石製品	根固め石か	－	(11.3)	(10.4)	6.7	－	－	
52	143	SD1(12 層)	瓦製品	－	－	(6.6)	(10.8)	1.8	10	灰白	十字の線刻あり、ミガキ、ナデ、側面はヘラ切り後ナデ
52	144	SD1(9 層)	瓦製品	転用瓦（砥石に転用か）	－	(5.2)	(8.8)	2.0	100	灰白	タテ方向のナデ、ミガキ、側面は研磨されている
52	145	SD1(11 層)	金属製品	釘	－	(1.1)	(8.2)	0.6	－	－	平釘か
52	146	SD1(9 層)	金属製品	釘	－	0.7	9.5	0.7	－	－	
52	147	SD1(14 層)	金属製品	棹秤の錘	－	1.2	2.5	1.2	－	－	青銅製
52	148	SD1(11 層)	金属製品	煙管	－	(1.0)	(7.2)	1.1	－	－	青銅製
52	149	SD1(14 層)	金属製品	銭	－	2.2	2.2	0.1	100	－	寛永通寶、裏に「元」字、寛保期高津銭
52	150	SD1(14 層)	金属製品	銭	－	2.4	2.4	0.1	100	－	寛永通寶
52	151	SD1(14 層)	金属製品	銭	－	2.2	2.2	0.1	100	－	寛永通寶
56	152	SD2(1 層)	陶器	縁釉小皿	反	(10.0)	(2.3)	－	30	灰白	古瀬戸後期様式Ⅳ期新
57	153	表土一括	瓦	軒丸瓦	－	14.9	－	2.1	20	灰白	左三ツ巴紋、珠紋 12、Ⅱ a 類
57	154	表土	陶製品	煉瓦	－	11.3	22.9	5.8	80	浅黄橙	文字「ENSYUTAIKA」、文字面に格子列あり

※括弧内の数値は現存値

第４章　後　論

１　33・34 次調査出土の軒瓦について

（１）はじめに

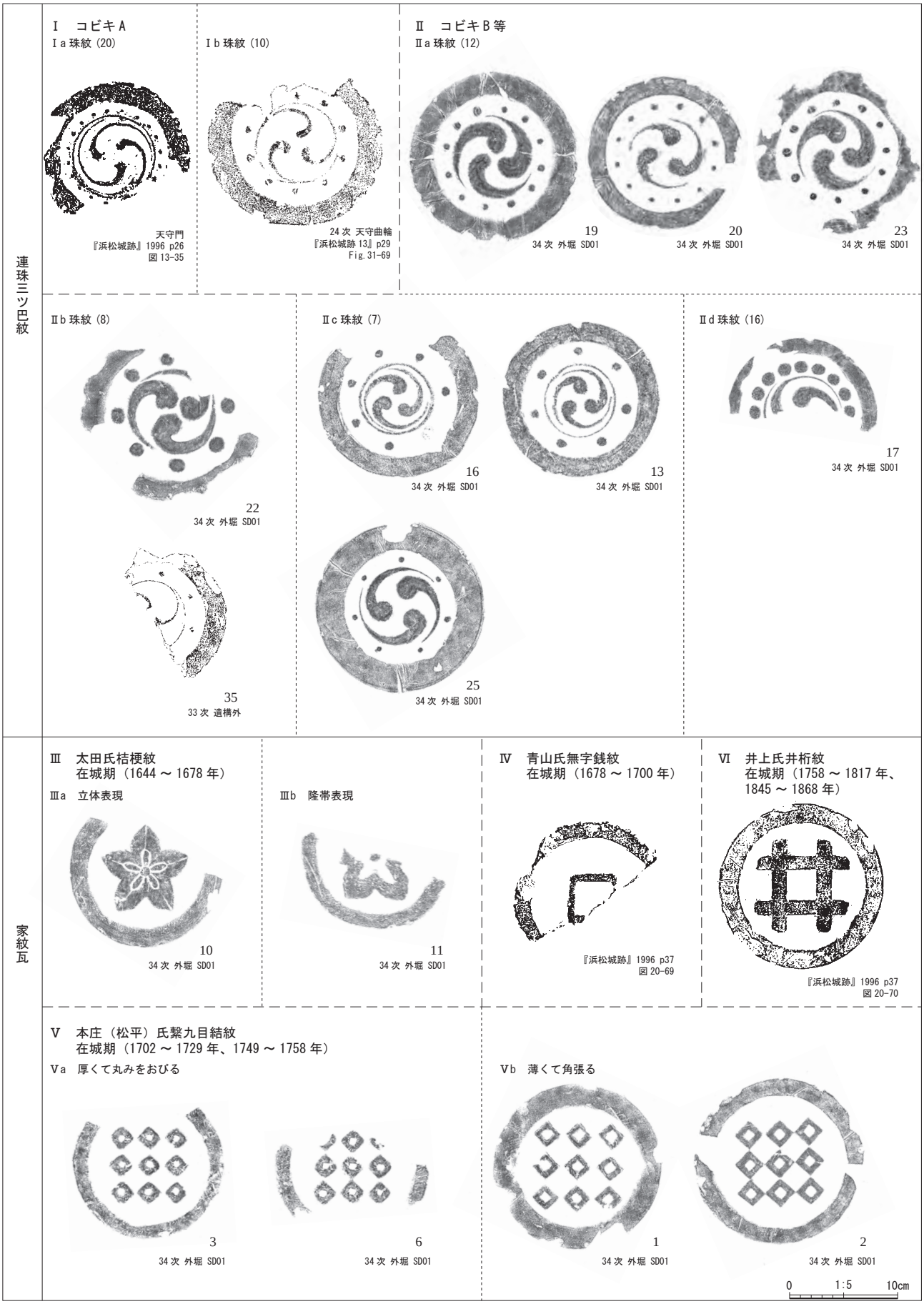
浜松城跡の調査は、工事立会なども含めると 50 回以上行われている。近年では継続して調査が行われ、平成 30（2018）年の 24 次調査では、天守曲輪における瓦溜まりの検出により、層位的な関係が明確な一括資料を得られるなど出土資料は飛躍的に増加している。ここでは、今回の発掘調査で出土した軒瓦について、浜松城跡出土の軒瓦分類（鈴木 2019）に沿いながら、新たに細分できた模様系統を加えて分類し、出土位置や層位なども踏まえながら、それぞれの帰属時期や使用状況についての検討を加える。

（２）軒丸瓦

浜松城跡から出土した軒丸瓦は、三ツ巴紋瓦と家紋瓦の２種類である。軒丸瓦の分類では、三ツ巴紋瓦は瓦当文様の特徴と丸瓦部凹面に残るコビキ痕からⅠ類およびⅡ類に、家紋瓦では家紋の違いからⅢ～Ⅵ類に分類されており、各類の中でも細分が行われている。今回の調査では、三ツ巴紋瓦と家紋瓦の２種類とも出土したため、軒丸瓦分類に沿いながら、新たに細分できた類型（Ⅱｄ・Ⅴａ・Ⅴｂ類）を加えた。詳細を以下に示す。

Ⅰ類　三ツ巴紋軒丸瓦で凹面にコビキＡ技法をもつもの　※今回出土なし
　Ⅰａ類　連珠が小さく数が多い（20 点程度）のもの
　Ⅰｂ類　連珠が大きく数が少ない（10 点程度）のもの
Ⅱ類　三ツ巴紋軒丸瓦で凹面にコビキＢ技法をもつもの、もしくはⅠ類と瓦当模様が異なるもの
　Ⅱａ類　連珠数が 12 点のもの
　Ⅱｂ類　連珠数が８点のもの
　Ⅱｃ類　連珠数が７点のもの
　Ⅱｄ類　連珠数が 16 点のもの
　（さらに、三ツ巴の形状や連珠の特徴によって別類型が存在する）
Ⅲ類　桔梗紋軒丸瓦（太田氏家紋）
　Ⅲａ類　桔梗の花弁が立体的に表現されるもの
　Ⅲｂ類　桔梗の花弁が隆帯で表現されるもの
Ⅳ類　無字銭紋軒丸瓦（青山氏家紋）※今回出土なし
Ⅴ類　繋九目結紋軒丸瓦（本庄松平氏家紋）
　Ⅴａ類　家紋文様が厚くて丸みを帯びたもの
　Ⅴｂ類　家紋文様が薄くて角張るもの
Ⅵ類　井桁紋軒丸瓦（井上氏家紋）※今回出土なし

軒丸瓦Ⅱ類　今回の調査で出土した連珠三ツ巴紋軒丸瓦は、全体的に丸瓦部を欠くものが多く、丸瓦部凹面の調整を確認できるものは少ない。調整痕を確認できたものの中では、棒状刺突痕や布



鈴木（2019）を改変

Fig.58　浜松城跡出土軒丸瓦集成図（33・34 次調査出土資料中心）

目痕が多く、コビキ痕はほとんどみられない。わずかにコビキ痕が認められるものもあるが、判別するに至らない。調整痕による分類はできないものの、巴の形状や連珠の数・大きさなどから、軒丸瓦Ⅱ類に相当するとみられる。軒丸瓦Ⅱ類では、連珠の数からⅡａ類（連珠数 12）、Ⅱｂ類（連珠数８）、Ⅱｃ類（連珠数７）、Ⅱｄ類（連珠数 16）の４種類に分類できる。なお、同じ連珠数でも、三ツ巴紋や珠文の形状に違いがみられ、瓦当部径も異なるものがあることから、複数の瓦笵が存在していたと考えられる。

Ⅱａ類（連珠数 12）（34 次 19 ～ 21・23・24）では、瓦当の大きさ、巴や珠文の形状が類似しているものは同笵の可能性がある。Ⅱｂ類（連珠数８）では、連珠と巴の間に圏線がめぐり、巴の尾が圏線に接するもの（33 次 35）と、圏線を有さず、連珠や三ツ巴紋が大ぶりなもの（34 次 22）が確認できた。これまでの調査で、巴の尾が圏線に接しないものも確認されているため、さらに細分が可能と考えられる。Ⅱｃ類（連珠数７）では、連珠と巴の間に圏線がめぐるものとめぐらないもの、圏線がめぐり巴と接するもので細分できる。圏線がめぐる三ツ巴紋瓦（34 次 12 ～ 16）は、三ツ巴紋や珠文の形状が類似しており、瓦当部径もほぼ同一であることから同笵の可能性が高い。圏線がめぐらないもの（34 次 18･25 ～ 27）は、すべて三ツ巴紋や珠文の形状が異なるため、瓦笵が異なる。圏線がめぐらないものの中には、巴の頭が小振りで尾が長いもの（34 次 18）と、巴の頭がやや大振りで尾が短いもの（34 次 25 ～ 27）がみられるため、これらの間には多少の時期差があると考えられる。Ⅱｄ類（連珠数 16）（34 次 17）は、連珠が非常に大ぶりで互いに接するように配列している。圏線はなく、三ツ巴紋は右回りで尾は長い。

軒丸瓦Ⅱ類は天守曲輪及び富士見櫓、本丸南側などで多数出土しており、浜松城域内で最も多く使用されていた軒丸瓦と考えられる。今回の調査でも同一類型内において瓦笵が異なる事例が多数確認でき、今後の調査で新たな類型がでてくる可能性が高い。

軒丸瓦Ⅲ類　太田氏の家紋である桔梗紋をもつ軒丸瓦である。桔梗紋を立体的に表現しているⅢａ類（34 次 10）、桔梗紋を隆帯で表現しているⅢｂ類（34 次 11）に分類される。

Ⅲｂ類に分類される隆帯表現は、太田氏が浜松へ移封される以前の西尾城でも確認されており（加藤 2012）、浜松城主であったころから何代か経て、太田氏が掛川城へ移封した際にはⅢａ類に類似している立体表現の桔梗紋を使用している（加藤 2012）。そのため、太田氏在城期にⅢａ類とⅢｂ類がどちらも使用されていたか、もしくは太田氏在城期に桔梗紋の表現が、Ⅲｂ類からⅢａ類へ推移した可能性が考えられる。しかしながら丸瓦部が欠けている個体が多いため、調整痕による年代特定が難しく、現状では時期差の有無については言及できない。

桔梗紋軒丸瓦は天守曲輪及び富士見櫓、本丸南側などで出土しており、今回の調査で城域の最南端である大手門付近でも出土を確認できた。太田氏在城期に浜松城跡内で広く施設の改修が行われたと考えられる。

軒丸瓦Ⅴ類　本庄松平氏の家紋である繋九目結紋をもつ軒丸瓦である。今回の調査で最も多く出土した家紋瓦である。今回の調査では、瓦当文様の形状から、家紋部分が厚くて丸みを帯びているⅤａ類（34 次３・４・６・７）、家紋部分が薄くて角張るⅤｂ類（34 次１・２・５・８・９）の２種類に分類できた。

Ⅴａ類では、家紋文様の内部の四角の向きが均一でないため、笵をあてた後に四角の形に抜いたと思われる。瓦当部径は、Ⅴｂ類より一回り小さい。瓦当内区、外区ともに離れ砂を使用したためか、滑らかではない。丸瓦部が残る資料では、粗い布目痕はみられたが、コビキ痕は確認できなかった。Ⅴｂ類では、家紋文様内の四角の向きが均一であるため、笵のみで表現していると思われる。

確認されている資料の多くは離れ砂を使用したためか、瓦当内区は滑らかではない。瓦当外区は笵から取り出した後に調整をしたためか、表面が滑らかなものが多い。

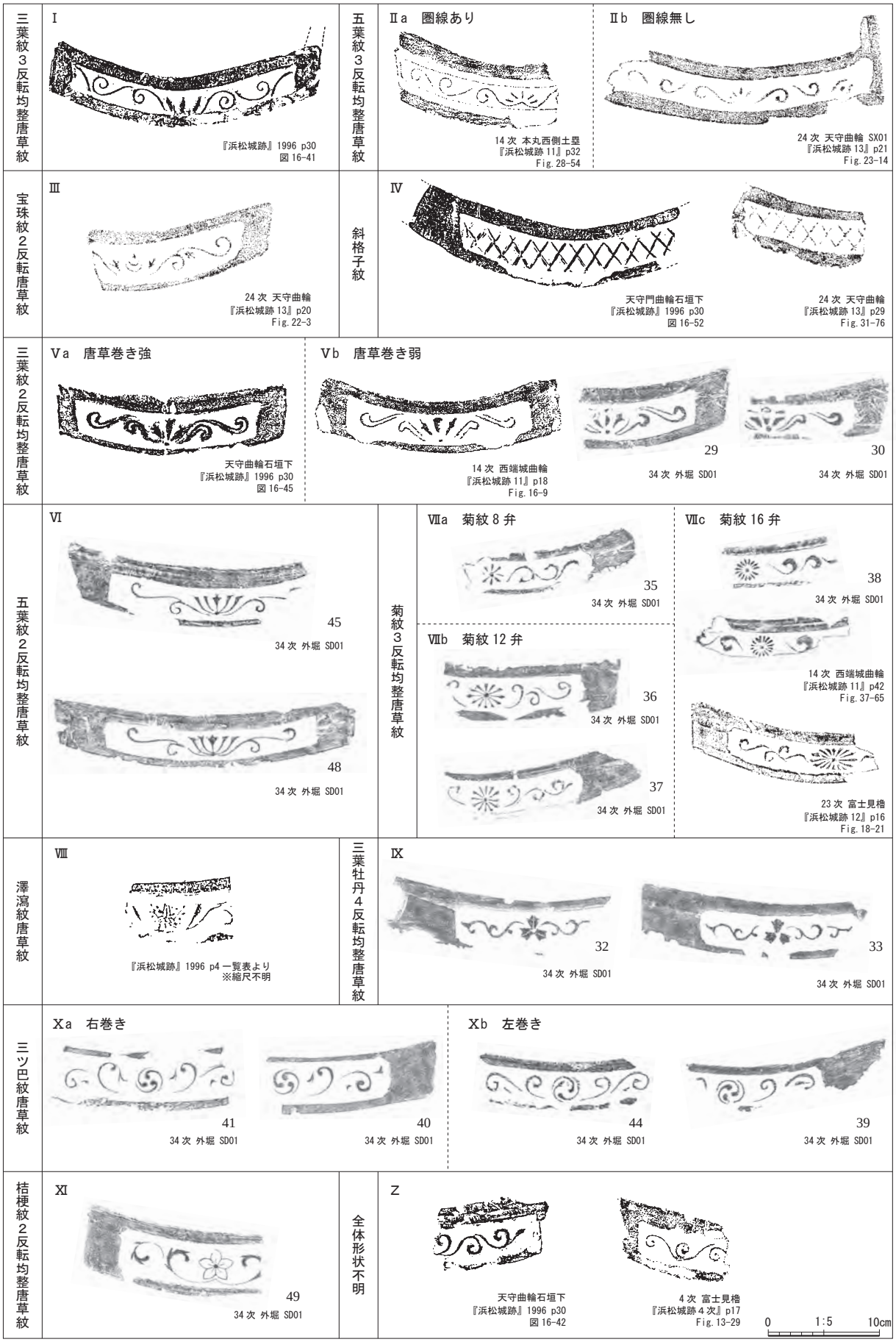
繋九目結紋軒丸瓦は天守曲輪及び富士見櫓、本丸南側、西端城曲輪などで出土しており、今回の調査で城域の最南端である大手門付近でも出土を確認できた。本庄松平氏の在城期が、1702 ～ 1729 年と 1749 ～ 1758 年の２時期存在することから、Ｖａ類とＶｂ類はそれぞれの時期に比定できる可能性は十分考えられる。しかしながら、ほとんどの資料が丸瓦部を欠いており、調整痕による年代特定が難しく、出土層位の差も見出せないことから、Ｖａ類とＶｂ類の間の時期差の有無については現時点では断言できない。類型によって、瓦当の大きさが異なるため、併用していた可能性も考えられる。

（３）軒平瓦

浜松城跡から出土している軒平瓦は、唐草紋瓦と斜格子紋瓦の２種類である。浜松城跡の軒平瓦分類では、瓦当文様と他の出土遺物等から、堀尾氏在城期もしくは近世初頭頃のものと考えられる軒平瓦をⅠ～Ⅲ類に、近世以降の軒平瓦をⅣ～Ⅷ類に、全体の文様が不明なものをＺ類に分類されている。また、各類型の中でも細分が行われている。今回の調査では時期の古いⅠ～Ⅲ類や斜格子紋の軒平瓦Ⅳ類は出土せず、唐草紋の軒平瓦のみ確認できた。軒平瓦分類に沿いながら、新たに確認できた類型（Ⅸ・Ⅹ・Ⅺ類）と新たに細分できた類型（Ⅶａ・Ⅶｂ・Ⅶｃ類）を加えた。詳細を以下に示す。

Ⅰ類　三葉紋３反転均整唐草紋軒平瓦　※今回出土なし
Ⅱ類　五葉紋３反転均整唐草紋軒平瓦　※今回出土なし
　Ⅱａ類　圏線をもつもの
　Ⅱｂ類　圏線をもたないもの
Ⅲ類　宝珠紋２反転均整唐草紋軒平瓦　※今回出土なし
Ⅳ類　斜格子紋軒平瓦　※今回出土なし
Ⅴ類　三葉紋２反転均整唐草紋軒平瓦
　Ⅴａ類　唐草紋の巻きが強いもの　※今回出土なし
　Ⅴｂ類　唐草紋の巻きが弱いもの
Ⅵ類　五葉紋２反転均整唐草紋軒平瓦
Ⅶ類　菊紋３反転均整唐草紋軒平瓦
　Ⅶａ類　菊紋が８弁のもの
　Ⅶｂ類　菊紋が 12 弁のもの
　Ⅶｃ類　菊紋が 16 弁のもの
Ⅷ類　澤瀉紋唐草紋軒平瓦　※今回出土なし
Ⅸ類　三葉牡丹４反転均整唐草紋軒平瓦
Ⅹ類　三ツ巴紋唐草紋軒平瓦
　Ⅹａ類　三ツ巴紋の巻きが右巻きのもの
　Ⅹｂ類　三ツ巴紋の巻きが左巻きのもの
Ⅺ類　桔梗紋２反転均整唐草紋軒平瓦
Ｚ類　全体形状が不明なその他の軒平瓦

軒平瓦Ⅴ類　中心飾りは点珠に膨らみのある小型の三葉紋で、重線の２反転均整唐草紋をもつ軒



鈴木（2019）を改変

Fig. 59　浜松城跡出土軒平瓦集成図（33・34 次調査出土資料中心）

平瓦である。唐草紋の巻きが強いものをＶａ類、巻きの弱いものをＶｂ類としている。今回の調査では、Ｖａ類は出土せずＶｂ類のみが確認できた（34 次 29･30）。いずれも瓦当が欠けているため、同笵関係は不明である。

Ｖｂ類は、浜松城跡内において天守曲輪周辺の広範囲で確認されており、今回の調査で城域の最南端である大手門付近でも用いられていたことが確認できた。

軒平瓦Ⅵ類　中心飾りは点珠と端部に屈曲をもつ小型の五葉紋で、２反転均整唐草紋をもつ軒平瓦である。唐草はすべて接しており、点珠と唐草も接する。

今回の調査で確認できたもの（34 次 45 ～ 48）は文様が類似しており、同笵の可能性がある。笵から取り出した後に調整によって瓦当外区上部が削られ、瓦当内区との凹凸差が少なくなっているものもみられる（34 次 46・47）。

Ｖｂ類同様に、浜松城跡内において天守曲輪周辺の広範囲で確認されており、今回の調査で城域の最南端である大手門付近でも用いられていたことが確認できた。

軒平瓦Ⅶ類　中心飾りは菊紋で、３反転唐草紋をもつ軒平瓦である。中心飾りの菊紋の花弁数により、花弁が８枚のものをⅦａ類、12 枚のものをⅦｂ類、16 枚のものをⅦｃ類に分類した。ただし、Ⅶｂ類については軒桟瓦の可能性がある個体も複数存在することから、取り扱いに留意する必要がある。

Ⅶａ類（34 次 35）では、Ⅶｂ類やⅦｃ類とは唐草の反転が逆向きである。Ⅶｂ類（33 次 36、34 次 36・37）では、子葉付きの唐草紋も確認できた（34 次 37）。菊紋の形状に違いがあり、瓦笵が複数存在すると考えられる。子葉の有無や菊紋の形状により、さらに細分が可能と思われる。Ⅶｃ類では、富士見櫓で確認されている菊紋が横長で大ぶりなタイプ（23 次 20 ～ 23）とは異なり、菊紋が小型で正円に近いタイプが今回確認された。なお、今回の調査で確認できたもの（34 次 38）に加えて、鉄門付近の過去調査において、１点確認されている（浜松市教委 2016　P42　Fig.37-65）。唐草紋が肥大化しているが、菊紋の形状は類似している。菊紋の形状はⅦａ類やⅦｂ類と明らかに異なる。いずれの資料も残存部位が少なく、桟瓦の可能性も考えられる。

これまでの調査において、菊紋をもつ軒平瓦は出土資料が乏しく、富士見櫓、鉄門付近で少量の確認に留まっていたが、今回の調査で大手門付近の外堀から複数点出土したことにより、現状では３類型に分類されている。ただし同一類型内でも、菊紋の花弁数や形状、唐草の単位などでさらに細分が可能と思われる。使用範囲や帰属時期に関しては、現状の資料では明確にするに至らない。

軒平瓦Ⅸ類　中心飾りは、直線的ではあるが三葉牡丹で、４反転均整唐草紋をもつ軒平瓦である。唐草はすべて接している。浜松城跡からは今回の調査で初めて出土した瓦当文様である。出土した瓦（34 次 31 ～ 34）は、瓦当の大きさに多少の差はあるが、瓦当内区の大きさはほぼ同一で、文様の形状が類似しているため、同笵の可能性がある。瓦当内区、外区ともに滑らかに仕上げられている。

軒平瓦Ｘ類　中心飾りは三ツ巴紋で、２反転均整唐草紋をもつ軒平瓦である。三ツ巴が右巻きのＸａ類（34 次 40・41）と左巻きのＸｂ類（34 次 39・42 ～ 44）の２種類がある。子葉が不明瞭なものもあるが、現状確認できた範囲では、三ツ巴紋の巻きの向きが同じものは同笵である可能性が高い。

Ｘａ類、Ｘｂ類ともに三ツ巴紋の巴の尾は長く、Ｘｂ類では巴の尾は次の巴に接している。Ｘａ類では、瓦当上部は面取りされており、瓦当外区は滑らかに仕上げられている。Ｘｂ類では、明確な面取りはみられない。

これまでの浜松城跡の調査の中で出土例はないが、横須賀城で子葉付であるもののＸａ類に相当

する三ツ巴紋唐草紋軒平瓦が出土している（山﨑 2008）。横須賀城では、浜松城で確認された瓦と同笵瓦も出土している（加藤 2012）ため、類似している瓦に関しては留意する必要があると考える。現状確認できる資料では、年代を特定するに至らない。

軒平瓦Ⅺ類　中心飾りは、陽刻の桔梗紋で、２反転均整唐草紋をもつ軒平瓦である。今回１点のみ出土している（34 次 49）。桔梗紋は太田氏が軒丸瓦で使用しているため、太田氏在城期に使用された可能性が考えられるが、現状の資料のみでは明言できない。

（４）軒桟瓦

軒丸瓦・軒平瓦以外の軒用瓦として、軒桟瓦や軒角瓦が出土している。軒桟瓦は、子巴や垂れが欠けているものが多く、資料が乏しいものの、今後の調査で資料が増加し、類型化が進むことを期待し、現状の資料で分類を試みた。以下詳細を示す。

Ⅰ類　垂れに三葉紋唐草紋をもつもの　※今回出土なし
Ⅱ類　垂れに菊紋唐草紋をもつもの
Ⅲ類　垂れに蔦紋唐草紋をもつもの
Ｚ類　全体形状不明軒用瓦

軒桟瓦Ⅰ類　子巴の文様に問わず、垂れに三葉紋唐草紋をもつ軒桟瓦である。今回の調査では出土していないが、12 次調査（浜松市教委 2015b　Fig.23-34）などで確認されている。中心飾りは三葉の両脇が２つに分離し、子葉が簡略化され点珠で表現されたものと思われる。所謂「東海式」軒桟瓦にみられる中心飾り（金子 1996）だが、唐草紋は省略化が進んだ３反転均整唐草紋であり、「東海式」軒桟瓦と文様が異なる。子巴が残存しているものには、頭が大振りの三ツ巴紋がみられる。

軒桟瓦Ⅱ類　子巴の文様に問わず、垂れに菊紋唐草紋をもつ軒桟瓦である。唐草紋には３反転均整唐草紋（34 次 65・70）、子葉付３反転均整唐草紋（34 次 66・68）、４反転均整唐草紋（34 次 67・69）など種類は様々である。菊紋においても形が異なり、複数の瓦笵が存在すると思われる。子巴に三ツ巴紋をもつものが確認されている（34 次 65）。

軒桟瓦Ⅲ類　子巴の文様に問わず、垂れに蔦紋唐草紋をもつ軒桟瓦である（34 次 72・73）。唐草紋は子葉付３反転唐草紋である。子巴が残存しているものには、連珠三ツ巴紋がみられる。

蔦紋の軒瓦は横須賀城でも確認されている（大須賀町教育委員会 1985、1986）が、蔦紋と唐草紋の形状が異なるため、今回出土したものとは瓦笵が異なる。横須賀城で確認された軒桟瓦では、子巴の三ツ巴紋に連珠はない。松平氏の中では蔦紋を使用している人物もいるが、浜松城歴代城主の中で、蔦紋を使用している人物はいないため、帰属時期を明確にするに至らない。

Ｚ類　全体形状が不明な軒桟瓦をＺ類とする。垂れが不明で子巴が違い鷹羽紋のもの（34 次 76）、三ツ巴紋のもの（34 次 71）、連珠の代わりに唐草を配する三ツ巴紋のもの（34 次 75）などがみられる。

（５）小結

今回の 33・34 次調査の結果を踏まえ、軒瓦の分類に関して再検討を行った。これまでの調査で出土した瓦と同一類型のものもあれば、新たに確認された類型もある。今回の調査で出土した瓦は残存状況の良好なものが少なく、コビキ痕等の調整技法による時期の判別ができていないため、製作年代が明確な家紋瓦を除き、帰属時期を明らかにする資料は乏しいが、瓦当文様を見る限り、堀尾氏在城期以降の瓦と考えられる。

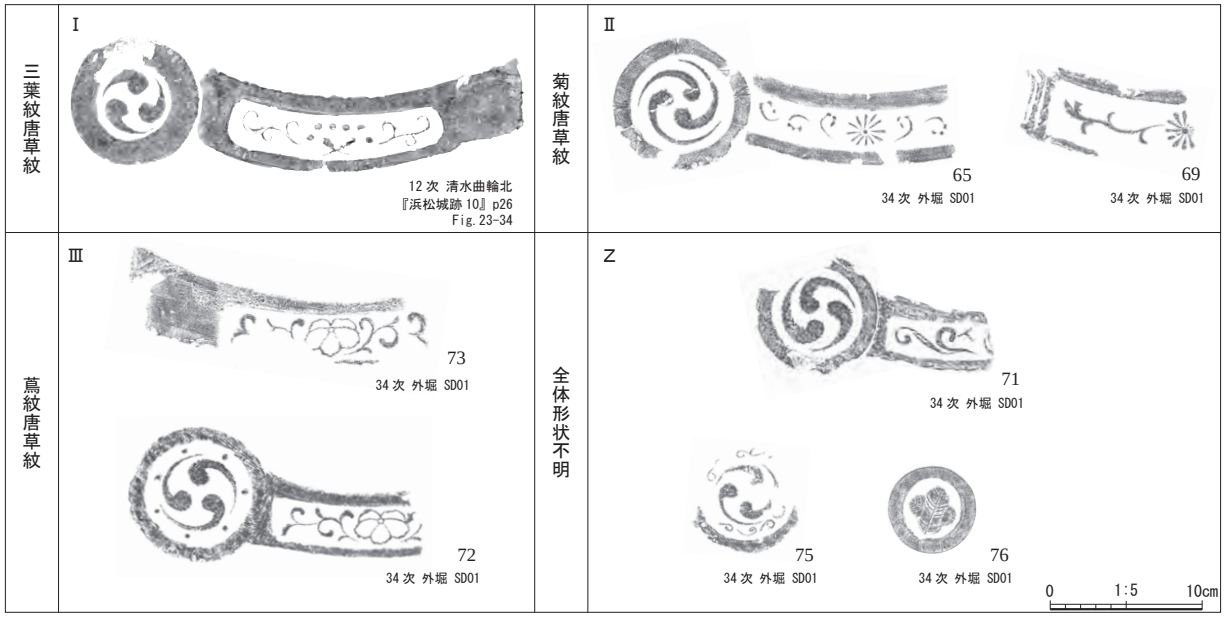


Fig.60　浜松城跡出土軒桟瓦集成図

今回の調査で出土した瓦の大半は、城の外側から流入しているⅡ層から出土している。城主の家紋瓦も出土していることから、城の施設に関わるものとみて差し支えないであろうが、軒平瓦Ⅸ～Ⅺ類や軒桟瓦など、これまでの浜松城跡の調査の中で出土していない瓦については、今後の出土状況を吟味していく必要がある。一方で、堀の内側（城側）から流入しているⅢ層で出土した瓦に関しては、堀北側法面に沿う堆積状況が比較的良好であるため、土塁上の塀や大手門などの城の施設に伴う瓦と考えられる。

城域外を区画している外堀跡には、いまだに多くの瓦や陶磁器などの資料群が埋もれている可能性が高く、良好な一括資料や層位的情報を踏まえて各類型の瓦について帰属時期や使用箇所についての検討を重ねることで、浜松城の縁辺部の状況が明らかになっていくことに期待したい。

２　堀と土塁について

（１）はじめに

34 次調査では、浜松城大手門西側の堀（SD01）を確認した。浜松城跡の本調査で今回初めて大手門西側の堀を調査した結果、得られた新知見がある。本節では、SD01 の特徴、時期、SD01 北側の土塁との関係について考察する。

（２）SD01 の規模

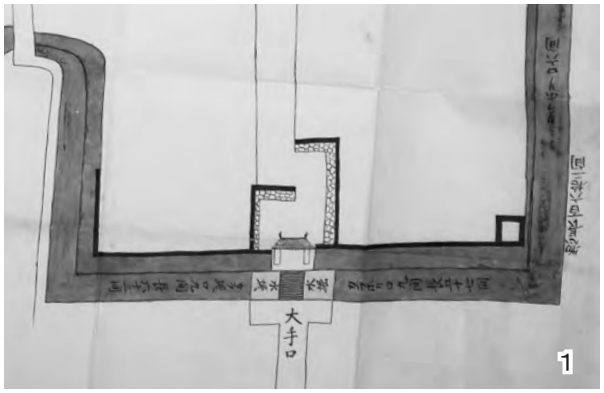
SD01 は江戸時代の絵図や位置関係から、浜松城の大手門西側の南外堀である。『浜松市史』２（浜松市 1971）では、外堀を下垂口や瓦門口によって三か所に分断された「東外堀」、そして大手門を中心にした「南外堀」の２つに分けている。この南外堀は過年度調査では工事立会 J、31 次調査（34 次の確認調査）、38 次調査の３箇所で検出されており、38 次調査では、11 ～ 12 ｍの幅を有することが確認されている。

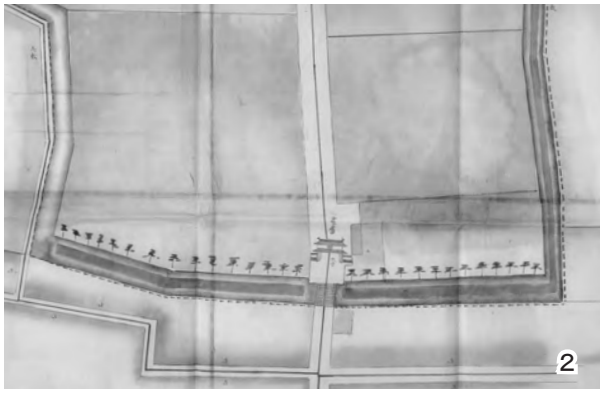
SD01 の規模は、今回確認した範囲で、検出長 16.4 ｍ、最大幅 13.4 ｍ、深さは 5.6 ｍ以上を測る。『浜松市史』２では南外堀の幅を約二間としているが、調査結果とは大きく異なる。一方、年代不詳であるが『遠州浜松城図』(Fig.61-1) では、南外堀は「カラ堀口九間　　長六十三間」と書かれている。34 次調査で確認した幅と比較すると、田舎間（１間＝約 1.8 ｍ）で算出して 16.2 ｍとなり、約３ｍの差がある。堀の幅が一定の広さでは無かった可能性もあるが、SD01 は調査区中央部や東壁での断面観察から近代以降の攪乱を受けて遺構上部が削平されているため、本来の幅は検出幅よりもやや広かったと推定される。

（３）SD01 の時期

SD01 は第２章で述べたように、埋土がⅠ～Ⅲ層に大別できるが、Ⅰ層から登窯第 10・11 小期、Ⅱ層から登窯第５～ 11 小期、Ⅲ層から登窯第７・８小期に位置づけられる遺物が出土した。出土遺物から各層位の時期は、Ⅰ層は 19 世紀中頃以降、Ⅱ層は 17 世紀後葉～ 19 世紀中頃、Ⅲ層は 18 世紀中葉以降に位置づけられる。Ⅰ・Ⅱ層の下限に時期差は無く、Ⅰ層の形成は短期間と考えられる。また、Ⅱ層内は９～ 18 層に分層されており、９～ 11 層は概ね第 10・11 小期（19 世紀前葉～中葉）が、12 層以下は概ね６～ 10 小期（18 世紀初頭～ 19 世紀前葉）が主体となり、15 層以下では第 11 小期の遺物は確認されていない。底面までの掘削が部分的であるため、塀の掘削時期を特定することはできないが、登窯第５小期頃（17 世紀後葉頃）にはすでに堀が機能していたと考えられる。太田氏（在城期 1644 ～ 1678）の家紋瓦も法面直上の層（16 層）から出土しており、時期的に符合する。

廃絶時期については、Ⅰ層が 19 世紀中頃以降に位置づけられ、明治５（1872）年の『浜松城郭（陸軍省絵図）』(Fig.61-2) でも堀が描かれているため、明治時代以降に廃絶されたと考えられる。この廃絶は明治６（1873）年の廃城令が契機になった可能性がある。『浜松市史』では明治 13（1880）年８月に内田周平（遠湖）が記した『浜松城墟記』の「迨ニ廃レ藩命下県官来治一。填ニ其濠一。毀ニ其堞レ伐レ樹夷レ藪。」を挙げ、明治６年に浜松城が毀されたとしている。ここでの「濠」が内堀・外堀どちらを指すのか全てを指すのか定かではないが、廃城令の際に堀も埋められた可能性を示している。明治 23（1890）年に書かれた『浜松町精細図』(Fig.61-3) では、浜松城は「浜松城趾」と書かれ、調査地付近は宅地となっており、それ以降の絵地図には堀が描かれておらず、Ⅰ





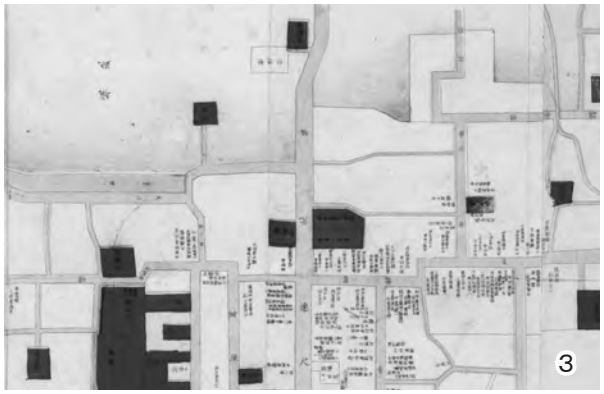


Fig.61　浜松城絵地図（大手門付近を拡大）

1：遠州浜松城図　しろはく古地図と城の博物館富原文庫所蔵

2：明治５（1872）年『浜松城郭』
しろはく古地図と城の博物館富原文庫所蔵

3：明治 23（1890）年『浜松町精細図』

層からの出土遺物に明らかに近代と判断される遺物は認められないため、廃絶時期は明治５（1872）年～明治 23（1890）年の間で、その中でも早い段階と考えたい。

（４）SD01 北側の土塁

34 次調査では、SD01 北側で柱列跡・溝・土坑・小穴などを確認した。江戸時代の絵図では、SD01 北側に土塁及び土塀が描かれているが、SD01 と土塁との間には平坦部や構造物などの表現は無い。『遠州浜松城図』（Fig.61-1）では三の丸で土塁の上に土塀が巡るのは、東海道に面した南面にほぼ限られ、SD01 北側の土塁にも土塀が設けられていたと推定される。調査段階では土塁は削平され残存していなかったが、SD01 のⅠ層は基盤層と同様の土質であることから、元々の土塁構築土は、堀の掘削時期の排土によるものであり、その土塁を廃絶時に崩して堀を埋め立てたと考えられる。

34 次調査の SD01 北側で検出された遺構は、その位置に土塁が存在していた可能性が高いことから、土塁構築以前の遺構と考えられるが、SD02･SK02 を除き遺物が出土していないこともあり、時期・性格の特定は難しい。但し、SA01・SA02 は SD01 と平行に位置していることから、土塁の構築や堀の掘削など三の丸の整備に伴うものである可能性も考えられる。

（５）小結

以上のように、浜松城跡南縁の外堀である SD01 について、その特徴・時期と併せて、北側の土塁についても考察した。SD01 は、今回の調査では堀として機能し始めた時期を示す痕跡は確認できなかったが、両側肩部と部分的ではあるが堀底を確認してその規模を確認でき、出土遺物や堆積状況、絵図や地図の表現などから堀の整備時期を登窯第５小期（17 世紀後葉）より前、廃絶時期を明治期初頭の 1870 年代頃と推定できる。

今後の課題として、SD01 の構築時期の解明が挙げられる。今回の調査では明らかにできなかったが、江戸時代前期までに三の丸の造成・東海道の移設・引間宿の解体と新しい町屋の形成などが

為されたと考えられている（太田 1996）ため、SD01 の構築時期がどこまで遡ることができるのか、堀の内部や縁辺部における今後の調査事例が増えていくことで、明らかになることを期待したい。

３　今後の課題と展望

近世浜松城の外堀と三の丸を対象とした今回の 33・34 次調査は、外堀の両肩部を面的調査によって検出した初の事例となり、部分的ではあるが堀の底面を確認することができた。また、ほとんど調査の手が及んでいなかった三の丸の南部分についても、遺構の残存状況を把握することができた。以下、調査成果についてまとめながら今後の課題と展望を示すことで総括としたい。

外　堀　34 次調査で浜松城三の丸南縁の外堀（SD01）を検出した。東西に延びる外堀の規模は、幅 13.4 m、深さ 5.6 m、検出長 16.4 mである。堀からは瓦や陶磁器等が出土したが、時期は登窯第５～ 11 小期（17 世紀後葉～ 19 世紀中葉）で、とりわけ第 10 ～ 11 小期（19 世紀中葉頃）の遺物が多数を占める。埋土の最上層（Ⅰ層）は基盤層と同質の土であり、城内側から一気に流し込まれたような堆積状況であることから、堀の掘削時の発生土で土塁を構築し、堀の廃絶の際にその土塁を崩して埋め立てたと考えられる。堀の廃絶時期は、絵図等の記録も参考にすると明治初期頃と考えられる。

課題としては、17 世紀前半頃と目されている堀の整備時期の確認が挙げられる。今後の堀の調査の際には、堀の埋土内の層位を慎重に把握しながら調査するとともに、堀の近接部や土塁下部等に残る遺構や包含層等の存在にも留意していく必要がある。

出土瓦　軒丸瓦については、これまでの浜松城跡の調査でも確認されている三ツ巴紋や家紋（桔梗紋、繋九目結紋）が出土したほか、軒平瓦については、三葉牡丹紋や三ツ巴紋、桔梗紋等の新たな類型が確認された。また、鬼瓦の破片が確認されたほか、用途や形状が不明な破片が複数出土した。塀瓦の出土は少なく、土塁上の土塀は大半の時期が本瓦葺きか桟瓦葺きだったと想定される。

新たな類型の瓦については、出土瓦の多くが外堀埋土Ⅱ層（城外側からの流入土）に含まれていたため、今後の調査でもどのような施設で用いられていたのか検証していく必要がある。また、時期の把握が難しい軒瓦等については、瓦当紋の細部や各部位の調整痕の特徴などに時期差を見出せるのか、分析を積み重ねていく必要がある。

三の丸　33 次調査では三の丸南部分において柱列など近世の遺構が確認できた。また、現地と周辺の状況から、南側と西側が高い傾斜地を切土によって平坦に整地している可能性も判明した。遺物は古代から明治期まで幅広く出土したが、三の丸の整備時期に先行～該当するとみられる大窯期～登窯第４小期（16 世紀～ 17 世紀中葉）頃の遺物が一定量出土した点が注目される。

今後の課題としては、三の丸を含む城郭整備の状況の把握が挙げられる。周辺は地形の改変が著しく、残された情報は多くはないが、大窯期の遺物が一定量出土する状況は、城南部の城下町と同様であり（浜松市教委 2017・2020）、本丸・二の丸以南における城郭・城下町の整備がどのように進められたのか周辺地における調査・研究を積み重ねていく必要がある。

近世浜松城は、残されている絵図によって平面的な情報は多く得られているが、実際の地形には高低差があり、土地の造成や利用については不透明な部分が多い。今後も絵図等の情報に、発掘調査等で得られる三次元的情報を付加・蓄積していくことで、浜松城の立体的な把握が進むことに期待したい。

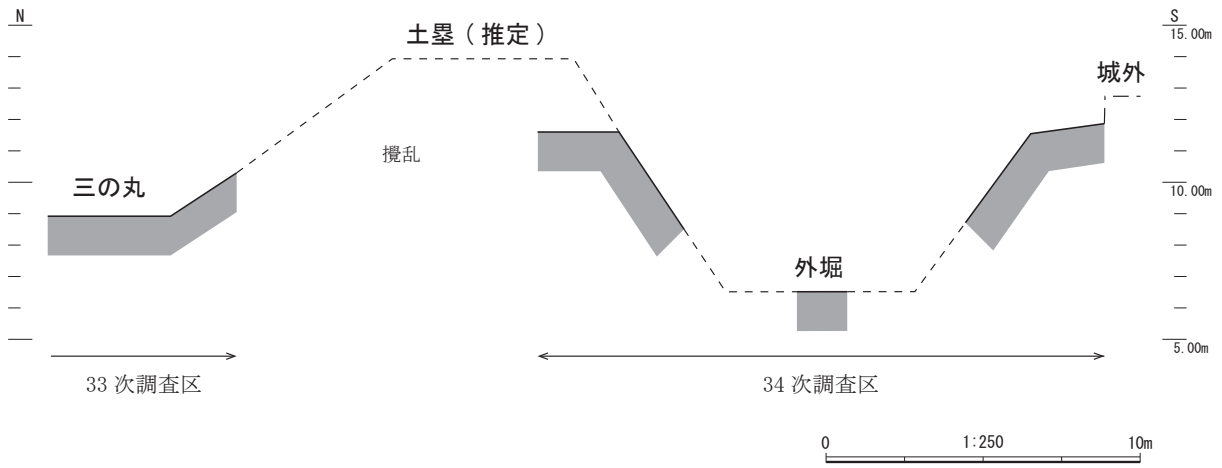


Fig.62　33・34 次調査区縦断模式図

引用・参考文献

飯山伝太郎　1979『町名の由来　静岡・清水・浜松・沼津』
江戸遺跡研究会　2001『図説　江戸考古学研究事典』
大須賀町教育委員会　1986『史跡横須賀城跡　東大手門跡発掘調査報告書』
大須賀町教育委員会　1985『史跡横須賀城跡Ⅰ』
太田好治　1996「浜松城と城下の変遷」『浜松市指定文化財　浜松城跡－考古学的調査の記録－』浜松市教育委員会
小田原市教育委員会　2020『小田原城総構　二重外張第二地点』
加藤理文　2011『静岡の城－研究成果が解き明かす城の県史－』
加藤理文　2012『織豊権力と城郭 - 瓦と石垣の考古学 - 』
金子智　1996「江戸遺跡出土資料に見る近世軒平瓦・軒桟瓦の地方色」『古代』第 101 号　早稲田大学考古学会
古泉弘　1987『江戸の考古学』
杉本宏　2000「桟瓦考」『考古学研究』第 46 号第 4 号
杉山佳奈　2019「序論　浜松城をめぐる環境」『浜松城跡 13』浜松市教育委員会
鈴木一有　2019「後論」『浜松城跡 13』浜松市教育委員会
坪井利弘　1976『日本の屋根瓦』
坪井利弘　1990『図鑑　屋根瓦（改訂版）』
浜松市　1971『浜松市史』２（近世編）
浜松市　1980『浜松市史』３（近代編）
浜松市教育委員会　2017『浜松城下町遺跡』
浜松市教育委員会　2020『浜松城下町遺跡２』
浜松市教育委員会　1996『浜松市指定文化財　浜松城跡－考古学的調査の記録－』
浜松市教育委員会　2013『浜松城跡 8 次』
浜松市教育委員会　2015『浜松城跡 10』
浜松市教育委員会　2016『浜松城跡 11』
浜松市教育委員会　2018『浜松城跡 12』
浜松市教育委員会　2019『浜松城跡 13』
（財）浜松市文化振興財団　2009『浜松城跡 4 次』
（財）浜松市文化振興財団　2011『浜松城跡 5 次』
（財）浜松市文化振興財団　2012『浜松城跡 6 次』
浜松市博物館　1995『浜松城のイメージ』
浜松市博物館　2020『家康公浜松城築城 450 年記念事業　浜松市博物館特別展　浜松城 - 築城から現代へ - 』
兵庫埋蔵銭調査会　1996『日本出土銭総覧』
藤澤良祐　2007「総論　瀬戸大窯の時代」『愛知県史』別編　窯業２　中世・近世　瀬戸系　愛知県
三浦正幸　2016『城のつくり方図典』
水野茂　2015『徳川家康の戦いと城づくり』徳川家康公顕彰 400 年祭シンポジウム・イン静岡　シンポジウム資料集　静岡古城研究会
山崎信二　2008『近世瓦の研究』奈良文化財研究所学報　第 78 冊　奈良文化財研究所

図　版
PLATE

1　33 次調査区　全景（南から）

2　33 次調査区　全景（南西から）

1　33 次調査区北部近景（北東から）

2　33 次調査区南部近景（南から）

1　33 次調査区南部近景（北西から）

2　SK02・SK03・SK04 完掘状況（北東から）

3　SK08・SP14・SP15 完掘状況（北西から）

4　SK09・SK10 遺物出土状況（南東から）

1　SK11 完掘状況（南から）

2　SK15・SP18・SP19 完掘状況（北西から）

3　SK16・SP28 周辺完掘状況（東から）

4　SK28・SK29 周辺完掘状況（南西から）

5　SP22 完掘状況（南東から）

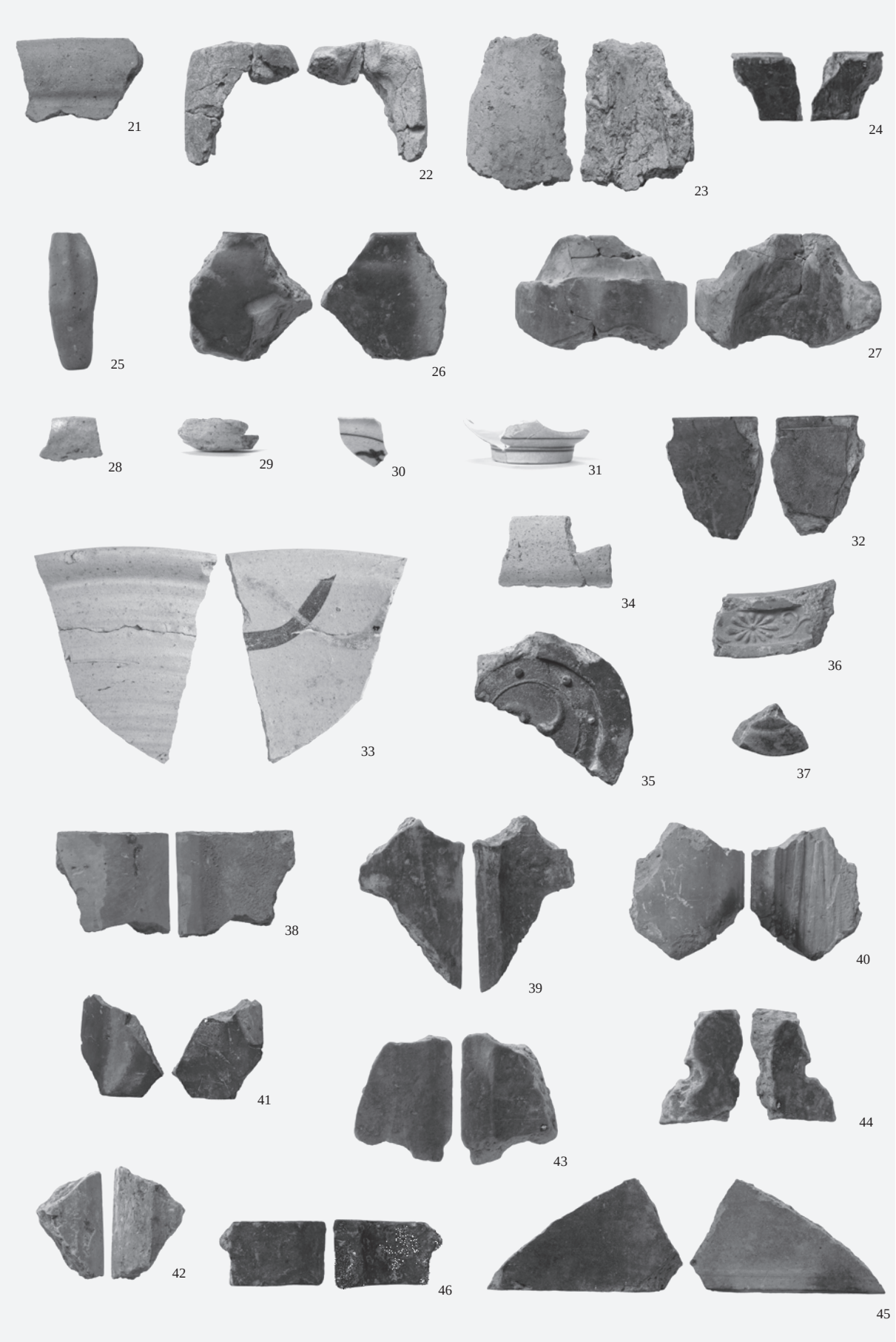
6　SP36 完掘状況（西から）

7　SP37・SP39 完掘状況（南西から）

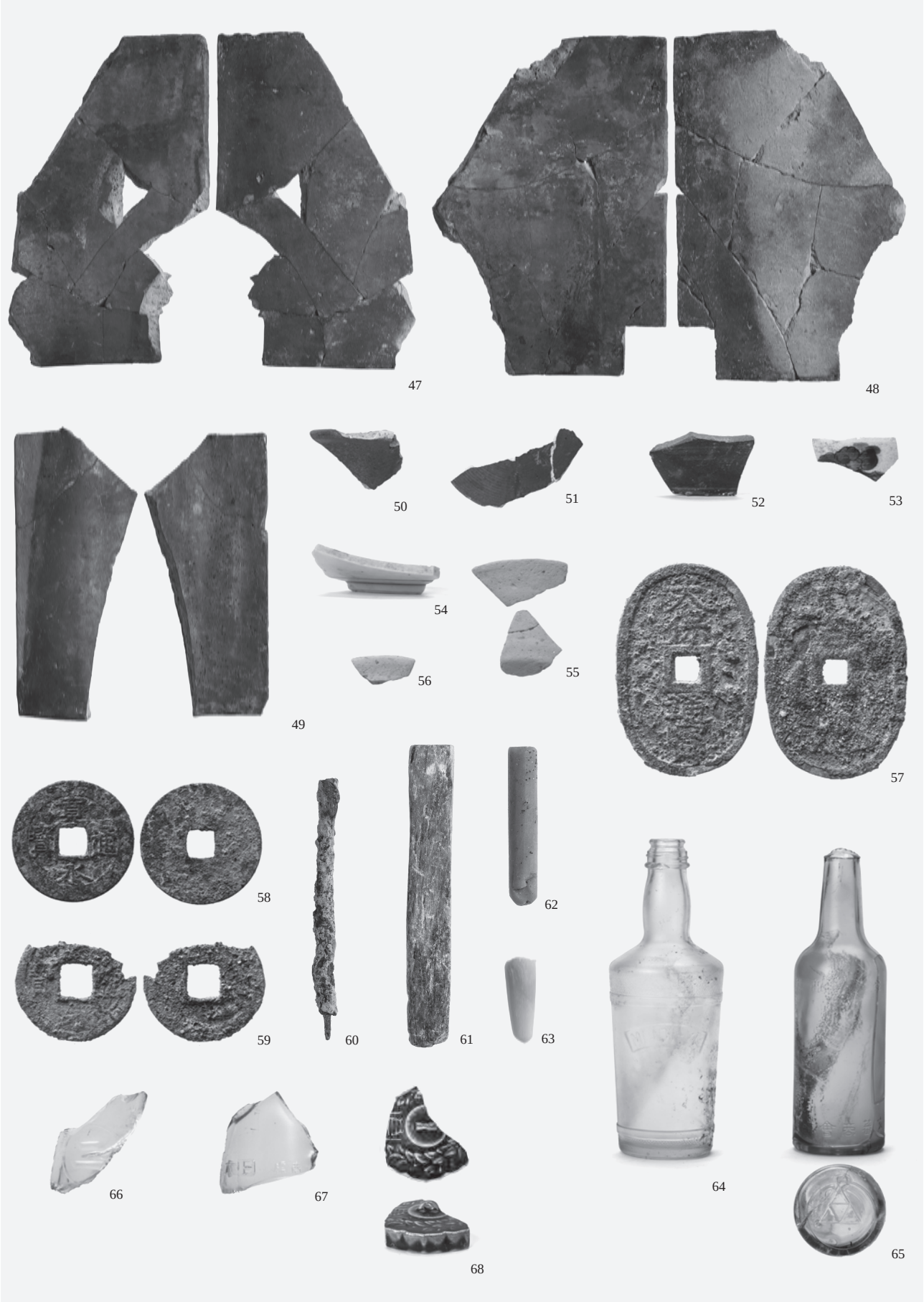
8　SX01・SD08 周辺完掘状況（西から）

33 次調査 遺物写真（1）

PL. 6



33 次調査 遺物写真（2）



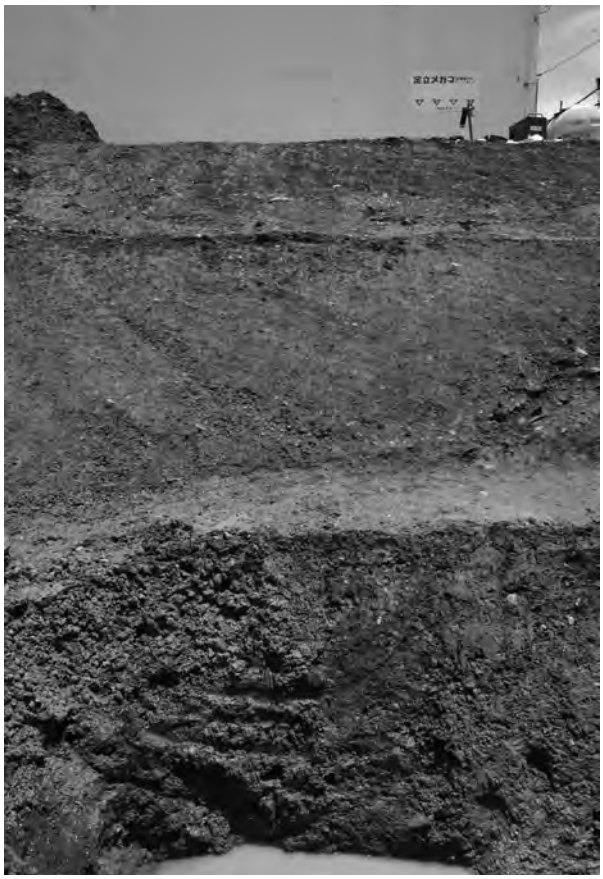
33 次調査 遺物写真（３）

PL. 8

34 次調査区西部完掘状況（北東から）

1　34 次調査区西壁土層断面状況（東から）

2　34 次調査区中央土層断面状況（西から）



1　34 次調査区中央下層土層断面状況（西から）

2　34 次調査区東壁下層土層断面状況（西から）

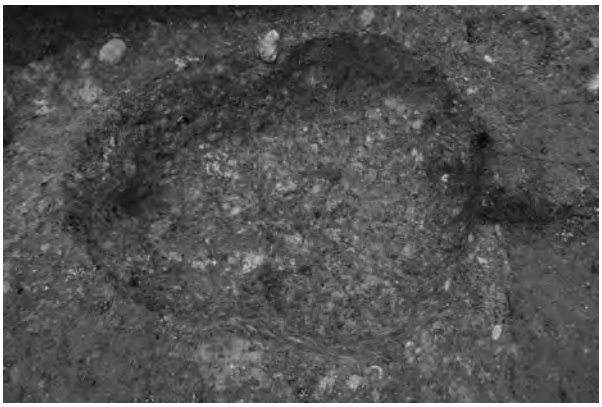
3　34 次調査区東壁土層断面状況（西から）

1　34 次調査 SA01・02 完掘状況（真上から　北が上）

2　34 次調査 SD02 土層断面状況（南から）

3　34 次調査 SD02 完掘状況（西から）

4　34 次調査 SK02 土層断面状況（南から）



5　34 次調査 SK02 完掘状況（南から）

PL. 12

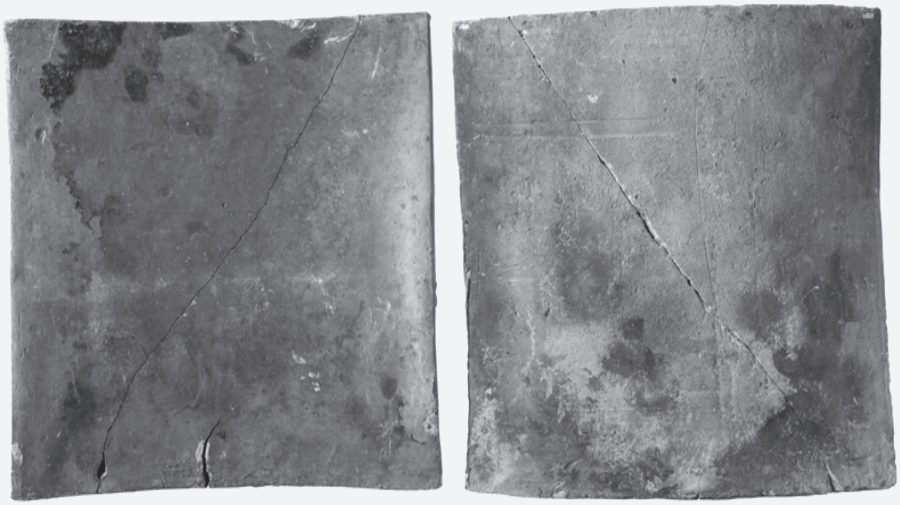
34 次調査 遺物写真（1）

24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49

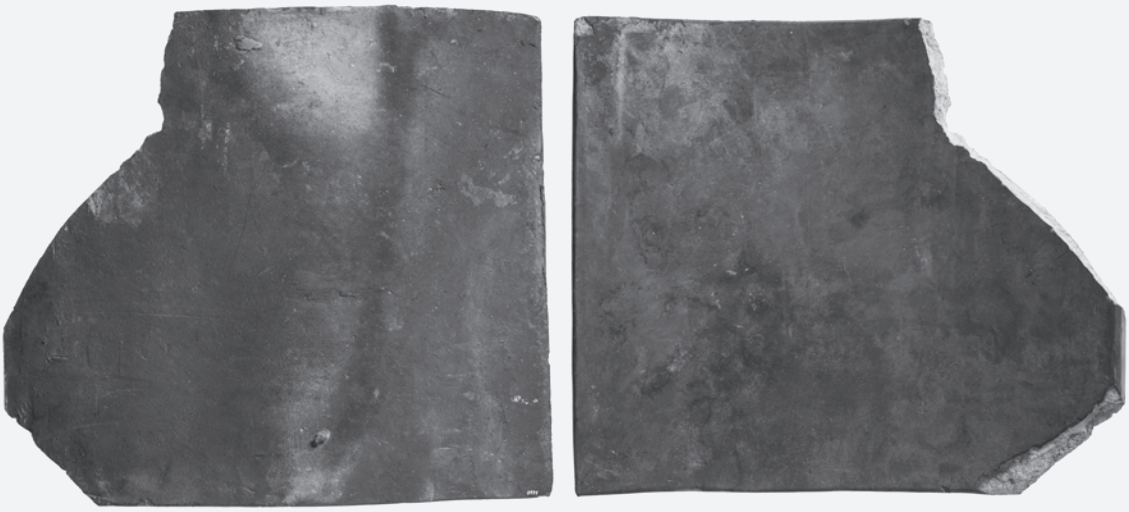
34 次調査 遺物写真（２）

PL. 14

34 次調査 遺物写真（3）



56



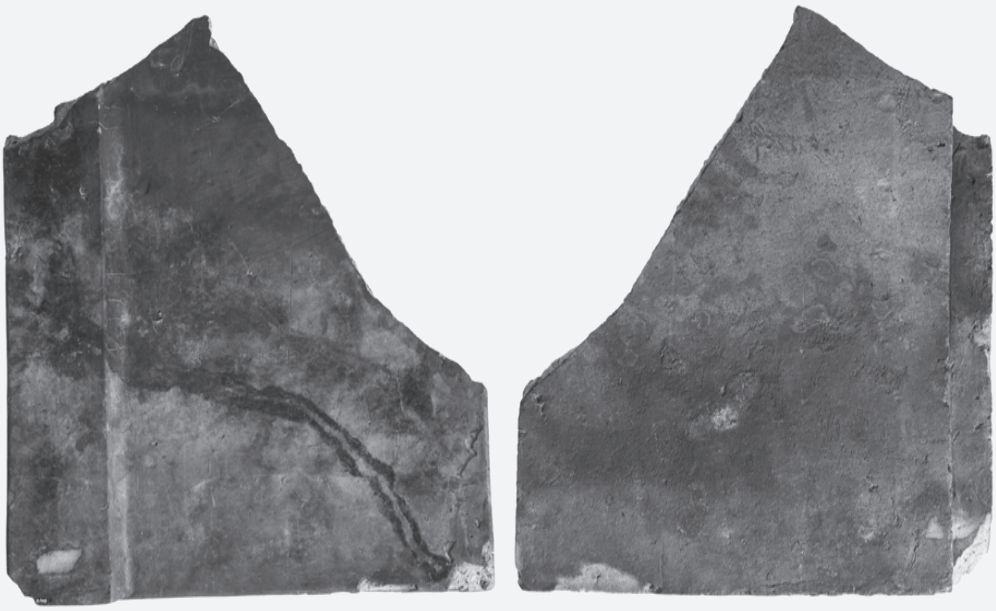
57

58

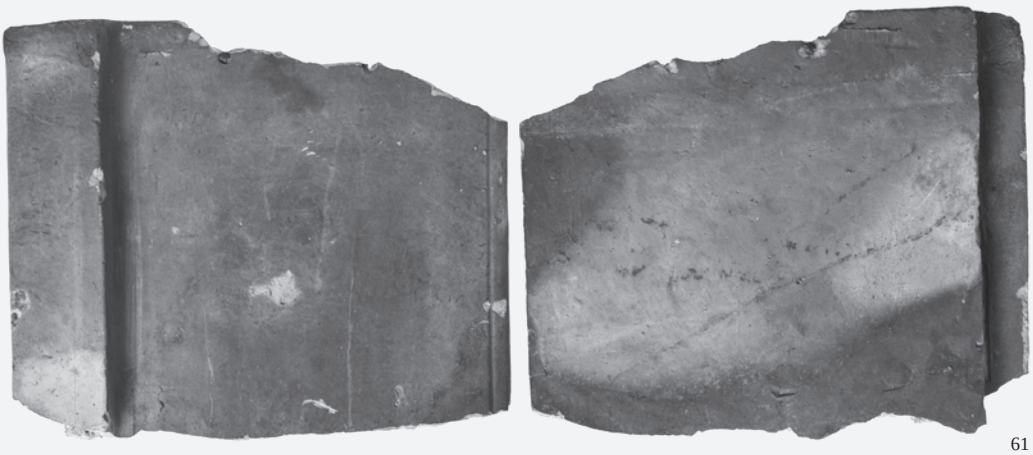
34 次調査 遺物写真（4）

PL. 16

59



60



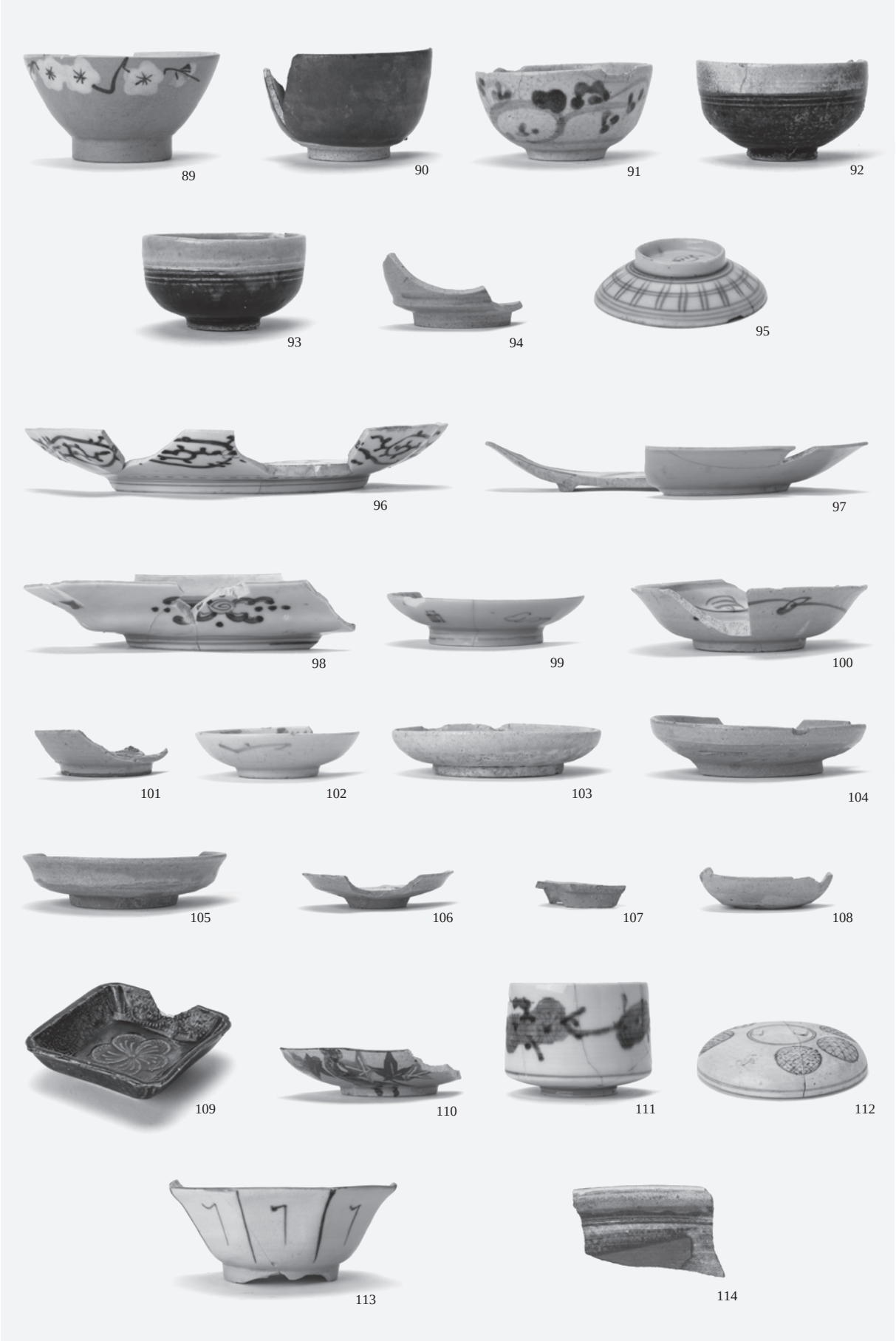
61

34 次調査 遺物写真（5）

34 次調査 遺物写真（6）

PL. 18

34 次調査 遺物写真（7）


89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114

34 次調査 遺物写真（8）

PL. 20

34 次調査 遺物写真（9）

34 次調査 遺物写真（10）

PL. 22

34 次調査 遺物写真（11）

報　告　書　抄　録

書名（ふりがな）	浜松城跡 14　（はままつじょうあと 14）
編著者名	鈴木京太郎・生駒昌史（編）、壁谷奈央
編集機関	浜松市市民部文化財課（浜松市教育委員会の補助執行機関） 〒430-8652　浜松市中区元城町103-2 TEL（053）457-2466　　FAX（050）3730-1391
発行機関	浜松市教育委員会
発行年月日	2021年３月26日

遺跡名（ふりがな）	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
浜松城跡（はままつじょうあと）	静岡県 浜松市 中区 紺屋町	22131	01-04-14	34度 42分 29秒	137度 43分 36秒	(33次調査) 2020年４月16日 ～ 2020年５月１日	200㎡	集合住宅 建設
						(34次調査) 2020年６月15日 ～ 2020年９月２日	389㎡	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
浜松城跡	城跡	江戸時代 明治・大正時代	堀跡 掘立柱建物 柱穴列 土坑 溝	土師器 瓦 陶磁器	三の丸南西部で掘立柱建物や土坑・溝を確認した。 大手門西側の堀跡を検出し、堀西側肩部と部分的に堀底を確認した。

要約	浜松城跡は、浜松市中区元城町にある天守台や石垣を有する平山城である。今まで工事立会や不時発見等を含め50回以上の調査が行われている。 今回の調査は、浜松城跡南端部に位置する三の丸南西部（33次調査）と大手門西側の堀部（34次調査）で行われた。33次調査では近世～近代の掘立柱建物・土坑・溝等を確認した。34次調査では大手門西側の堀跡（SD01）を検出し、両側肩部と部分的に堀底を確認した。SD01から、近世瓦・陶磁器などが多数出土したが、その多くは城の廃絶時に投棄されたものであった。瓦については、太田氏桔梗紋軒丸瓦、本庄（松平）氏繁九目結紋軒丸瓦の家紋瓦や菊紋の軒平瓦に加え、新たに五瓜に桔梗紋の飾り瓦や蔦紋・巴紋の軒平瓦・桟瓦等が確認され、浜松城跡出土瓦の新分類資料も提示できる結果となった。また出土遺物の時期や絵図の検討結果、SD01は明治初期（1872～1890年）に廃絶されたことが明らかになった。SD01北側では土塁は残存していなかったが、土塁構築時又は土塁構築以前の柱穴列・土坑・溝等が確認できた。

浜松城跡 14

2021 年 3 月 26 日

発　　行　浜松市教育委員会

編集　浜松市市民部文化財課
（教育委員会の補助執行機関）
〒430-8652　浜松市中区元城町103-2

印　　刷　松本印刷株式会社

Hamamatsu Castle

The 33rd snd 34th excavation report

A Report of Archaeological Investigation
on 16th-19th Century Castle in Western Shizuoka,Japan

March,2021

Hamamatsu Municipal Board of Education